

爲る力は、だんく多くの力を集める。

その大運動に先立つ豫備時代の十年の間に、この男は、歐羅巴の總ての王冠を頂ける人々と關係を造る。

彼の爲めに裸にされた世界の帝王等が、「榮譽」と「偉大」の愚劣なナポレオンの理想へ何等の合理的な理想をば對抗させ得無い。彼等は、自分等の下ら無いものであるのをナポレオンに示さうと相競つて居る。

普魯西王は、その偉人の最負を請ふが爲めに、自分の妻を彼の許へ使に遣る、奥地利帝は、この男が、カイゼルの娘をば、その寢床へ取つて呉れるのを、恩恵だと考へる。人民の信仰の守護者たる法王が、その偉人の顯達を助ける爲めに、宗教を使ふ。

ナポレオンは、自分が勤める役割に向つて別段用意して居るのでは無くして、彼の周囲の總ての人々の方が、爲されつゝある事柄及びその後爲さるべき事柄の責任をば彼が自から負うやうに、彼を導いて行くのだ。

苟しくも、彼がやる行爲や、罪惡や、卑劣な虚偽で、直ぐ、彼の周囲の人々の口で、偉大なる行爲だとして、云ひ表はされ無いものは一つも無い。

獨逸人がナポレオンの名譽の爲めに考へ出し得た最も適當な祝賀會は、ユナとアウエルスタアトの勝利の祝賀會であつた。

彼が偉大であつたばかりで無く、彼の祖先、彼の兄弟、彼の猶子、彼の義兄弟も、偉大であるのだ。

有らゆる事が何も彼も、理性の最後の閃光を彼から奪つて了まひ、そして、恐しい爲事に向つて彼を用意させて了まう爲めに、爲されて居るのだ。

で、彼が用意が出来た時になるといふと、彼の軍力も、何時でも出られるやうになつて居る。侵入軍は、東へと流れて、最後の結局——莫斯科——に達する。

その古都が取られる、露西亞軍は、アウステルリッツからウァグラムに至る既往の諸戰で、敵對の兩軍が受けたよりも一層多くの損害を受ける。

が、倏忽、此れ迄、彼の豫じめ運命で定まつて居た終極の目的地へと、彼を、成功の不斷の連續で、首尾一貫して、實に整然と、導びいて來たその「偶然」と「天才」の代りに、それは反對の種類、ポロデイノオで引いた風邪から、莫斯科に火を付けた火花に至るまでの、「偶然」的事情が無數に起る、そして、「天才」の代りに、歴史上に例の無い愚行と陋劣が、示め

された。
侵入軍は、逃げ出し、引返へし、再逃げる、そして、總ての偶然は、此度は、一様に、彼の爲めでは無くして、彼に背むいて居る。
それから、此度は、東から西への反對の運動が、それに先立つた西から東への運動と非常に似寄つた風で、續く。

東方への大運動に先立つて、千八百〇五年、千八百〇七年、及び、千八百〇九年に有つたと同なじやうな試験的諸運動が此度も有つた。此度も亦、總ての者が非常な数の一集團に同なじやうに結合する事が有つた、同なじやうに中央歐羅巴の諸人民が、その運動に随合く事が有つた、そして、同なじやうに中途での躊躇が有り、終極地が近づくに随がつて、同なじやうな速力の増加が有つた。

最も先方の終極地の巴里に達した。ナポレオンの政府及び軍隊が崩解してしまふ。

ナポレオンその人も最早何でも無い者である、彼の一切の行爲は、明かに鄙陋で、下劣である、けれども、再説明し難き偶然が起つて来る、同盟國は、ナポレオンに於て、自分等の一切の困却の原因を見るので、ナポレオンを厭ふのだ。彼の權力、彼の力を剥ぎ去られ、詐欺と奸悪を以て罪せられて、彼は、同盟國からは、彼が、十年前にさう有り、又、その一年後にさう有つた通り——法の範圍外の豪賊——に見られるべき筈であつたのだ。が、「偶然」の神の或る不思議な氣まぐれで、誰もさう見る者が無い。

彼の爲事は未だ終つて了まは無い。

十年前には、又、その一年後には、法の外の悪人と見做された男は、同盟國の爲めに、佛蘭西から二日旅程の島へ送られ、そして、彼が何か同盟國の爲めになる事でも爲たのでその報酬でも爲るとでもいひさうに、その島が彼の領地として與へられ、親衛兵と、何百萬かの金銭も、與へられた。

(四)

諸國民の間の動搖は、静まり始める。大暴風雨の波は、静まり始め、そして、渦旋が、静になつた海面の其所所で、出来始め、其所では、外交家等が、忙がしく働きながら、静穩になつたのは、自分等が爲た事だと想像して居る。

が、倏忽、静な海が、再、激動させられる。外交家等は、自分等即ち自分等の不和合がこの

動搖の原因なのだ、想像する、彼等は、自分等の君主等の間に戦が起るだらうと、豫期する、その事態は解決し難く見える。

が、彼等が、起りつゝあると感ずる暴風雨は、彼等が豫期して居る方面からは来無い。

それは、再、元と同じ出發點——パリ——から起つて来る。西方への運動の最終の逆流が次いで来る——その逆流は、一見した所では解き難く見えるやうな外交的難件を解決し、そして、その時代の軍事上の不安を終結させてしまふものであつたのだ。

佛蘭西を荒廢させた男が、單獨で、何の計畫も無く、一人の兵士をも率ずに、佛蘭西へ歸つて来る。何様な警察官でも、一人で、その男を捕縛することが能きなのだ、が、偶然の神の不思議な氣まぐれで、誰も彼を捉へる者が無い、反つて、誰も彼も、自分等が、その直ぐ一日前には呪詛ひ、それから、再一と月経ぬうちに呪詛う筈であつたその男をば、熱心に、迎へる。その男は、劇を終らせる最後の幕には、無くてならぬ人間であるのだ。その幕が演せられる。

最後の役割は演せられる。俳優は衣裳を脱ぎ、彼の装粉や、白粉を洗ひ去るやうに、命せられる。

彼は、最早要ら無いであらう。

で、數年の間、この男は、彼の島の獨居に於て、自分自身に向つて、愨然な喜劇を演じ、陰謀を廻らし、虚言を云ひ、辯明が最早少しも要らぬ時になつて、自分の行爲を辯明する、そして、人間が力だと思つて居たものは、神の見えざる手がそれを使ふ時には、何ういふものであるのかといふことを世界ぢうに示す。

劇が終はり、人形が裸にされるといふと、舞臺監督は、その人形を吾々に示めす。

『お前たちが信じて居たものを、見ろ。それは、此だぞ。見ろ、お前たちを感動させたのは此では無くつて、實際は俺なんだぞ』

が、運動の力の爲めに盲にされて、人間は、長い間、それを認めることが能き無かつた。

それより尙一層の聯絡と避け難き事とが、東から西への逆運動の頭に立つて居た人なるアレクサンドル一世の一生に於て、見られるのだ。

他の何人にも優つて、東より西へのその運動の頭に立つべき筈であつた人には、何ういふ資格が無ければなら無かつたのか？

正義の觀念、歐羅巴の事態に對する利害觀念が、それは、小さい利害觀念の爲めに曖昧にされ無い、すつと立離れた利害觀念が、無ければなら無かつたのだ。

彼の同輩——即ち、當時の帝王等——に優つた道義上の優越が無ければなら無かつた。又、ナポレオンに對する個人的の憤怨を持つ理由が無ければなら無かつたのだ。

で、總てさういふ物が残らずアレクサンドル一世のうちに見られる、筈であるのだ。さういふ物は、悉皆残らず、彼のそれ迄の生涯の無数な所謂の偶然の諸事情に由つて、拵らへ上げられて居たのだ、彼の受けた教育や、彼の治世の始の自由主義や、周囲の顧問等や、アウステルリッツや、ティルシットや、エルフルトに由つて、拵らへあげられて居たのだ。

國を守る爲めの戦争の間は、この人は、何にも爲無いで居る、彼はその時には無くても宜い人間であるのだ。

が、歐羅巴の總戦争が避け難きものになるや否や、然るべき刹那に於て、彼は、彼の居るべき場所に立つ、そして、歐羅巴の諸國民を合同させて、それをば、終極の目的地へと率ゐて行く。その終極の目的地に達する。

千八百十五年の最後の戦争の後、アレクサンドルは、人間の權力の達し得べき最高の絶頂に、自分自身を見出す。

彼は、その權力をば、何う用ゐるのか？

ナポレオンが、彼の流竄の地で、若し、彼が權力を持つて居るのであつたら、人間の上に注ぎ下すのであつたといふ祝福の小見らしい、虚偽の諸計策をば組み立て、居た間に、歐羅巴を平和ならしめた人であり、且、青年時以降、人民の利福に向つての外、何に向つても努力し無かつた人であり、更に又、自分の國に於ける自由的改革の最初の擁護者であつたところの、アレクサンドルの方は、自分が、人間が持ち得べき最も大なる權力を持つて居るやうに見え、且、それ故に、自分の臣民に對し利益になる事を爲し得る位地に立つて居る此の時になつて、自分の爲事は最早それだけで終はつて、神の手が自分の上に置れたのだと感じたのだ、で、その權力らしい物の虚無なることを認めて、それに背を向け、それを、蔑視すべき人々、彼が蔑視して居た人々の手に、委ねて了まつて、唯だ斯う云ひ得たのみであつた——

「吾々にまで、は無い、吾々にまで、は無い、爾の御名にまでなのだ。私も又、君等衆皆と同一な人間なのだ、私にも、人間のやうに生活さして呉れ、そして、私の心靈や神のことを考

さして呉れ』

丁度、太陽も、エーテルの各分子も、それ自身に於て完全な一世界であると同時に、それが非常に廣大であるが爲めに吾々には思量し得られ無い全體の唯だ一部分に過ぎ無いのと同なじやうに、何の個性も皆自己自身の裡に、それ自身の諸目的を持つて居ると同時に、尙又、さういふ諸目的をば人間には測定することの能き無い全般的な諸目的の爲めになるやうに持つて居るのだ。

花に止まる蜜蜂が小兒を整した。さうすると、その小兒は、蜜蜂を怖れ、そして、蜜蜂の目的は人を整すのにあるのだと云ふ。

詩人は、花の萼から蜜を吸ふ蜜蜂をば嘆賞する、そして、蜜蜂の目的は、花の甜液を吸ふにあるのだと云ふ。

養蜂者は、蜜蜂が、花粉を集めて、蜂房へそれを持つて來るのを見て、蜜蜂の目的は、蜜を集めるにあるのだと云ふ。

もつと精密に群の生活を研究した今一人の養蜂者は、蜜蜂は、仔を養ひ、女王蜂を育てる爲

めに、蜜を集めるのであつて、蜜蜂の目的は、その種族の永續にあるのだと云ふ。

植物學者は、花粉を持つて飛んで行く蜜蜂が、雌蕊に授胎するのを見て、即ち、それが、蜜蜂の目的なのだ、見る。

今一人は、植物の雑成を見て居て、蜜蜂は、又、その目的にも貢獻するのだと、見る、そして、蜜蜂の目的は、それだと、云ふかも知れぬのだ。

が、蜜蜂の終極の目的は、前に云つた孰れにも盡きて居無い、又、人間の智力が発見し得る第三の目的にも盡きて居無い。

人間の智力がさういふ目的を発見しやうとだん／＼高く登れば登る程、終極の目的は、人間の智力の到底達し得られ無い所にあることが、ますます／＼明瞭になるのだ。

人間が達し得られる所にある事柄は、蜜蜂の生活が生命の他の諸表現と同様であるといふことを、観察することだけで、歴史的人物及び國民の終極の目的に對する場合も依然同なじであるのだ。

(五)

ナタアシャがベズウホフに結婚したのは、千八百十三年であつたが、それが、古いロストオフ家に於ける最後の幸福な事件であつた。伯爵イリヤ・アンドエーヴィイチは、その同なじ年に死んだ、そして、さういふ場合には何時も有るやうに、父親が死ぬると共に、家は潰れてしまつた。

前の年の事件、莫斯科の焼けた事、市からの逃遁、公爵アンドレーエーの死んだ事、ナタアシャの絶望、ペエティヤの死んだ事、伯爵夫人の悲嘆といふやうな打撃が、續けざまに老伯爵の頭上に落ちた。

彼は、總てさういふ事件の意義を、理解して居無いやうに見え、又、それをば理解することが自分には能き無いのだと感じて居るやうに見えた、そして、假形的に云へば、彼は自分をいよいよ打斃して呉れるやうな新たな打撃を豫期し、且、それを求めて居るかのやうに、暴風雨のやうな不幸の前に、彼の年老つた頭を垂げたのだ。

交りぐに彼は、恐怖れたり、轉動したり、それから、不自然に快活になつたり、活氣を帯びたりするのであつた。

ナタアシャの結婚は、寸時の間、その外形上の側に於て、彼の心を占有した。彼は、その祝の爲めの、晝餐會や、夜食會の取り極を爲、そして、快活にして居やうと骨折つて居る様子であつた、が、彼の快活さは往日のやうに傳染的のものでは無く、反つて、彼を知り、彼を好いて居た人々からの憐愍を喚び起すやうなものであつた。

ピエール夫婦が發つて了まうといふと、老伯爵は、げつそり弱つて、氣が鬱していかぬと、屢云ふやうになつた。二三日経つと、病氣になつて、どつと床に就いて了まつた。醫者が請合つたに拘らず、彼は、病氣になつた最初の日から、決して癒ら無いことを知つて居た。

二週間推つ續けて、伯爵夫人は、伯爵の枕頭の低椅子に坐つたきりで、一度も自分の衣服を脱が無かつた。伯爵夫人が藥を飲ませる度毎に、伯爵は、黙まつて伯爵夫人の手に接吻して、泣いた。最後の日には、彼は、嘔泣しながら、彼等の財産を蕩盡して了まつたことに對して、妻の、又その時不在であつた子息の宥免を請ふた、さう財産を費ひ無くした事が、彼の良心を苦しめた重なる罪障であつたのだ。

贖罪式や、最後の塗膏式を受けてから、彼は、靜に死んだ、で、次の日、知人が群集をなして、死者に對する尊敬の最後の義務を盡す爲めにやつて來て、ロストオフ家の借りた家に充満になつた。彼の家で幾度も食事を爲、舞踏し、幾度も彼のことを笑つたさういふ總ての知人た

ちが、今は、後悔と自責との誰も同なし内心の感情で、自らを辯明しやうとするかのやうに、斯う云つて居た――

「左様だ、此の人が何うであつたにしても、此の人は實に好人であつた。今日日では、斯ういふ人は最早無い……それに、此の人のやうな弱點をば持た無いやうな人が世の中にあるものか?……」

伯爵が、斯う俄に死んだのは、丁度、彼の財産が、彼には、それが、今年一年経てば何うなつて了まうのか、思料し得られ無かつた程までに、最早何うにも爲やうが無く滅茶々々になつて居た時であつた。

父親の死んだ通知がニコライの許へ達したのは、彼が、露西亞軍と共に、巴里に居る時であつた。彼は、直ぐ、解職を願ひ出た、そして、それを待たずに、賜暇を得て、莫斯科へ行つた。

伯爵が死んでから一月経ぬうちに、財政の状態が全く明瞭になつて、さういふ物が有らうとは誰も思つて居無かつたさまぐらな小さい負債の總額が非常な高になるので、誰をも吃驚させた。

負債は、財産の有り高の二倍以上であつた。

朋友や、親類等は、遺産相続を拒むのが宜からうと、ニコライに勧めた。が、ニコライは、さういふ風に拒絶することは、父親の立派な記憶を汚すことになるのだと見做した、で、さういふ方策は聞き入れずに、負債を拂ふ義務と共に、遺産をば、受けて了まつた。

老公爵の生きて居た間は、彼の呑気な人の好きの漠然とした然し力強い勢力の爲めに喰ひ止められて、随分長く黙まつて居た債主等が、衆皆直ぐにニコライをば、責め立てた。世間に極く往々有る通りに、債主等の間には誰が一番先に拂つて貰らへるかといふ競争のやうなものがある、そして、ミイテンカ其他のやうな、負債の拂ひには無く、唯だ贈り物として與へられた約束手形を持つて居た人々が、反つて債主となつて一番酷しく催促する者であつた。

彼等は、ニコライに安静をも與へず、少しの息をも次がせ無かつた。そして(彼等が實際に老伯爵の爲めに自分等の金銭を損して了まつたにしても)その損害に對する責任者であつた老伯爵に對しては憐愍を示した人々が、今は、若い相續者の、自分等との關係だけでは明白に何の罪も無い、而も、自ら進んで、彼等に金銭を拂はうと思つて居る者に對して、無慈悲であつた。

た。

ニコライが訴へた手段は、一つも成功したものは無かつた、財産は、その半分の価格で競賣に附して賣られて了まつた、そして、負債の半分が未だ拂れずに残つて居た。ニコライは、彼の義弟のベズウホフの貸さうと云つた三萬留を借りた。そして、彼が眞の義務だと認められた負債のさういふ部分を拂つた。で、債主等が脅した通りに、残りの負債の爲めに牢獄へ入れられるのを避ける爲めに、彼は、今一度官途に就いた。

軍隊に居れば、次の昇進期には、彼は佐官になるのであつたのだが、その軍隊に入ることは思ひも寄らぬことであつた、何故だといふと、彼の母親が、人生に於ける唯一の絶り所として彼に絶り付いて居たからなのだ。で、莫斯科には居度く無かつたに拘らず、往時から彼を知つて居る知人等の集團の最中には居度く無かつたに拘らず、文官の務は好か無かつたに拘らず、彼は、莫斯科で文官の職に就き、好きな軍服を脱ぎ捨て、了まつて、母親やソオニヤと一緒にシヅツエヴォイ・ヴラゾオクの小さい家に住うことになつた。

ナタアシャとビエールは、この時分は、彼得堡で暮して居た、で、ニコライの狀態は善くは知ら無かつた。義弟から金銭を借りて了まつてからは、ニコライは、義弟には、自分の貧

乏な狀態を隠さうと、能きる限り骨折つて居た。彼は、千二百留の俸給だけで、自分と母親とソオニヤとの生計を立て、行くばかりで無く、母親をして、彼等の貧乏なことに氣が付かざらしめるやうな風に、暮して行か無ければなら無かつたのだから、彼の狀態は尙一層困難になつた。伯爵夫人は、自分の小兒の時分から慣れて居た贅澤な周圍無しな生活が能き得るものとは思料し得無かつた。で、それが自分の子息に何れ程困まることであつたのかといふことなどは一向氣が付かずに、伯爵夫人は、何時も、自分等が馬車を持つて居無かつたのに、朋友をば馬車で迎へにやれとか、高い旨い物を買つて來いとか、子息に葡萄酒を何時も飲むやうに爲ろとか、ナタアシャか、ソオニヤか、ニコライ自身が驚ろくやうな贈物を買ふ金銭を呉れとか云ひ張るのであつた。

ソオニヤは、生計を賄ひ、伯母の世話を爲、聲高く伯母に書を讀んで遣り、伯母の氣まぐれや、伯母の自分に對する心の底の厭惡を堪らへ、ニコライを助けて、自分等の甚く貧乏になつた狀態を、老伯爵夫人に、隠して居た。

ニコライは、ソオニヤが彼の母親に向つて爲て呉れた一切の事に對して、彼には決してソオニヤに對して拂ひ返すことの能き無い感謝の負債を負つて居るのだと感じた、彼は、ソオニ

ヤの忍耐や忠實に感服した、けれども、彼は、ソオニヤからは離れて居やうとして居た。

彼は、心の底では、ソオニヤが餘りに缺點が無く、何處にも非の打ち所が無いのに對して怨恨のやうなものを感じて居るやうに見えた。ソオニヤは、人がそれに由つて貴ばれるところの良い性質を悉皆具へて居た、が、ニコライをしてソオニヤを戀させるやうに爲る物は殆ど何も持つて居無かつた。で、彼は、ソオニヤを貴べば貴ぶ程、ますますソオニヤを戀すること少くなるのであつた。で、彼は、ソオニヤが彼に自由を與へるといふ手紙をよこした時の言語通りに、ソオニヤの考慮を取つて居た、で、今は、二人の間に嘗て在つた事件は、最早長い前に忘れられて了まつたものであつて、最早何様な事情が有つても決して復活せしめられることの無いものであるかのやうに、ソオニヤに對して、擧つて居た。

ニコライの状態はだん／＼甚くなつて行くのであつた。俸給の中から幾程づゝか貯めて行かうといふ期望は、空な夢になつて了まつた。若干か貯めることどころか、彼は、母親の臨時の入用を満たす爲めに若干かづゝ小さい借金が増えて行く位であつた。

その状態から脱け出る方は何うしても無かりさうに見えた。彼の女の親類たちが勧めた金持の繼嗣娘と結婚するといふ考想は、彼に取つては、甚く厭なことであつた。それより外の、困

却を脱する唯一の解決の方——母親の死んで了まつた事——は、決して、彼の頭へは入つて來無い事柄であつた。彼は、何を欲し無かつた、何の期望をも持つて居無かつた、そして、心の底では、自分の状態をば、何の愚痴をも云はずに堪へて居ることに、酷しい、陰鬱な満足を感じて居るのであつた。彼は、自分に同情して、助力を爲やうと云つて來る往時からの知人たちを、五月蠅がつて、それを避けるやうに爲た、有らゆる種類の催や娛樂を避けた、そして、家に居る時でさへ、何にも爲すに、唯だ母親とベエシエンスの勝負を爲るとか、黙まつて部屋の裡を歩いて居るとか、烟草を烟管で續けざまに飲んで居るとか、爲て居るのみであつた。彼は、自分に取つてはそればかりが彼に自分の状態を堪へしめるやうに爲たその陰鬱の氣分をば、骨折つて續けて居るやうに見えた。

(六)

冬の始に、公爵嬢マリイヤが、莫斯科へ着いた。町の噂に由つて、公爵嬢は、ロストオフ家の状態や、風説の所謂『子息が母親の爲めに自身を犠牲に供して居る』様子を、聞いた。「彼の人は、必定さういふ人だと私思つて居たわ」と、公爵嬢マリイヤは、その事の裡に、

ニコライに對する自分の戀愛の心嬉しい確め所を見出して、獨りで云つた。その家族全體との——殆どそのうちの一人としての——自分の親しい關係を憶ひ起して、公爵嬢は、その家族を訪問するのが自分の義務だと思つた。が、ヴロネエスでのニコライと自分との關係を考へて、公爵嬢は、訪問するのを恐れた。けれども、莫斯科に着いてから二週間すると、公爵嬢は、奮發して、ロストオフ家の人々に逢ひに行つた。

ニコライが公爵嬢を迎へた最初の人であつた。それは、ニコライの部屋を通らずには、伯爵夫人の部屋へは行け無かつたからであつたのだ。公爵嬢を見るや否やニコライの顔には出て來るだらうと、公爵嬢マリイアが思つて居た喜悅の表情は、出て來無いで、彼は、冷たい、ツンとした、傲然とした——公爵嬢には、彼の顔でこれ迄一度も見たことの無い——顔容で、公爵嬢を迎へた。ニコライは、公爵嬢の健康を尋ね、母親の所へ公爵嬢を案内し、それから、五分位其所に居てから、部屋から出て行つた。

公爵嬢マリイアが伯爵夫人に別れて來るといふと、ニコライは、再公爵嬢を迎へて、如何にも儀式ばつた、ツンとした風で、廣室へと、公爵嬢を送り出した。彼は、伯爵夫人の健康に就ての公爵嬢の言語には、何とも返答し無かつた。

「それが、貴女に取つて、何なんだ？。何卒、私の事なんぞ構はず置いてください」と、彼の表情が云つて居るやうに、見えた。

「で、何故、彼の女は、此所へ入り込んで來たんだらう？。何の用があるといふんだらう？。俺は、彼様な婦人たちや、此様な禮儀なんぞは、一切、最早堪まら無い程、厭なんだ」と、彼は、公爵嬢マリイアの馬車が家から駆け去つて了まつてから、如何にも癪に觸つて堪らぬらしい態で、ソオニヤの前で、聲高に云つた。

「あ、何だつて、其様な事を云ふのよ、ニコライ」と、ソオニヤは、嬉しさを殆ど隠し切れ無い態で、云つた。「彼の方は、眞個に親切な方よ、母上様は、彼の方が眞個にお好きなのよ」

ニコライは、何とも返答し無かつた、そして、公爵嬢マリイアの事は最早その上何も云は無いのであつたらう。が、公爵嬢が訪ねて來てからといふものは、伯爵夫人が、毎日、幾度か公爵嬢の事を云つた。

伯爵夫人は、公爵嬢を褒め立てた、子息に是非公爵嬢を訪問しろと云つて止ま無かつた、何うか公爵嬢に度々逢ふやうにして貰ひ度いと云つた、それで居ながら、公爵嬢の事を話して

居る時には、伯爵夫人は、何時でも、機嫌が悪るかつた。

ニコライアイは、母親が公爵嬢の事を話す時には、何にも云は無いやうにして居た、が、彼の黙まつて居ることが、母親をうれさした。

「彼の女は、眞個に善い、方正とした娘だよ」と、伯爵夫人は、云ふのであつた。「是非、訪ねて行つておあげなさいよ。何にしても、お前は、誰かと交際無ければいけません、家の者ばかりでは、退屈せう」

「でも、私は、寸毫もさう爲度く無いんです、母上様」

「まあ、可訝しいぢや無いかね、お前さんは、往時には、人を訪ねるのが好きだつたのに、此頃は、それが厭におなりのかい。何だか、異様ね、お前。今、退屈してると思ふと、直きに又、人を訪ねる氣が無くなるんですね」

「いや、私は、一度も退屈だと云つたことはありませんですが」

「まあ、お前さんは、彼の女を訪ねる氣さへ無いと云ふんですね。彼の女は、眞個に善い娘ですよ、お前さんは、これ迄何時でも彼の女が好きぢやア無かつたの、それなのに、今は、不意に、お前さんは、何うかした理由で、彼の女を好かなくなつたんですね。何でも彼でも、私

には秘密なのね」

「いや、決して其様な事はありません、母上様」

「何も、私が、何か可厭な事をお前さんに頼むんでは有るまいし、これは、唯だ馬車で、訪問の答禮だけ爲て来てくださいと頼むだけぢやアありませんか。もし、それが禮儀といふものなんですよ、まあさうだらうと私思ひますね……何卒さうしてくださいよ、最早それつ切りで、お前さんは現在の母親の私に、何か秘密の考慮を持つておいでなのだから、私何も餘計な干渉は爲やしませんわね」

「けれども、貴女が行けと仰しやるんなら、私は行きます」

「私には何うでも宜い事なんですよ、けども、お前さんの爲めにさう爲て貰らひ度いんですよ」

ニコライアイは溜息した、口鬚を噛み、骨牌を配つて、母親の注意をば、他の問題へ轉じさせやうと爲た。

次の日にも、三日目にも、四日目にも、同じ談話が、幾度と無く繰り返された。ロストオフ家を訪問して、ニコライアイから、思ひ掛の無い冷たい迎へられやうに、逢つてか

ら後で、公爵嬢マリイヤは、自分が訪問する最初の人であり度く無かつたと思つたのは、間違では無かつたのだと、自ら認めた。

「眞個、私の思つてた通りだつた」と、公爵嬢は、自分の自尊心をば、自分の助力にと呼び出して、獨りで云つた。「私は、彼の人の事なんぞ何うでも宜い、私は、老伯爵夫人に逢ひ度いと思つただけなんだわ、彼の女は、何時も私に親切にしてくだすつたし、私は、彼の女に對しては、種々な事でお世話になつて居るんだから」

が、公爵嬢はさういふ回想では、自分を落ち着かせることが能き無かつた、自分の訪問のこゝとを考へるといふと、後悔に近いやうな感が、公爵嬢をいら／＼させた。公爵嬢は、最早ロスとオフ家を訪問せずに、その家族のことは何も彼も忘れてしまはうと、固く決心を爲たもの、何時も自分が何方とも極まら無い位地に居る氣がした。で、さう自分の心を悩ませる物は何だらうかと、自ら問ふて見るといふと、それは、自分とロストオフとの關係であることを認め無い譯には行か無かつた。彼の冷たい、儀式張つた調子は、公爵嬢に對する彼の感情から出て來たものでは無かつた（その點は、公爵嬢は確にさうなのだ）と確信して居た、それは、その下に何物かを隠して居るのだ。その何物か、何であつたのか、公爵嬢は、それを瞭乎と見度いと

思つた、で、それが分るまでは、何うしても落着た氣にはなれ無いのだと、感じたのだ。

冬の中頃に、公爵嬢は、甥の稽古を監督しながら、稽古部屋に坐つて居た、と、家僕がロストオフが下へ來て居ると、取り次いだ。自分の秘密を外へ現はさず、モヂ／＼する様子を見せまいと、固く決心して、公爵嬢は、マドモアゼル・プウリアンヌを喚び出し、それと一緒に、客室へ入つて行つた。

ニコライの顔を一目見るといふと、公爵嬢には、彼が、唯だ禮儀上の義務を果しに來ただけだといふのが分つた。で、彼が公爵嬢に對して取つた調子に合せて行かうと決心した。

彼等は、伯爵夫人の健康のことや、雙方とも知つて居る知人たちのことや、戦争の最近の報知のことを、話し合つた、で、禮儀上でそれだけは居無ければならぬ十分が過ぎてしまふといふと、ニコライは、起つて暇乞を爲やうと爲た。

マドモアゼル・プウリアンヌの援助を得て、公爵嬢マリイヤは、談話をばなかく巧く續けて居た。が、極く最後の刹那、丁度ニコライが起つた時には、公爵嬢は、自分に何の興味も無い事柄の談話に甚く倦み果て、何故人生では、自分に對しては、其様な僅の喜悅しきや與へられぬのだらうと、甚く考へ込んで居たものだから、靜乎と動かすに坐つて、輝いた眼で、

自分の前を真直に見詰めて、ニコライが立ち上るのに、気が付か無かつた位であつた。

ニコライは、公爵嬢を見た、そして、公爵嬢の虚心の様子に気が付いたやうに見え無いやうに爲やうと思つて、マドモアゼル・ブウリアンヌに一言二言云つて、そして、再公爵嬢を一才と見た。公爵嬢は、同なじ姿勢で坐つて居た、そして、その和かな顔には苦痛の様子が現れて居た。

彼は、不意に、公爵嬢に對して氣の毒に感じた、そして、公爵嬢の顔で見た悲哀の原因は自分であるかも知れぬと、臆氣ながら気が付いた。彼は、何うにかして公爵嬢の援助になり度いと思ひ、何か心持の好い事を云ひ度いと思つた、が、公爵嬢に何ういふ事を云つたら宜いのか何うしても思ひ付け無かつた。

『左様なら、公爵嬢』と、彼は云つた。

公爵嬢は、はつと氣が付いて、顔を赤くして、深い溜息を爲た。

『あら、何うも失禮』と、公爵嬢は、睡眠から覺めたかのやうに、云つた『最早お歸りなんですか、伯爵、では、左様なら。あ、伯爵夫人にあげる褥枕は？』

『一寸とお待ちください、私が取つて参りますから』と、マドモアゼル・ブウリアンヌが

云つて、部屋を出て行つた。

二人は、雙方とも黙まつて、時々顔を見合せて居た。

『左様、公爵嬢』と、ニコライは、到頭、悲しさうな笑顔で云つて、『彼時からさう長くは經つて居ませんね、けれども、貴女にボクチャアロヴァで始めてお目に掛つて以來随分種々な事が起りました。吾々は、誰も彼も、彼の時分には、困まつて居ました。けれども、彼の時分を歸つて來させることが能きるといふのなら、私は、今持つて居る物を随分多量捨て、も惜しく無いと思ひますよ……でも、最早それを歸つて來させやうは、何うしてもありませんね』

公爵嬢は、ニコライがさう云つて居る間、輝いた眼で、ニコライを凝乎と見て居た。公爵嬢は、彼の言語の裡の、自分に對する感情をば明瞭にするだらうと思はれるやうな、秘密な意味を見透さうと骨折つて居るやうに見えた。

『左様です、左様です』と、公爵嬢は、云つて、『ですけども、貴下は、過ぎた事を残念にお思ひなさるには寸毫も及ば無いぢやありませんか。今の貴下のご生活が、私が考へます通りなのなら、貴下は、何時も満足してそれをお考へなさるでせう。何故だと云へば、今貴下がなすつておいでの自己犠牲は……』

「貴女のお賞辭には應じられませんよ」と、ニコライアイは、急いで、公爵嬢の言語を遮ぎつた。「私は、反つて、自分を非難して居るんです、いや、面白くない、心の浮かぬ問題です」

で、再、ツンとした冷たい表情が、ニコライアイの顔へ、歸つて来た。

が、公爵嬢は、彼に於て、今再、自分が知り且愛して居たその人を見た、で、公爵嬢が今話して居るのは、唯だその人に向つて、あつた。

「貴下は、私がさう云ふのを許してくださいるのでせうと、私は思つて居ました」と、公爵嬢は云つた。「私は、貴下とは、大變お親しい朋友でした……貴下のご家族とね、ですから、私、貴下が、私の同情を干渉だとは思ひなされるまいと、思つて居ましたんです、でも、私思ひ違ひを爲て居ました」と、公爵嬢は、云つた。公爵嬢の聲は、不意に、震えた。「何故だか分りませんけども」と、公爵嬢は、自分を回復して、言語を續け、「貴下は、何時でも今のやうでは無かつたんです、で……」

「何故だかといふ理由は實に種々あります」(彼は、何故といふ語を、特に力を入れて云つた)。「有り難う、公爵嬢」と、彼は低い聲で云ひ足した。「時には、辛い事です……」

「では、理由はさういふのか。さういふ理由からなのか」と、公爵嬢の心の奥では、心内の

聲が云つて居た。「左様だ、私が、此の人に於て、愛して居たのは、彼の快活な、親切な、率直な凝視ばかりでは無く、彼の奇麗な外形ばかりでは無かつたのだ、私は、此の人の氣高い、確乎した、自己を犠牲にする心を見透したのだ」と、公爵嬢は心の裡で云つた。

「左様だ、此の人は、今は貧乏だ、私は金持だ……左様だ、理由は、それだけなんだ。左様だ、若し、さうで無かつたのなら……」

で、ニコライアイの往時の優しさを悉皆憶ひ起し、今、彼の親切な、悲しさうな顔を見て、公爵嬢は、倏忽、彼の冷々として居る理由を、理解した。

「何故ですか、伯爵、何故ですか？」と、公爵嬢は、不意に殆ど叫ぶやうにして、我知らず、ニコライアイへ近く動いて行つた。「何故ですか、私に話してください。是非話してください」

ニコライアイは、黙まつて居た。

「私は、何故だか解りませんよ、伯爵」と、公爵嬢は、言語を續けた。「でも、私は悲しいんです、私……私はそれを貴下には隠しません。貴下のお言語では、何か理由があつて、往時のやうにお心安くしてくださる譯に行か無いといふのですね。で、それが、私には實に苦しいんですわ」

公爵嬢の眼と聲に涙が有った。

「私は、人生では、眞個に少しの幸福しきや持つて居ません、ですから、何でも失ふことが私には辛いんです……ご免なさいまし、左様なら」

公爵嬢は、不意に、泣き出した、そして、部室から出て行かうと爲た。

「公爵嬢。此所に居てください、後生です」と、ニコライは、叫んで、公爵嬢を止めやうと爲た。『公爵嬢』

公爵嬢は、見返つた。二三秒間、二人は黙まつて、相互に眼を見合せて居た、と、遠い、有り得無かつた事が、不意に、極く近く、有り得べく、そして、避け得られ無い事に爲つた。

(七)

千八百十三年の秋に、ニコライは、公爵嬢マリヤと結婚した、そして、妻と、母親と、ソオニヤとを伴つて、荒涼丘に住ふことに爲つた。

四年以内に、彼は、妻の領地を賣らずに、自分の負債の残つて居た分を拂つて了まつた。そ

れから、従兄が死んだ爲めに遺産を受けたので、それで又、ビエールから借りて居た金銭を返して了まつた。

今年三経つて、千八百二十年になるまでに、ニコライは、彼の財政を非常に巧く扱かつたものだから、彼は、荒涼丘に續いた小さい領地を買ひ、それから又、オツラアドノエの彼の祖先傳來の領地を買ひ戻す談判を開いて居た位であつた——その領地を買ひ戻すが、彼の何時も忘れ無い宿望であつたのだ。

最初は、已を得ずに、土地の世話を爲したのだけれども、彼は、直きに、それが、彼の好きな、何よりも面白く思ふものになつた程の、熱心をは農業に對して感ずるやうに爲つた。

ニコライは、普通の農業者で、改良を好ま無かつた。特に、その時分流行りだして居た英吉利流の改良を好ま無かつた。そして、農業に關する總ての理論的な著書を笑ひ、製造所を建てるとか、價の高い農産物を作るとか、價の高い輸入の種を播くとか、いふやうな事を爲る氣は一向無かつた。彼は、實際、爲事の或る一部に力を入れるのを得意にするやうなことは無く、何時も、領地全體の利害を眼の前に置いて置くのであつた。

領地のなかで、彼が一番重じて居た物は、窒素でも無ければ、地中の酸素でも無く、空氣で

も無く、特殊な鋤でも無く、又、肥料でも無くして、それは、窒素や、酸素や、鋤や、肥料などをして、悉く有効ならしむるものである所の重なる働作力——即ち、労働者、農夫——であつたのだ。

ニコライが、土地の監理をやりだして、その種々な業務に立ち入り始めるといふと、農夫といふものが、彼の主な注意を引き付けた。彼は、農夫をば、唯だ道具としてのみでは無く、尙又、それ自體としての目的、自分の批評者と、見做した。始めは、彼は、注意深く農夫といふものを研究して、農夫といふものは、何ういふものを要求して居るのか、農夫は、何ういふものを善と考へ、何ういふものを、悪と考へて居るのか、さういふ點を理解しやうと試みた。で、彼は、種々な取り極めを爲、命令を出して居るやうな風を爲て居たのみで、實際は、彼は、農夫等からして、彼等のやり方や、言語や、何ういふものが善で、何ういふものが悪だといふ彼等の考想などを、學びつゝあつたのだ。

で、彼が、農夫の趣味や衝動を理解し、彼等の言語を話すことを覺え、彼等の言語の裏に隠れて居る意味を掴むことを覺え、自分が彼等と全く合同したやうな心持が爲た時になつて、其所で始めて、彼は、大膽に農夫を指揮する——即ち、自分に對して豫期されて居た任務をば、

農夫に對して、成す——ことを、やりだしたのであつた。

で、ニコライのやり方は、非常に立派な結果を表はしたのだ。

財産の監理をば自分の手に取るといふと、ニコライは、直ぐに、洞察の或る過またざる天賦の力で以つて、執事とか、村長とか、代表者とか、いふものに、若し農夫等に選擇權が有つたら、農夫等自身が、選んだのであつたらうと思はれるやうな、丁度さういふ人間をば、選んだ、そして、さういふ人間に一たび與へた權威は決して引つ込められることは無かつた。

肥料の化學的成分を調べたり「借の部、貸の部」ニコライは、簿記のことを、斯う嘲弄的に云ふのであつた）を調べたりするに先だつて、ニコライは、農夫等が持つて居る牛馬の數を發見し、そして、その數を増すことに、能きるだけ力めるのであつた。

彼は、農夫の家族をば、大規模に、一緒に居させ、それが別々の家に割れ無いやうに爲た。怠惰者、放蕩者、虚弱者に對しては、彼は、何れにも同様に厳しかつた。そして、さういふ者どもは皆、團體の中から追ひ拂ふやうに爲た。種播時や、干草、穀物を運び入れる時分などは、彼は、自分の野も、農夫の野も、全く同なじ注意で、見張つて居るのであつた。で、それ程早く、そして、それ程善く、播かれたり、刈られたりする野を持つて居る地主は、其邊には

殆ど一人も無く、又、ニコライ程好い收穫を持つ者も、殆ど一人も無かつた。

彼は、家内の隷奴をば何うとか爲ることは好ま無かつた、彼は、さういふ者どもをば、「寄生者」と呼んだ。そして、誰も、彼は、家内の隷奴をば、悪くし、附け上らしてしまふのだ、と云つて居た。何か命令をば、家内の隷奴に關する事で、出さなければならぬ時になると、殊に、誰かを罰し無ければならぬ時などだと、彼は、何時でも、不決斷の状態で、家の中の有らゆる者の意見を尋ねるのであつた。が、兵に、農夫の代りに、家の隷奴を遣ることが能き得る時には、何時でも、彼は、隷奴の方を、兵に遣つて了まつて、少しも後悔し無かつた。

農夫との交渉は、何様な場合でも、彼は、決して寸毫の躊躇も爲無かつた。自分が與へる有らゆる命令が、農夫の多數には賛成せられるといふことを、彼は知つて居たのだ。

彼は、決して、人を罰するのに、その者の重荷を増すやうな罰し方を爲たり、又は、自分一個のさう爲度いといふ望のみで、先方の爲事を軽くして、それを賞したりするやうなことは無かつた。彼は、自分が何ういふ事を爲べきのか、何ういふ事は爲て悪いのかといふ標準が何ういふものであるのか、云ひ得無かつた。が、彼の心の裡には、確乎とした、チャンと極まつた標準が有つたのだ。

或る失敗とか、不始末の話を爲る時には、彼は、屢、「吾々の露西亞の農民」と云つて、こぼすのであつた、そして、彼は、自分は、農夫に對して、堪えて居ることは能き無いのだと、想像して居た。

が、彼は、全心を以て、眞に「吾々の露西亞の農民」と、その農民の風俗、習慣とを、愛して居たのだ。で、さういふ所に依つて、彼は、土地を監理する方法のうちで、好い結果を來たせ得る唯一の方法である所のものを、認め、且、それを採用した。

伯爵夫人マリイヤは、農業に對する良人の斯ういふ熱情をば、嫉んだ、そして、自分もさういふ熱情を持ち得無いのを、残念に思つて居た。が、伯爵夫人は、自分とは掛け離れた、自分とは全然交渉の無いその世界で、自分の良人が遭遇つた喜悦や失望をば、了解することが能き無かつた。伯爵夫人は、良人が、曉味に起きて、午前中を、野や、穀打場で、送つてから後で、種播とか、刈入れとか、收納とか、から、伯爵夫人と一緒に茶を飲む爲めに、歸つて來た時に、何故、良人がさうまで殊に熱心で、嬉しさうで、何時もあるのか、解ら無かつた。

伯爵夫人は、良人が、可なりな身代の、つましい生活の、農夫のマツヅエー・エルミイシンといふのが、家族ちう皆な徹夜をして、穀物の束を運んで、他の誰も一人として未だ收納を

始め無いうちに、悉皆收納を終はつて了まつたといふ事をば、伯爵夫人に話した時に、何故、良人が、さうまで嬉しがつて居るのか、解ら無かつた。

伯爵夫人は、暖な、霏雨が早魃で苦しめられて居た彼の若い燕麥の上に降りかゝりだすといふと、何故、良人が、窓から露臺へと出て行つて、口鬚の下で微笑んで、甚く嬉しさうに胸を爲るのか、解ら無かつた。或は又、物凄しい雲が、刈り入れ、若くは、收納時に、吹き去つてしまふといふと、何故、彼が、赤くなり、日に焼けて、汗みづくになつて、髪に苦蓬の嗅が付いて、納屋から、家へ入つて来て、さも嬉しさうに、手を擦り合せながら、「さア、斯ういふ日が今日で、俺の分も、農夫の分も、悉皆納屋へ入つて了まうせ」と、云ふのであつたのか、解ら無かつた。

尙一層、伯爵夫人には、解し得られ無かつた事は、良人が、非常に親切であり、且、伯爵夫人の願望をば何時でも善く察して呉るのであるのに拘らず、爲事を休ませて呉れと云つて、農夫とか、その妻たちが伯爵夫人に頼んで来た請願をば、良人に取り次ぐといふと、良人が、殆ど絶望の有様になつて了まふ事であつた。それから、又、人の好いニコライが、何うして、伯爵夫人の頼みを頑強に拒んで、腹立たしさうに、自分の爲事に干渉して呉れる勿と、伯爵

夫人に頼むのであるのか、伯爵夫人には、一向解し得られ無かつた。伯爵夫人は、良人は、自分とは全く離れた世界を持つて居るのだが、その世界は彼に取つて非常に大切なものであり、それは、伯爵夫人には解ることの能き無いそれ自身の法則で支配されて居る世界であるのだと、感じたのであつた。

時々、伯爵夫人は、良人を理解しやうと思つて、良人が、彼の隷農の爲めに盡す事に於て、爲て居る善い爲事のことを、良人に話すことがある、が、さうすると、良人は、怒つて、答へるのだ、「いや、寸毫も其様な事は無いよ、其様な事は全然思ひも掛け無い事なんだ。で、俺は、奴等の利益になんぞ、小指だつて動かす氣は無いんだ。其様な事は、悉皆、夢のやうな愚劣な事なんだ、老婆さんの痴言なんだよ——其様な、隣人の利益を爲るなぞといふのはね。俺は、吾々の小兒たちを乞食には爲度く無いんだ、俺は、一生のうちに、一身代こしらへやうと思ふんだ、唯だ、それだけさ。で、さう爲るには、規律が無きやアいけ無い、何でもキチンとやるやうで無ければいけ無い……先、其所なんだ」と、彼は、血の氣の多い拳を握り固めて、云ふのであつた。「で、公正も——それは勿論だ」と、彼は云ひ足すのであつた。「それは、若し、農夫が、裸で、飢えて居て、唯つた一匹の瘦馬しきや持つて居無いといふのだつたら、其

奴は、其奴自身に向つても、俺に向つても、何の利益も爲得無いらなんだ」

で、疑ひも無く、ニコライが、自分は、他の人の爲めとか、徳の爲めとかで、何か爲て居るのだといふ考想をば、自分が持つことを許さ無かつた爲めであるのだらうが、彼が爲た事は、何でも彼でも、効果が好かつた。彼の身代は、どん／＼増した。近邊の隸農等は、自分等を買ひ取つて呉れと、ニコライに頼みに來た、そして、彼が死んでから後長い間、農夫等は、彼の支配に對して、崇敬的な記憶を存して居た。

「彼の方は善い主人だつた……農夫の幸福を第一番にして、ご自分の方の事は二の次といふのだつた。それに、何うしても、減額なんぞは承知しなさら無かつた。善い主人だつた——眞個さうだつたんだ」

(八)

自分の隸農を支配する事に於て、時とするニコライの心を悩ませたことは、自分の短氣なこと、驃騎兵の間で得た自分の古い習慣——拳固を直ぐに用ゐる習慣——とであつた。最初のうちは、彼は、其事には少しも悪い所があるとは思は無かつた。が、結婚してから二年目

になると、戒飾のさういふ形式に對する彼の意見が、俄然と變つて了まつた。

或る夏の日、彼は、ゾロンの死んだ後でボグチャアロヴァの管理を引受けて居た村長を喚びに遣つた。その男は、詐欺だの、怠慢の種々な行爲があるのだと、非難されて居た。ニコライは、その男に逢ひにと、昇降段へと出て行つた、そして、村長の最初の返答と共に、怒號り聲と、殴る音とが廣室で聞こえた。

中食にと、家内へ歸つて來て、ニコライは、妻の所へ行くといふと、伯爵夫人マリイアは刺繡框の上へ顔を低く下げて坐つて居た、で、ニコライは、彼が何時もやるやうに、午前ちう自分の注意を引いた事柄を、残らず、殊に、ボグチャアロヴァ村長の事を、伯爵夫人に話し始めた。伯爵夫人マリイアは、赤く爲り、又、蒼く爲り、唇を緊然結んで、同なじ姿勢で坐つて居て、良人に向つて、何とも返辭し無かつた。

「實に無禮な奴だ」と、ニコライは、村長の事を憶ひ出しただけで、憤然となつて、云つた。「うん、彼奴、酔拂つて居たとでも云ふのならだが、彼奴は、解らんのだ……やア、何うした、マリイ？」と、ニコライは、不意に、尋いた。

伯爵夫人マリイアは、顔を擧げて、何か云はうと爲た、が、急に、再下を向いて了まつて、

唇のビリ／＼するのを抑へやうと骨折つた。

『何うしたんだね？。何うか爲たのかね、お前？……』ニコライの標致の好く無い妻は、泣いて居る時の顔が、何時でも一番好く見えるのであつた。伯爵夫人は、苦しみとか、憤怒とかでは、泣いた事は決して無い、何時でも、悲哀とか、憐愍とかで、泣くのであつた。で、泣いた時には、その輝いた眼が、謂ふべからざる美しさをば、増すのであつた。

ニコライが、手を撃つや否や、伯爵夫人は最早自分を制しきれなくなつて、泣きだしてしまつた。

『ニコライ、私にも分つて居ます……彼男が悪いんです、でも、貴下は、何故、貴下は、彼様爲たんですか。ニコライ』で、伯爵夫人は、手の間へ顔を隠した。

ニコライは、何にも云は無かつた、彼は、眞赤になつた、そして、伯爵夫人の方から顔を背けて、黙まつて、部屋の裡を彼方此方歩きたした。彼は、伯爵夫人の泣いて居る事柄を、知つた、が、彼は、自分が幼児の時分から、見馴れ、爲馴れて居た事柄、自分が當然の事だと思做して居た事柄が、悪い事であるのだといふ伯爵夫人の考想とは、心の底から、直ぐ、一致することが能き無かつた。

『感傷的な愚劣な事だ、老婆さんの繰り言だ——が、それとも、彼女の云ふのが、正當かな？』と、彼は、自問した。その疑問をば、孰とも決し兼ねて、彼は、今一度、伯爵夫人の苦しんで居る、人を愛する顔を、一寸と見た。と、倏忽、彼は、伯爵夫人の云ふのが正當なので、自分もそれが悪い事であるのを最早餘程前から知つて居たことを、感じた。

『マリイ』と、彼は、伯爵夫人の傍へ行つて、優しく云つた、『最早、彼様な事は、決して爲無い、私は、固く誓うよ。決して爲無い』と、彼は、宥免を請ふ男の兒のやうに、震えた聲で繰り返した。

涙が、妻の眼から、ドン／＼流れた。伯爵夫人は、夫の手を撃つて、それに接吻した。

『ニコライ、何時その彫刻玉が破れたんです？』と、伯爵夫人は、話題を變へやうと思つて、テオコオンの彫刻玉の附いた指輪を箱めて居るニコライの指を凝乎と見ながら、云つた。

『今日だ、全く彼の時なんだ。あ、マリイ、最早、彼事は云つこ無しにして呉れ』彼は、再、赤くなつた。『私は、誓つて、決して再と彼様な事は無いやうに爲るよ。で、私は、此を見て、何時も忘れ無いやうにするから』と、彼は、云つて、破れて居る指輪に、指しした。

その時から後は、村長等や、支配人等と、逢つて、血が顔へ突き上つて來、拳が何時の間に

か握り固められるのに、気が付くといふと、何時でも、ニコライは、指の上で、指輪を廻して、自分を怒らせた人の前で、眼を垂げるのであつた。けれども、一年に二度は、彼は、自分を忘れた、そして、妻の所へ行つて、懺悔し、其所で、再、最早實際其事ざりて、それから、決して其様な事は爲無いと、約束するのであつた。

『マリイ、俺は、お前には蔑視されるだらうと思ふ』と、彼は、伯爵夫人に云つた。『俺はさう爲れても、爲方が無い、全く自業自得なんだ』

『貴下、逃げだすが宜いんですよ、堪へきれぬやうな気が爲る時には、急いで、逃げだすが宜いんですよ』と、妻は、悲しさうに云つて、夫を慰さめやうと爲た。

地方の貴族の間では、ニコライは、尊敬はされたが、好かれては居無かつた。貴族の地方的政治問題は、ニコライは何の興味をも起させ無かつた。で、それが爲めに、彼は、或る人々からは、高慢だと見做され、又、他の人々からは、足り無い漢だと見做されて居た。

夏は、春の種播から収納時までの時全體が、土地の世話を爲ることで、費された。

秋は、狩獵に對して、他の事と同なじやうな事務的な本氣さを以つて、身を委ねて、獵人や、犬や、馬を伴れて、一月も、二月も、何處か遠方の狩獵に行きつきりになつて居るのであつた。

つた。

冬は、自分の他の領地を見廻るとか、書を読むとかで、送るのであつた、彼は、主に歴史様の著書を読んだのだが、さういふ書を買ふには、年々一定の高の金銭を、何時も變らず、出したのであつた。彼は、本當の文庫を造る位にするのだと、自分で云つて居た、そして、彼は、自分が買った書籍は、何れも皆讀んで了まうのを、主義として居た。

彼は、勿體振つた風で、書齋で、書に向つて坐つて居るのであつた、で、最初は、義務だと思つてやりだした事が、今は、常習的な仕事になつて了まつて、彼は、自分が本氣な勉強に掛つて居るのだといふ感からして、特殊な満足を得るやうになつた。

自分の他の領地を見廻りの用に出る時以外は、彼は、家で、家族の者どもと一緒に、冬を送つて、母親や、小兒等の小さい心配や利害に、心を向けたのであつた。妻とは、だん／＼好く調子が合ふやうになつて、妻の持つて居る精神上の貴い長所をば、日毎に、新に發見して行くのであつた。

ニコライが結婚してからは、ソオニヤは彼の家で暮して居るのであつた。結婚する前に、ニコライは、自分とソオニヤとの間に有つた事柄をば残らず自分の妻に話し、自分を責め、

ソオニヤの行爲を讀めた。彼は、自分の従妹に對して親切に優しくして呉れるやうにと、公爵嬢マリイアに頼んだ。彼の妻は、自分の良人がその従妹に爲た悪い事を十分に感じて居た。伯爵夫人マリイア自身もソオニヤに對して氣の毒な事を爲たと感じた。自分の金持であることが、ニコラアイを動かして、自分の方を選ばせたのだといふ氣がして、ソオニヤには少しも悪い所は無いつと思ひ、ソオニヤを愛し度いと思つたのであつた。が、伯爵夫人マリイアは、ソオニヤを好くことが能き無かつた。そして、度々、自分の心の裡に、ソオニヤに對する悪い感情があるのを見つけたのだが、伯爵夫人マリイアは、さういふ感情に打ち勝つことが能き無かつた。

一日、伯爵夫人マリイアは、信友のナタアシャと、ソオニヤのことや、ソオニヤに對する自分の不公平のことを話して居た。

「貴女知つてるでせう」と、ナタアシャが云つた、「貴女は、聖書を善く讀んだ方だわ、丁度緊然ソオニヤに適合る語句があるぢやありませんか」

「何ういふんです？」と、伯爵夫人マリイアは、驚いて、尋いた。

「それ有る者は予られてなほ餘あり無有者はその有る物をも奪る、也」、貴女覚えてません

「か。彼の女は、無有者なのよ、それは、何故なのか、私には分らないわ、多分彼の女は、寸毫も自我主義が無いからかも知れないわ。私には分りませんが、でも、彼の女からは、何も彼も取り去られるのよ、で、何も彼も取り去られて了まつたのよ、私時々彼の女のことは非常に氣の毒に思ひますわよ。往時は、ニコラアイが彼の女と結婚すれば宜いと思つてたものですよ、でも、私何時でも、さう爲りはし無いだらうといふ豫覺のやうなものを持つてました。彼の女は、「空花」、そら、ね、毒の花の中に時々有る彼なんですわ、ね。私時々彼の女のこと眞個に氣の毒になりますわ、で、私時々彼の女は、私たちならば思ふだらうと思ふやうには、自分ぢやア思は無いのぢやア無からうかと、思ふんですの」

で、伯爵夫人マリイアは、聖書のさういふ語句はその意味に取つてはなら無いのだと、ナタアシャと論じはしたけれども、ソオニヤを見ては、伯爵夫人マリイアは、ナタアシャが與へた説明に同意した。

ソオニヤは、自分の位地をば、情無いとは感じて居無いで、「空花」としての自分の運命に諦を付けて居るかのやうに、實際見えて居た。

ソオニヤは、ニコラアイの家族を好く程、人々を好いては居無いやうに見えた。猫のやうに、

ソオニヤは、人々へまででは無く、家へ自分をなつかしたのだ。ソオニヤは、老伯爵夫人に親
侍し、小兒等を可愛がり、甘やかし、それから、自分が殊に扱ひ方が巧かつた少さい用事を、
何時でも、爲てやるのであつた。けれども、ソオニヤが爲た事は、何でも彼でも、知らずく
當然なこととして受けられて、太して有り難がりもせられ無かつた……

荒涼丘の家が再建された、が、老伯爵の時のやうな規模で以てでは無かつた。

不手廻りの時分に始められた建物は、質素といふよりも以下のものであつた。往時の石の基
礎の上に建てられた廣大な家は、木造で、唯だ内部だけが、漆膏で塗られて居た。大きい、だ
だつ廣い家は、塗ら無い板の床で、その家の隸僕の大工等の手で、その家の樺の樹で造つた極
く質素な、粗造な、長椅子や、椅子や、卓子が、其所に備へられて居た。家は、家の隸僕等の
住家や、客に對する設備を含んで、極く廣々としたものであつた。

ロストオフ家や、ボルコオンスキイ家の親類等が、各自の家族や、十六匹の馬や、數十人の
従者を伴れて、時々、荒涼丘を訪問しに來て、何が月も逗留するのであつた。で、一年に四
度——主人と女主人の命名日と誕生日に——百人程の客が一日か二日逗留するのであつた。

其他は、年中、家の何時も變ら無い生活は、種々な用だの、悉皆家で出來た物で間に合す茶
だの、朝食だの、正餐だの、夜食の、何時も同なじ事を繰り返す、寸毫も變化の無い日常狀
態で、續いて行くのであつた。

(九)

千八百二十年の十二月の五日、聖ニコライの日の前の宵であつた。

その年は、ナタアシャが、良人と小兒等と一緒に、秋の始まりから此方、荒涼丘に逗留し
て居た。ビエールは、彼得堡に居た、彼は、自分だけの用があるから、其地へ三週間程行つて
居るといふことで出て行つた。が、その時から、最早六週間になるので、彼は最早今にも歸つ
て來るだらうと待ち設けられて居るのであつた。

この十二月の五日には、又、ロストオフ・ニコライの古くからの朋友、非役の將官のヴァシ
イリ・フォオドロヴィイチ・デニソフが逗留して居た。

次の日には、客が、ニコライの命名日を祝ひに來る筈であつた、で、ニコライは、自分
は何時もの裕かな鞵靴の土衣を脱いで、フロクコオトを着、爪先の尖がつた細い靴を穿いて、

彼が建てた新會堂へ行つて、其所で祝賀を受け、客たちに一寸とした飲食物を供し、それから、地方の選舉やその年の穀物の收穫の談話などを爲す無ければならぬことを知つて居た。が、その前の日は、何時ものやうに送つても宜いのだと、考へたのだ。

晝食前に、ニコライは、妻の甥の財産であるところのリヤザアの領地からの支配人の計算報告に眼を通した。それから、用の手紙を二本書き、穀物納屋や、家畜飼養場や、厩を見廻つた、次の日の祝日の爲めに家の農夫等が皆な酔拂ふだらうと思ふので、それを防ぐ處置を執つて置いてから、彼は、晝食に入つて來た、彼は、その日は、妻と指し向ひで寸時とでも話を爲る間暇が無かつたのであつた。彼は、家内ぢうの二十人前の食器の備へられて居る長い食卓に就いた。

食卓には、ニコライの母親、母親の伽になつて暮して居た年取つたマダム・ビエロフ、ニコライの妻と三人の小兒等、その嫁婦と家庭教師、妻の甥とその家庭教師、ソオニヤ、デニソフ、ナタアシャ、ナタアシャの三人の小兒、その嫁婦、それから、荒涼丘でその老年を安樂に暮して居た老公爵の建築技師のミハイル・イヴァニイチが、就いて居た。

伯爵夫人マリイアは、食卓の彼方の端に坐つて居た。良人が食卓に就くや否や、彼が手拭巾

を取り上げ、彼の席に置いてあつた水呑杯や酒の杯を手早く突除けた手態からして、伯爵夫人マリイアは、良人が、時々、殊に、爲事から直ぐ晝食に入つて來た時、肉汁の出る前には、あることであつたやうに、此の日も、不機嫌であることを知つた。

伯爵夫人マリイアは、良人のさういふ氣分を極く善く理解して居た、で、自分が機嫌の好い時には、良人が肉汁を飲んで了まうまで、穩かに待つて居て、その時になつて始めて、良人に話を爲始め、そして、良人をして、怒るべき理由の寸毫も無いことを承知させたのであつた。が、此の日は、伯爵夫人は、自分の何時もの規則を全然忘れて了まつた、伯爵夫人は、良人が何の理由も無く自分に對して怒つて居るのを甚く情無く思つて、甚く心細い氣がした。

伯爵夫人は、良人が何處へ行つて居たのか、彼に尋いた。

彼は答へた。

伯爵夫人は又、領地では何も異状は無いのか尋いた。彼は、伯爵夫人の何時ものやうで無い調子に向つて、顔を擧めた、そして、口速な返答を爲た。

「では、私が思つた通りだわ」と、伯爵夫人マリイアは思つて、「でも、何で私に對して怒つて居るんだらう」

良人の返答の調子で、伯爵夫人は、良人が自分に對して心持を悪くして居ること、談話を爲度く無いと思つて居ること、を、覺つた。伯爵夫人は、自分の言語が何時ものやうで無いことを感じた、が、自分を制することができ無くて、今二つ三つ何か尋いた。

食事の間の談話は、デニソフのお陰で、直に、全般的になり、勢づいた、で、伯爵夫人は、その上何も良人には云は無かつた。衆皆が食卓から起つて、常習通りに、老伯爵夫人に禮を云ひに行つた時に、伯爵夫人は、良人に接吻して、手をさし出し、そして、何うした事で彼が自分對して怒つて居るのか尋いた。

『お前は何時でもさういふ異様な事を思つて居る、俺は怒らうなどとは思つたことも無いよ』が、その『何時でも』といふ言語は、伯爵夫人に對して、『左様だ、俺は怒つて居る、けれども、俺はその理由はお前には云は無』と、答へたのと同じであつた。

夫婦の間の仲違をば、嫉妬の爲めに、見るのが快よかつたソオニヤや老伯爵夫人さへも、その夫婦には孰にも悪るい所を寸毫も見付け得無かつた程それ程ニコライは妻と非常に仲が好かつた。が、その二人の間にすら、時々は敵意を持ち合ふ時があつた。時々、殊に、彼等の最も幸福な時の直ぐ後で、彼等は不意に隔意と敵對の感情を持つことがあつた。さういふ感情は、

伯爵夫人マリイヤが妊娠の間最も度々起るのであつた。彼等は、今丁度さういふ敵意の時季に居たのだ。

『では、紳士方、御婦人方』と、ニコライは、聲高に、そして、態と快活らしく見せかけたやうな風（妻の胸を態々痛めさせる積りらしく、伯爵夫人マリイヤには思はれたやうな風）で云つて、『私は朝の六時から立ち詰でした。明日は種々辛抱し無ければならぬ日です、で、私は御免を蒙つて、これから、憩みます』

で、伯爵夫人マリイヤにはその上何にも云はずに、彼は、喫煙室へ去つて了まつて、長椅子の上に横になつた。

『何時もの癖なんだわ』と、妻は思つた。『誰にも話しかけて、私には何にも口をきか無い。解つてるわ、私解つてるわ、私が此様な身體なのが、彼の人には厭で堪まら無いんだわ』

伯爵夫人マリイヤは、自分の高い腰を見下した、で、それから、鏡で自分の蒼ざめた、瘦れた顔——その中では、眼が平常より一層大きく見えた——を見た。

で、何も彼も、喧しくつて、五月蠅かつた、デニソフの大声や笑聲も、ナタアシヤの饒舌も、中にも、伯爵夫人の方を竊然と見るソオニヤの急いだ横眼が。

伯爵夫人マリイアは、自分の腹の立つ時には、何時でもそれをば第一にソオニヤの故にするのであつた。

客が何を話して居るのか、全然上の空で、何にも耳に入らずに、客の傍に寸時の間坐つて居てから、伯爵夫人マリイアは竊然と座を外して、小兒部屋へ行つた。

小兒たちは、椅子に坐つて、馬車で莫斯科へ行くといふ遊戯をやつて居た、で、母親をばその中へ入らぬかと誘つた。伯爵夫人マリイアは、坐つて、小兒たちと遊んだ、が、良人の事や、その原因も無い腹立の事が、止み間無く、伯爵夫人を苛責んだ。で、起つて、苦しうに足を爪立て、歩くやうにして、小さい喫煙室へ行つた。

「眠ては居無いかも知れ無い。私は遠慮無く云はう」と、伯爵夫人は一人で云つた。

一番年長の男の子のアンヅルウシヤが、母親の眞似して、足を爪立て、後から隨て行つた。伯爵夫人マリイアはそれには氣がつか無かつた。

「親愛なマリイ、睡てお居ですすよ、甚く疲勞ておいですから」と、次の部屋で、伯爵夫人マリイアを迎へて、ソオニヤが云つた（伯爵夫人マリイアには、何處へ行つても、ソオニヤが居るやうな氣がした）。「アンヅルウシヤに起させ無い方が宜いんですよ」

伯爵夫人マリイアは見返つた、自分の後にアンヅルウシヤを見た、ソオニヤの云ふ事が道理だと感じた、で、さう道理だと感じた全くその爲めに、伯爵夫人は佛然として顔を赤くした、そして、艱然のことで、自分を制して、烈い口返答をば爲せずじまつた。

伯爵夫人は、何にも云は無かつた、そして、ソオニヤの言語には従は無いやうにして、アンヅルウシヤを後に隨いて來させたが、然し、靜にして居ると彼に合圖を爲、そして、戸口へと行つた。

ソオニヤは、他の戸から出て行つた。

ニコラアイが睡て居た部屋からは、妻は、彼の穩かな呼吸を聞き得た、さういふ呼吸の各々の調子が、妻には善く耳慣れたものであつた。

それを聞いて居るといふと、良人の滑つこい奇麗な額、それから口鬚といふ風に、伯爵夫人マリイアが、良人が睡て居る時に、實に幾度も凝視したことのある良人の顔全體が、伯爵夫人の眼前へ見えて來るのであつた。

ニコラアイは、不意に、驚いたやうに眼を覺して、咳拂を爲た。と、全く同時に、アンヅルウシヤが、戸口から叫んだ――

『父上様、母上様が此所に居るよ』

伯爵夫人マリイアは、ギョツとして、蒼くなつた、そして、息子に手真似を爲やうと爲た。彼は静になつた、そして、その後は、恐ろしい沈静が一分程続いた。伯爵夫人は、ニコライが睡て居る所を起されるのが何れ程嫌ひであるのか、知つて居た。

不意に再身動きの音、咳拂が聞こえた、そして、不機嫌らしい聲調で、ニコライは云つた

『少時の間も憩ましては呉れ無い。マリイか？。何で其奴を伴れて来たんだ』

『私唯だ見やうと思つて来ました……私氣が付きませんでしたの……眞個にお氣の毒です……』

ニコライは、咳をした、そして、何にも云は無かつた。伯爵夫人マリイアは去つた、そして、息子をば小兒部室へ伴れて行つた。

五分経つと、父親の氣に入りの娘の、小さい、黒い眼の、三歳のナタアシャが、父上様は睡て居るし、母上様は次の部室に居るのだと兄から聞いて、母親の眼を逃れて、父親の所へ駆け込んだ。

黒い眼の小さい娘は、大膽に戸をがた／＼開けた、そして、その肥つた、小さい足が、勢の好い足音で、長椅子へと駆け寄つた。背を此方へ向けて睡て居た父親の位置を熟く見てから、足爪立つて立つて、父親の頭の下になつて居た手に接吻した。ニコライは、顔に愛情の微笑を持つて、此方へ反側をした。

『ナタアシャ、ナタアシャ』と、妻が戸口から、吃驚して、叫ぶのを、彼は聞いた。『父上様はお睡むいんだよ』

『いゝえ、母上様、父上様は睡くは無いの』と、小さいナタアシャは、確信を以つて、答へた。『笑つて居るの』

ニコライは、足を下して、起きて、彼の小さいナタアシャを抱き上げた。

『お入り、マアシャ』と、彼は、妻に云つた。妻は入つて、彼の傍に坐つた。

『彼の兒が後から隨いて来たのを知りませんでしたの』と、伯爵夫人マリイアは、オゾ／＼と云つた。『私唯だ様子を見に來ただけ……』

隻腕で彼の小さい娘を抱きながら、ニコライは、妻を見た、で、妻のオド／＼して居る顔付に氣が付くといふと、彼は、今一つの腕で、妻を抱えて、その髪に接吻した。

「母上様に接吻して宜いの」と、彼はナタアシャに尋いた。

ナタアシャは、耻かきさうに、微笑んだ。

「今一遍」と、ナタアシャは、命令的な手付で、ニコライがナタアシャの母親に接吻した箇所に指した。

「何うして、俺が怒つてるなぞと思つたものなんだい」と、ニコライは、妻の心の裡にあることを知つて居た間に答へて云つた。

「貴下が其様な風の時には、私の悲しさ、淋しさといふのは、それは無いんですわ。私何時も思ひますの……」

「マリイ、お黙り、愚劣な。お前に取つて耻かしい事ぢやア無いか」と、ニコライは快活に云つた。

「私何うしても貴下に愛せられることは能き無いやうな気がしますの、私此様なに不器量ですもの……何時だつても、それに、今此様な身體……」

「やア、愚劣な事を云つちやア不好。吾々は奇麗な人を愛するんぢやア無いよ、愛して居ればそれが奇麗になるんだよ。美しさの爲めに愛されるのは、マルヴィナのやうな女だけなんだ。

で、俺は、俺の妻を愛して居るか何うか？。いや、俺はお前を愛して居無い、が、唯……いや、何と云つて宜いか分らん。お前が居無いといふと、そして、何か知ら斯ういふやうな誤解が吾々の間に起つて來るといふと、俺は、最早何うにも爲やうが無い機會になつたやうな気がするんだ、で、俺は、何にも手に付か無くなるんだ。いや、俺は自分の指を愛するのかね？。

俺はそれを愛しはし無い、が、それを切り捨てやうとして見なさい……」

「いゝえ、私はさういふ風な心持はしませんわ、でも、貴下の心持は解つてますよ。では貴下私に對して怒つてるんでは無いんですね？」

「俺は恐ろしく怒つてるよ」と、彼は云つて、微笑みながら、起ちあがつて、髪を撫で付けて、部室の裡を彼方此方と歩き始めた。

「ねえ、マリイ、俺は斯ういふことを考へてるんだがね」と、彼は、最早二人の間に仲直が出来て了まうといふと、直ぐに云ひ始めて、妻の前で、獨語を云ふやうに聲高く口へ出して、云ふのであつた。彼は、妻が聞き度い氣があるのか何うかを尋ね無かつた。妻の氣が何うだらうが、其様な事は、彼に取つては、何うでも宜かつたのだ。彼は、一つ思ひ付いた事があつた、で、妻も又さうで無ければなら無いと思つたのだ。で、彼は、ビエールに春まで自分等の家に

逗留するやうに説き勧める積りだといふことを、妻に話した。

伯爵夫人マリイアは、良人の言語を聞いて居て、時々何か意見を述べた、で、それから、伯爵夫人の方も、獨語を云ふやうに、聲高く話し始めた。伯爵夫人の思つて居るのは、小兒等の事であつた。

「最早此の兒でも女ですわ」と、伯爵夫人は、佛蘭西語で云つて、小さいナタアシャを指した。「貴下は、私ども女といふ者は、論理に合は無いものだ」と、云つて、非難なざるわね。最早此の兒に私どもの論理が現れてるぢやありませんか。私、父上様はお睡むいんだからと云つたでせう、すると、此の兒は、いゝえ、さうぢや無いの、父上様は笑つてる、と云つたでせう、此の兒の云ふ通りでしたわ」と、伯爵夫人マリイアは、さも嬉しさうに微笑んだ。

「左様だ、左様だ」と、ニコライは云つて、強い腕で小さい娘を抱き上げ、空へ高くさし揚げ肩へ坐らせ、その小さい足を持つて、部室の裡を彼方此方と歩るき始めた。父親の顔も、娘の顔も、同なじやうな無邪氣な嬉しさの様子を表はして居た。

「でも、貴下知つて、貴下不公平ぢや無くつて、貴下は此の娘を餘まり可愛がり過ぎますよ」と、妻は、佛蘭西語で叫びた。

「それは左様だ、だが、俺には何うも爲やうが無いよ……さう分らんやうに爲やうよ……」その途端に、誰かが着いたかのやうに、廣室と玄關の室とから戸のドタンバタンする音と、幾つもの足音が聞こえた。

「誰か来たせ」

「必定ビエールですよ。私行つて、見て來ます」と、伯爵夫人マリイアが云つた、そして、部室を出て去つた。

妻が居無いうちに、ニコライは、小さい娘を肩に乗せたまゝで部室を駆け廻つた。

呼吸が切れたので、彼は、手早く笑つて居る小兒を下して、胸へ抱き締めた。さう激ね廻つた事は、彼をして、舞踏のことを憶ひ起させた、で、その小兒らしい、圓い、嬉しさうな、小さい顔を見て居るうちに、自分が老人になつて、この娘を舞踏に伴れて行く時分には、この娘は何様な態に爲つて居るだらうかと、思つた、で、彼は、自分の父親が屢く彼の娘とダニエル・クッバアや波蘭踊を踊つたことを憶ひ起した。

「彼の人ですよ、彼の人ですよ、ニコライ」と、伯爵夫人マリイアは、二三分すると歸つて來て、云つた。「これで、ナタアシャは、何時ものナタアシャになりました。彼の女の嬉しが

つた態つてのは、貴下に見せ度かつたわ、彼の人が入つて来るや否や、餘まり逗留し過ぎたつて、その叱られたことつたら。さア、行きませう、急いでさ、おいでなさいよ。お前は到頭別れ無きやアなら無いのよ」と、伯爵夫人は、父親の傍へすり寄つて行く小さい娘を見て微笑みながら、云つた。ニコライは、娘の手を引きながら、出て去つた。

伯爵夫人マリイアは、少時後に残つて居た。

「少しも、少しも、私は信ずることが能き無かつた」と、伯爵夫人は、獨で呟いた。「人が彼様なにまで幸福であり得やうとは」伯爵夫人は、微笑で明るくされた、が、その途端に、嘆息した、そして、和かな哀愁が、伯爵夫人の考深い眼付に出て來た。それは、さながらに、伯爵夫人が今感じて居た幸福とは全く別に、この世では達し難い今一つの幸福があるのであつて今その刹那に、伯爵夫人マリイアは、そのことを憶ひ起さずには居られ無かつたかのやうであつた。

(十)

ナタアシャは、千八百十三年の春の始めに結婚した、で、千八百二十年までには、娘三人と、

息子一人を儲けた居た。息子は何うにかして儲け度いと思つて居たものであつた、で、今ナタアシャは、その兒は自分の乳汁で育て、居るのであつた。

ナタアシャは、肥つて、幅つたくなつて居た、それは、丈夫さうな若い母親の裡に、往時の細りした、動いて居るナタアシャを認めることは、到底能き無い程であつた。顔の道具立が、往時よりは、自然瞭乎として來た、そして、静な和かさ、非常な落着との表情を帯びて居た。ナタアシャの顔は、往時その重な懐つこさを成して居たところの熱心の彼の何時も燃えて居た火をば、最早持つては居無かつた。今は、大抵見えて居るのは、顔と身體とのみであつて、心は寸毫も見えて居無いのであつた。ナタアシャに於て見えて居るのは、丈夫な、奇麗な、子を多く生みさうな母親といふ様子のみであつた。

今では、唯だ極く稀に、ナタアシャの心の裡の火が再燃えるのみであつた。それは、今のやうに、良人が暫時留守であつてから歸つて來た時とか、病氣の兒が癒り掛けて居る時とか、良人は、ナタアシャが公爵アンドレーに對して持つて居る戀に對しては嫉みを起すかも知れぬといふ風に思つたので、ナタアシャは、決して、良人には、公爵アンドレーのことは云は無かつたが、伯爵夫人マリイアに公爵アンドレーのことを話す時とか、或は、極く時稀には何事

かで（結婚以來、全然止めて了まつて居た）歌を謡う氣になつた時とかにのみ起るのであつた。で、往時の火が再燃え出るさういふ稀な時には、ナタアシャは、その奇麗な、十分に發達した姿で往時よりは尙一層美しく見えるのであつた。

結婚以來、ナタアシャとその良人とは、莫斯科で暮したり、彼得堡で暮したり、莫斯科附近の領地で暮したり、母親の所、即ち、ニコライの家で、暮したりしたのであつた。

若い伯爵夫人ベズウホフは、交際場裡では殆ど見掛けられ無かつた、そして、伯爵夫人をばさういふ所で見えた人々も、伯爵夫人をさう太して好か無かつた。伯爵夫人は、懐つこくも無ければ、愛嬌深くも無かつた。ナタアシャは、獨居を好んだのでは無かつた（ナタアシャは、自分が獨居が好きなのか、さうでは無いか、自分は真正には知ら無かつた。唯だ寧ろ自分は獨居を好か無いのだと想像して居ただけであつた）、が、ナタアシャは、小兒を持ち、小兒を自分で育て、居るし、又、良人の生活の一分一分に向つて、利害を感じて居るのであつたから、交際場裡に出ることを思ひ切つて了まうより外、總てさういふ種々な要求に應ずることが能き無かつたのだ。

結婚前のナタアシャを知つて居た人々は、誰も彼も、ナタアシャの變りやうを見て、それが

何か異常な事でもあつたかのやうに、仰天した。唯だ老伯爵夫人のみは、母親の洞察で以つて、ナタアシャの感情の烈しい爆發の悉皆の根底をなして居るところのものは、ナタアシャ自身が、冗談といふよりは寧ろ眞面目に、オツラアドノエで、公言したやうに、單に自分の小兒、自分の良人を得度いと思ふ已み難い要求であつたことを見たのであつた。母親は、人々がナタアシャを理解せずに驚き怪しんで居るのに驚いた。そして、自分は、ナタアシャが模範的な妻と母親になり得ることを、既にその時分から知つて居たことを、繰り返した。

「唯だ、彼の娘は、良人や小兒たちに對する信愛を極端まで持つて行くものですからね」と、老伯爵夫人は、云ふのであつた、「それが眞個に馬鹿々々しく見える程までにはですね」

ナタアシャは、多くの用意深い人々、殊に佛蘭西人が、唱へるところの金科玉條、即ち、娘は結婚してからも、身仕舞を怠つてはならぬ、その諸藝を捨て、了まつてはならぬ、若い娘の時分よりも容姿に尙一層氣を着ける位にし無ければならぬ、それから、良人になつた男をばそれが自分の良人にならぬ前に、自分が魅したやうに、良人になつた後にも魅さ無ければならぬものだ、勤める金科玉條をば、守ら無かつた。

ナタアシャは、それとは正反對に、一度に自分の藝をば悉皆捨て、了まつた、さういふ諸藝

の中で、一番優れて居たのは、歌を謠ふ事であつた。ナタアシャは、それが自分の人を引き寄せる非常な長所であつたが爲めに、全くその爲めにこそ、それをば捨て、了まつたのだ。

ナタアシャは、自分の擧作や、言語を奇麗にする事などには、一向意を用ゐなかつた。又、最も善い態度や、服装で、良人に自分を見せやうなどとは考へ無かつた。それから又、餘りしつこく良人の愛を求めることに依つて良人を五月蠅がらすやうな事を爲無いやうにしやうとも骨折りはし無かつた。

ナタアシャは、總てさういふ一切の規則とは全く反對の行動を執つたのだ。

ナタアシャは、自分の本能が前には用ゐるやうに教へて呉れた人を引付ける術は、今は良人に對しては可笑しく見えるのみであらうと感じた。何故だと云ふと、自分は良人に對しては最初の刹那からして、自分の心の一隅さへも隠しては置かずに、全く、即ち、全心を以て、自分といふものを、良人に與へて了まつて居たからであつたのだ。ナタアシャは自分をば良人へ繋いで居るところの縁の糸は、往時に良人をば自分へと引き付けたやうなさまじく、なロオマンティックな感情の上に據つて居るのでは無くして、それは、心靈をばナタアシャの肉體へと結び付けて居るところの、何か他の物の上に據つて居るのだと、感じたのであつた。

髪を縮らしたり、圓衣を着たり、良人を引き付ける爲めに歌を謠つたりするのは、自分自身を喜ばすやうな風に自分の身體を飾り立てると同なじやうに異様なことのやうに、ナタアシャ自身には思はれたのだ。

他の人の氣に入るやうにと自分を飾るのは、或は、自分に取つて心持の好い事かも知れ無かつた——ナタアシャは、それを知ら無かつた——が、ナタアシャは、さういふ事を爲るだけの時を持た無かつたのだ。ナタアシャが歌を謠う事をやらず、服装にも氣を着けず、言語をば一念に擇ぶことなどには氣を付け無かつた主な理由といふのは、唯だナタアシャがさういふ事柄をやるだけの時を持つて居無かつた事に過ぎ無かつた。

人間は、何様なに微小に見える問題に對しても、その一問題に没頭するに至る可能性を持つて居ることは、誰でも知つて居る事實である。で、又、何様な問題にしても、それへと集中された注意が向られれば、不定の大きさにまで増大して了は無いまでに、それ程微小な問題といふのは、世の中にはあるもので無いことも、誰でも知つて居る事實である。

ナタアシャが全然没頭した問題といふのは、自分の家族、即ち、良人であつた、ナタアシャは、その良人をば、彼が、ナタアシャ自身へ、ナタアシャの家庭へ、ナタアシャの小兒——そ

れをば、ナタアシヤは、姪み、産み、はぐみ、そして、育てた——へ、全く屬するに至つた程までに、押へ付けて居たのであつた。

で、ナタアシヤが、自分が没頭して居た問題へと、自分の心のみならず、心靈全體、全存在をば、掛ければ掛ける程、その問題は、ナタアシヤの眼の下で、ますます大きくなり、ナタアシヤ自身の力がそれと戦ふには、ますます弱く、不適當に思はれて來るのであつたので、ナタアシヤは、到頭、その一つの問題に、自分の力全體を集中したが、それでも尙、何うしても必要であるやうに見えただけの事柄をば爲盡して了まうだけの時が無かつた程であつた。

女性の權利や、夫婦の關係や、結婚の自由及び權利などに關する議論及び批評は、今日のやうには、未だ『問題』と呼ばれるまでにこそ爲つて居無かつたれ、その時分にもあるにはあつたが、さういふ諸問題に對しては、ナタアシヤは、何等の利害の感をも持た無かつた、實際ナタアシヤはさういふ問題に對して全く何の感想も無かつたのであつた。

さういふ問題は、その時分も今日と同なじやうに、結婚者が雙方から受け合ふ満足をば、即ち、家庭の裡に存在する結婚の意義全體では無く結婚の最初の始期のみをば、結婚に於て、認めるといふやうな人々に取つて、存在して居たのだ。

さういふ論議や、今日の諸問題は、何うすれば晝食から能き得る限りの満足を得ることが出来るかといふ問題と同なじやうに、その時分も今日と同なじやうに、晝食の目的が滋養であり、結婚の目的が家庭である人々に取つては、存在して居無かつたのだ。

晝食の目的が身體の滋養であるものとすれば、二人分の晝食を食ふ者は、或は快樂のより多き量をば得られるかも知れぬが、然し、その人は、晝食の目的を達しはし無い、何故だと云へば、二人分の晝食は、胃で消化し得られ無いからであるのだ。

結婚の目的が家庭であるとすれば、數多の妻若くは數多の夫を持つことにする人々は、或はそれに由つて、多量の満足を得ることが出来るかも知れぬが、然し、それでは何うしても、家庭を持つことは能き無からう。

晝食の目的が滋養であり、結婚の目的が家庭であるとすれば、それに關する全問題は、胃が消化し得る以上をば食は無いこと、か、家庭に向つて必要であるだけ、即ち、一夫、一婦、より以上の妻や、夫を持た無いこととかに因つてのみ、解決されるのだ。

ナタアシヤは、夫を要した。夫がナタアシヤに與へられた、そして、その夫がナタアシヤに家庭を與へた。で、ナタアシヤは、それより他のもつと良い夫の必要をば、少しも見無かつた。

そして、實際、ナタアシャの精力全體がその夫及び小兒等の爲めに盡すことに委ねられて居たのであるから、ナタアシャは、その現状が異つて居たら起つたであらうと思はれるやうな事柄をば、想像し得られもし無かつたし、又想像しやうと爲る事の裡に何の興味をも見出さ無かつた。

ナタアシャは、世間の交際場裡のことは何うでも構は無かつた、が、それと正反對で、自分の家の人々——伯爵夫人マリイヤ、自分の兄、自分の母親、それから、ソオニヤ——との交際をば非常に大切にして居た。

ナタアシャは、自分が髪を振り被ぶつたまゝで、寢衣のまゝで、小兒部屋から飛び出して逢ひに行けるやうな人々、即ち、自分が、嬉しさうな顔容で、緑では無くつて黄色に汚された孩兒の拭巾を見せて、先方からは、それは孩兒が最早真正に快くなつた證據なのだといふ安心させて呉れる保證を受けることの能きやうな人々との交際をば、大切に爲て居た。

ナタアシャの服装や、汚い髪や、場合構はずに投げ出すやうな言語や、嫉妬——ナタアシャは、ソオニヤに對しても、嫁に對しても、奇麗、醜いに拘らず、有らゆる女に對して、嫉妬を持つて居た——などが、ナタアシャの朋友間の何時も笑柄であつた位にまで、ナタアシャは、

自分の事をば投げ遣りにして居た。

一般の説は、ビエールは、下世話にいふ通り「女房の上靴の下に居る」といふのであつたが、それは、實際その通りであつた。

二人の結婚の始まり時分から、ナタアシャは、自分の要求をば、遠慮無く提出した。ビエールは、自分の妻の意見——彼に取つては、全く新奇な考案——即ち、彼の生活の有ゆる一分一分が、妻及び二人の家庭に屬するものだといふ意見には、甚く驚かされた。彼は、自分の妻の要求に驚かされたが、彼は又、それをば得意に思つて、それに従つた。

ビエールは、一切他の女の機嫌を取るどころでは無く、笑顔で話し掛けることさへ敢てし得ず、何か相當の理由が無ければ、唯だ遊びの爲めだけでは、俱樂部へ食事を爲に行くことを敢てし得ず、下らぬ氣紛れの爲めに金錢を費うことを敢てし得ず、それから用務——その中へは彼の妻は、ビエールの科學上の研究をも含ませて居たのだが——の外は、少しでも長く家を離れることを敢てし得無かつた程までに、女の支配の下にあつたのだ。ナタアシャは、自分では科學上の研究のことは何にも解つては居無かつたけれども、それをば非常に重く見做して居た。

總てさういふ事の贖としてビエールは、自分の家では、全室内及び自分自身をば、何ういふ風にも勝手にする全権力を持つて居た。自分たちの家では、ナタアシャは、自分をば、良人の奴隷にした、そして、主人が一生懸命に書齋で讀むか書くかして居るといふと、家ちうの者は、足を爪だて、静に歩か無ければなら無かつた。ビエールは、自分の希望は唯だ一寸とその氣色を見せさへすればそれで宜かつた。さうすれば、彼の望むところのものは、直ぐに實行されるのであつた。彼は、唯だ欲するところを云ひさへすれば宜かつた。さうすれば、ナタアシャが直ぐ跳び上つて、彼の要するところのものを、爲しとげにと行くのであつた。

家ちうが、主人の指圖だと推察されたもの、即ち、ビエールの欲する事——それをば、ナタアシャが推量するのであつた——に因て、支配されて居た。生活の爲方や、住居の場所や、彼等の知人や、親類や、ナタアシャの仕事や、小兒たちの育て方や——總てさういふものは、殘らず、ビエールの言ひ表はした意志に従つたのみならず、尙又、ナタアシャが自分との談話の際に良人が説明した考想から引き出さうと力めた推論にも従つたのだ。で、實際、ナタアシャは、ビエールの志望の要點であつたところのものをば、全く過またず推察した、そして一たびさう推察するといふと、ナタアシャは、その推察した所に何處までも據つて行つた、ビエール

の方が、考想を變へだした時でも、ナタアシャは、彼自身の方の武器で以つて、彼に反對するのであつた。

最初の小兒が生れた後、いろ／＼心配な時分があつて、その時分のことにはビエールは決して忘れることが能き無いのであつたが、その時分には、脆弱い孩兒の爲めに、取り換へ引き換へ三人の乳母を試みた、そして、ナタアシャは、心配の爲めに、病氣になつて了まつたのだ。その時に、ビエールは、小兒が母親以外の女の乳汁で育てられることは不自然で有害であるといふルウソオの説をば、ナタアシャに説明し、そして、自分もさういふ説に全く同意であること、を、ナタアシャに話した。

次の小兒が生れるといふと、ナタアシャは、母親や、醫者等や、良人自身すらの、未聞の、身體に悪い、事柄だと見做して、反對したのに拘らず、自分の思ひ通りにやることを主張し、そして、その日から、自分の小兒等を皆自分で育てたのであつた。

むしろくしゃして居た時々は、屢く夫婦喧嘩をしたこともあつた、が、その喧嘩後餘程経つてから、ビエールは、妻が反對して喧嘩したその同なじ自分の考想が、その儘に、妻の行爲や、言語に、表はれて居るのに、氣が付いて、驚くと共に、嬉しかつたのであつた。そして、彼は、

自分の考かん想ががさう表あらはれて居ゐるのを、見み出だしたのみならず、その考かん想がその中なかの餘よ計けいな物ものや、自分じぶんがその考かん想がをば云いつた時ときには議ぎ論ろんに對たいする熱ねつの爲ために喚こび起おされた物ものをば、悉せん皆かい除り去られた、清き淨じやうなものになつて、表あらはれて居ゐるのを、見み出だしたのであつた。

結婚けつこんしてからの七年ななの後あとで、ビエールは、自分じぶんは惡わるい人間じんげんで無ないといふ確かく固ことした嬉うれしい知ち覺かくを持つた、そして、彼かれは自分じぶん自身みづかが妻つまの身み體たいに反はん射しゃして現まはれて居ゐるのを見みたが爲ためにさう感かんじたのであつた。彼かれは、自分じぶんの裡うちには、善よい事ことと惡わるい事こととが混まじり合あつて居ゐて、それが相あ互ひに影かげを薄うすくし合あつて居ゐることを感かんじた。が、妻つまの裡うちには、眞まことに善よい事ことのみが、反はん射しゃされて居ゐるのを、感かんじた、其所そこでは、全まく善よいので無なかつた物ものは、捨すてられて了しまつて居ゐた。そして、斯かういふ結けつ果くわには、論ろん理り的てきな考かん慮りょの方ほうで達たつせられたのでは無なくして、ビエール自身みづかをば、不ふ可か思議しに、直ちよく接せつに反はん射しゃするといふ方かたに因よつて達たつせられたのであつた。

(十一)

二月ふたつき前まへ、ビエールが最も早はやロスロストトオオフフ家けで暮くらすことになつて居ゐた時とき分ぶんに、公こう爵じやくフフォォドドルルといふ人ひとから、手て紙しが來きたのだが、その手て紙しには、ビエールが重おもだつた創そう立りつ者しゃであつた或あるる會かいの

彼ペテ得テ堡ブルグの會かい員いん等らの間に騒さわがしかつた或あるる重じゆう大だいな諸しよ問もん題だいを決けつする爲ために、彼ペテ得テ堡ブルグへ出でて來きて吳くれれと、促うながして來きて居ゐた。

ナタアシャは、何時いつも良よ人ひと宛あての手て紙しは悉せん皆かい讀よむのであつたが、その通とほりに、この手て紙しも讀よんだ、で、何時いつも良よ人ひとの不在ふざいをば甚ひどく悲かなしがるのであつたが、この時ときは、彼ペテ得テ堡ブルグへ行いくやうにと、ナタアシャの方ほうから良よ人ひとに勸すすめた。

良よ人ひとの智ち力りき上じやうの、抽ちゆう象じやう的てきの爲ため事ことに關かんする何なに事ことに對たいしても、ナタアシャは、それをば少せうしも理り解かいしては居ゐなかつたけれども、非ひ常じょうに重おもきを置おいて居ゐた。そして、さういふ事こと柄へらに關かんして、自みづか分ぶんが良よ人ひとの邪じや魔まになるのを非ひ常じょうに恐おそれて居ゐた。手て紙しを讀よんだ後あとでのビエールの尋たづねの臆おく病びやうらしい眼め付つきに對たいして、ナタアシャは、その答こたへとして、是ぜ非ひ行いくやうにと、彼かれに頼たのんだ、そして、ナタアシャの方ほうから請こふたこと、云いつては、歸かへる時ときをばキツカリ極きくめて吳くれれといふことだけであつた。で、四し週しゅう間の暇ひまが彼かれに與あたへられた。

ビエールが歸かへると極きくまつて居ゐた日ひ取とり、即すなはち、二に週しゅう間かん前まへから以い來きた、ナタアシャは、引ひ續ついて、心しん配はい、銷せう沈ちん、腹はら立たちつばい状態じやうたいに陥おちつて居ゐた。

退たい職しやくの將じやう官くわんで、時じ事じの現げん狀じやうに甚ひどく不ふ平へいであつたデニソフは、その二に週しゅうの間に、ロスロストトオオフ

家へやつて来たが、彼はナタアシャを見て、自分の嘗ては戀したことのある人の往時とは全然異つたやうな悪くなつた姿を見て、憂鬱な驚愕を感じた。往時の魅女に就て見、又、聞き得る物と云つては、唯だ、退屈し切つた、銷沈つた眼付、此方の言語にはそぐは無い何でも構はずな返答、小兒部室のこの間斷無しの物語のみであつた。

その二週間ちう、ナタアシャは、悲しさうで、腹立ちつぽかつたのだが、殊に、母親とか、兄とか、ソオニヤとか、伯爵夫人マリイアとかが、ビエールの爲めに言ひ譯を爲たり、彼の歸りの遅いことに對しての道理らしい理由を發明したりする時には、ナタアシャの悲しさうな苛しいその様子が一層甚かつた。

『全く下ら無い事だわ、愚劣だわね』と、ナタアシャは、云ふのであつた。『何の爲めにもない無の人の企畫は悉皆、愚劣な會なんぞといふ物は悉皆』と、ナタアシャは、その重要な事に就ては自分が固く信じて居るその同なじ事柄に對して、云ひ放つのであつた。で、それから、何時も、自分の一人きりの男の兒、孩兒のベエテヤをば守りしにと、小兒部室へヅンヅン行つて了まうのであつた。

誰も、その三月の小さい者が、それがナタアシャの懷に抱かれて居て、ナタアシャが、それの口の動や、鼻の鳴るのを感じる時に、與へるやうな譯の分つた、そして、心持の好い慰藉をば、ナタアシャに與へることは能き無かつた。その小さい者は、ナタアシャに斯う云つた。『貴女は怒つて居る、貴女は嫉んで居る、貴女は彼の人を罰し度からう、貴女は恐れて居る、が、此所に私が居る——私が彼の人だ。さア、私が彼の人だ……』すると、最早それに答へやうは全く無かつた。それは、眞實以上であつた。

ナタアシャは、その二週間のうちに、その兒に乳汁を飲ませ過ぎて、その兒が病氣になつたといふ程まで、餘まり度々、自分を慰さめる爲めにとその兒を使ひ過ぎたのであつた。ナタアシャは、その兒の病氣には甚く愕いた、が、それでも、それは、ナタアシャには無ければなら無かつた恰度さういふ事であつた。その兒の看病を爲る事でもつて、ナタアシャは、良人に對する自分の不安をば、少し堪へることが能きたのであつた。

ビエールの馬車が騒がしく入口へと駈け込んで来た時には、ナタアシャは、小兒に乳汁を飲ませて居た、と、子守が、何うすれば女主人が喜ぶかを知つて居て、晴々した顔で、竊然と然し速足で戸口へ来た。

『歸つて来たの？』と、ナタアシャは、その時恰度睡りかけて居た小兒をば、自分が身動き

して眼を覺まさせてはならぬと、思つて、速語な呬語で、云つた。

「お歸りです、奥様」と、子守が呬いた。

血がナタアシャの顔へと突き上つた、そして、足が我知らず動いた、が、跳び上つて、駆け出すのは、思ひも寄らぬことであつた。小兒は再、小さい眼を開け、「貴女は此所に居ますね」と、云はうとするかのやうに、一寸と見て、そして、唇を今一つ慚氣にバクリとやつた。

緩徐と胸を引き退けて、小兒を抱き上げて、子守に渡し、そして、速い歩調で戸の方へと行つた。が、孩兒を捨て、其様に急いで、喜んで行くのは、良心に疚しかつたかのやうに、戸の所で止まつて、そして、見返つた。子守は、兩腕を高くして、小兒の寢床の欄干の彼方へ小兒の身體を越させやうと爲て居た。

「え、行らつしやい、行らつしやい、奥様、ご心配なさらないで、駆けていらつしやいと、子守は、云つて、嫁母と女主人との間には普通な心安さで微笑んだ。

輕るい歩調で、ナタアシャは、玄關の室へと駆けた。口に烟管を啣へて、書齋から廣室へと出て來たデニイソフは、始めて眞正のナタアシャを再見たやうに思つた。喜悅の生々した輝がナタアシャのこの時全然變つた顔付から、光の流を注ぎ出して居た。

「歸つて來ましたよ」と、ナタアシャは、デニイソフの傍を飛んで去きながら、デニイソフに聲を掛けた。と、デニイソフは、自分は別にビエールのことをさう思つて居たのでは無かつたのに、ビエールが歸つことを聞くのが心がときめく程嬉しかつたやうに、感じた。

玄關の室へ駆け出ると、ナタアシャは、毛皮外套の背の高い姿が、襟巻を引き解うとして居るのを見た。

「彼の人だ、彼の人だ、眞實だ。彼の人が歸つたのだ」と、ナタアシャは、心の裡で云つた。そして、ビエールの傍へと跳んで行つて、彼を抱き締め、彼の胸へと自分の頭をギユウと押し付け、それから、身を引退けて、ビエールの、霜だらけの、赤い、嬉しさうな顔を覗いた。

「さう、到頭、歸つて來た、嬉しさうで、満足して……」

が、倏忽、ナタアシャは、自分がその二週間以來過して來た待ち焦がれの有ゆる苦痛を憶ひ起した。顔に輝き出て居た喜悅は消えて無くなつた。ナタアシャは顔を顰めた、そして、非難と怒つた言語との急流がビエールの上に、注ぎ下つた。

「さう、良人は結構だわ、良人は嬉しかつたでせうよ、面白かつたでせうよ……でも、私は何うなのよ……良人、小兒たちのことを少量は考へてくだすつても宜いでせう。私は、乳汁を飲

ましてるんです、私の乳汁が悪くなりました……ベエティヤがその爲めにもう少しで死ぬところでしたちやアありませんか。それなのに、良人は、自分ばかりさんざ面白いことを爲ておいででせう。さう、自分ばかりさんざ面白いことを……」

ビエールは、もつと早く歸つて来ることは何うしても能き無かつたのだから、自分に悪い所は無いかを知つて居た。彼は、ナタアシヤの方での斯ういふ憤怒は、不當であるのだから、二分もすれば、全然鎮まつて了まうだらうといふことを知つて居た。殊に、彼は、自分自身が、嬉しい、陽氣な心持であつたことを、知つて居た。彼は、微笑み度かつたのであらう、が、さう思ふことさへ敢てし得無かつた。彼は、愀然な、ギョツとした顔をした、そして、暴風雨の前に屈服した。

「私は、何うしても歸れ無かつたのだ、實際。だが、ベエティヤは何うなんだい？」

「最早大丈夫です、さ、いらつしやい。良人耻かしくは無いの？。良人が居てくださら無ければ、私が、何様ななか、私が何れ程情け無い氣がするんだか、そりやア良人に見せ度いわ……」

「お前は何處も悪くは無かつたかね？」

「さ、此方へいらつしやい、此方へいらつしやい」と、ナタアシヤは、ビエールの手を放さ無いで居て、云つた。

で、二人は二人の部屋へと行つた。

ニコラアイ夫婦が、ビエールの様子を尋ねに来た時には、ビエールは、眼の覺めた孩兒の男の兒を、彼の大きい右の手で、ダラリと抱き上げて、小兒部屋で坐つて居た。孩兒の圓い顔や齒の無い口に、嬉しさうな微笑があつた。暴風雨は、最早夙に吹き通つて了まつて居た。そして、喜悦の晴やかな、キラ／＼した輝が、良人と息子をさも可愛さうに眺めて居るナタアシヤの顔ちうに溢れて居た。

「で、公爵フョオドルとお談か何も彼も旨く能きたのですか？」とナタアシヤが云つて居るのであつた。

「うん、非常に旨く」

「ね、頭を挙げましたわ(ナタアシヤは孩兒のことを云つた)「あ、此間の驚愕させられた事つたら」

「公爵夫人にお逢ひなすつて？。眞實ですか、彼の女の戀してるのは彼の……」

「うん、妙なもんぢやア無いか……」

その途端に、ニコライが、妻と一緒に入つて来た。ビエールは、小兒を抱いたまゝで、身體を屈めて、ニコライ夫婦に接吻し、そして、二人の尋ねることに答へた。

が、自分等が論じ合はなければならぬ興味の問題がなかく、多かつたに拘らず、小さい帽子の中にグラ／＼する頭を入れて居る孩兒が、ビエールの全注意を占領して居るのであつたことは、極く明白であつた。

「眞個に可愛いわねえ」と、伯爵夫人マリイアは云つて、孩兒を見て、それにからかつた。

「一つ何うしても私に解りません事はね、ニコライ」と、伯爵夫人マリイアは云つて、自分の良人に振り向いて、「何うして、斯様なやうな小さい者たちを、可愛くお思ひなさら無いかといふ事なんですよ」

「いや、俺は可愛く無いよ、さう思うことが能き無いんだ」と、ニコライは云つて、冷然として孩兒を見た。「唯だ肉の一片だ。おい、來給へ、ビエール」

「感心ですわねえ、此の方は眞個に愛情の深い父親さんです」と、伯爵夫人マリイアは、自分の良人の爲めに詭言をして、云つて、「が、唯つた一年か其邊位経つといふと……」

「えい、ビエールは、非常に良い子守なんですよ」と、ナタアシャが云つた、「自分の手の掌が丁度孩兒の背部を抱えるやうに出來てると云つてゐるんですよ。まあ一寸ご覧なさい」

「うん、左様さ、だが、こればかりぢやア無い」と、ビエールは、哄笑ひながら、叫んだ、そして、急いで小兒を抱き舉げて、その子守の手へ返した。

(十二)

有らゆる眞の家族の裡でものやうに、幾つもの全く別々の世界が、荒涼丘の家には、一緒に暮して居た。で、さういふ世界の各個が、それ自身の個性をば保有して居ながら、相互に讓歩をし合ひ、そして、調和した全體へと混り合つて居るのであつた。

家の中で起つた事件は、さういふ總ての集團に取つて同なじに、重要で、喜ばしく、若くは、苦しかった。が、各個の集團が、起つて來る有らゆる事件に對して、自分以外の集團と全く離れて、それを喜ぶとか、悲しむとかの、それ自身だけに限られた根據を持つて居た。

さういふ風で、ビエールの歸つて來たことは、喜ばしい、重要な事件であつて、家内の總ての集團に於て、さういふものとして、反照された。

僕従どもといふものは、主人をば判決するのに、主人の談話とか、主人の感情の云ひ表はされたものとかに據るので無くして、主人の行爲や、主人の生活の爲方に據るものであるのだから、僕従どもが、主人に取つての、一番過た無い判決者であるのだが、荒涼丘の家のおさういふ僕従どもは、ビエールの歸つて来たことを喜んだ、それは、ビエールがその家に居れば、自分等の主人の伯爵が、領地の農夫等を監督しにと毎日行か無からうし、又、機嫌が好く、元氣が好からうといふことを、彼等が知つて居たからであるし、又、ビエールが歸つて來るといふと、祝日には、自分等全體に向つて、價格のある贈物が貰へるといふことを、彼等が知つて居たからであつたのだ。

小兒たちや、嫁婦どもも、ベズウホフの歸つて來たのを、嬉しがつた。それは、ビエールほど、彼等をば家の一般の交際的生活へ引き込むことの能き者は、誰も無かつたからなのであつた。

翼 琴で、彼が云つた通り、人が何様なやうな舞踏でも能きるやうなさういふ蘇格蘭曲(彼はその曲一つしきや知ら無かつた)をば、弾くことが能きたのは、ビエールであつた、それから、彼は、又、彼等全體に向つて、土産を必定齎つて來る人であつた。

今では最早、縮れた薄い髪の毛の、美しい眼の、十五歳の、瘡せた、華車な、伶俐な男の兒であつたニコオリンカ・ボルコンスキイも嬉しがつた。それは、彼の所謂ビエール叔父さんが、彼の熱烈な愛と崇敬の目的であつたからであつた。誰も、ビエールに向つての愛情をばニコオリンカの胸へ注ぎ込んだ者は無かつた。それに、彼は、ホンの稀にしきやビエールを見無かつたのだ。彼を養育した伯爵夫人マリイアは、自分が良人を愛したやうに、ニコオリンカをして自分の良人を愛させやうと全力を盡くした。そして、ニコオリンカは叔父を愛するには愛した、が、彼が叔父を好く心持の裡には、侮蔑の殆ど見え無いやうな陰があつた。ビエールを彼は崇敬した。彼は、ニコライ叔父のやうに、驃騎兵とか、聖ゲオルギイの騎士とかになり度くは無かつた、彼は、ビエールのやうに、學者で、伶俐で、親切な人になり度かつたのだ。ビエールの前に居る時は、ニコオリンカの顔には、何時も嬉しさうな輝があつた、そして、彼は、ビエールが彼に話しかけるといふと、顔を赤くして、呼吸も吐か無かつた。彼は、ビエールの言語は一語も決して聞き漏さ無かつた。そして、後で、獨か、デッサレと一緒に、その一句一句を憶ひ起した、そして、そのキツチリな意義を考へ込んだ。

ビエールの過去の生活、千八百十二年以前の彼の不幸福(それに就ては、ニコオリンカは、

自分が聞いた極く僅の言語からして、漠然とした、ロオマンティックな繪を造つて居たのだ)、莫斯科での彼の冒険、佛蘭西人の捕虜になつたこと、ブラアトン・カラターアエフ(それに就ては、ニコオリンカは、ビエールから聞いたのだ)、ナタアシャに對するビエールの戀(ナタアシャをば、ニコオリンカは、全く特別な感情で愛して居た)、それから、就中、自分の父親(それは、ニコオリンカは記憶えて居無かつた)とビエールが親密であつたこと、總てさういふ事柄が、ビエールをば、ニコオリンカの眼に於て、勇者と爲し、聖者と爲したのだ。

彼の父親やナタアシャに就て、人が時々洩すのを聞いた語句からして、ビエールが父親のことを話す時の感情の籠つた様子からして、ナタアシャが父親のことを話す時の用心深い崇敬的な優しさからして、その時恰度戀といふものに對する觀念を造り始めて居たばかりの男の兒は自分の父親はナタアシャに戀して居て、そして、死ぬる時に、ナタアシャをば、彼の朋友に譲り渡したのだと、考へ合せたのであつた。

自分には何の記憶も無かつたその父親は、その男の兒に取つては、人が少しも明かな觀念を持つことの能き無いやうな神的な者であつて、その者に就ては、彼は、鼓動する心臓や、悲哀と歡喜との涙無しでは、考へることが能き無かつた。

で、さういふ風で、その男の兒も亦、ビエールの歸つて來たのを、嬉しがつて居た。

家に居た客たちも、ビエールに逢ふのを喜んだ、それといふのは、彼が、何ういふ集會をも何時も勢ひ付け、そのいろいろ異つた原素をば、旨く混り合はさせて了まう男であつたからなのだ。

家の成人の連中は、何時も日々の生活をば一層滑かに容易く走り過させて呉れる朋友を見るのを、喜んで居た。

年取つた婦人たちは、ビエールが齎つて來た土産物をも喜んだし、又、ナタアシャが平常のナタアシャになつたのを、尙一層喜んだ。

ビエールは、さういふ種々の種類の人々が自分に對して持つた種々な説を感じた、そして、急いで彼等全體の期待をば満足させやうとした。

彼は、非常に放心な、物忘れの甚い男であつたけれども、彼の妻が拵へて呉れた覺書の助けに依つて、何も彼も買つて來て、姑や、義兄から頼まれた用事一つ忘れず、又、マダム・ビエエルフへの衣服、甥たちへの玩具の、土産さへ忘れ無かつたのであつた。

結婚生活の最初のうちは、ビエールが買ふ積りであつた物を何も忘れはしまいといふ妻の期

待は、彼には、異様なことのやうに思はれた、そして、彼は、自分が結婚後始めて旅へ出た後で、自分が全然忘れて了まつて何も買はずに歸つて来るといふと、妻が甚く悲しんだのは、甚く驚かされたのであつた。が、そのうちに、彼は、それに慣れて来た。ナタアシャは自分自身の爲には何の買物をも頼むのでは無くして、ビエールの方から何か買つて来やうかと云ひ出した時に他の人々ばかりの爲めに物を買つて来て呉れとビエールに頼むのだといふことを知つたので、彼は、今では、我ながら驚いた事には、家内ぢうに對しての土産物を買ふことに、小兒らしい快味を覚えるやうになつた。そして、決して何も忘れ無かつた。今では、若し、ナタアシャの非難を招くとすれば、それは、多く買ひ過ぎたとか、餘り高く買ひ過ぎたとかいふのにあるのであつた。世間の眼から見ての他の缺點——ビエールの眼から見ればそれはナタアシャの長所なのだが——即ち、身じまひの悪いこと、投げ遣りとへ持つて行つて、ナタアシャには、吝嗇の缺點が加はつて居た。

ビエールが、大きい家での増した費用を來すやうな家庭生活を始めだしてから以來ずっと、彼は、我ながら意外にも、自分の家の費用は、自分が過去に於て費つて居たもの、半分にしきや當ら無いし、そして、近頃、殊に最初の妻の負債の爲めに大分不如意になつて居た状態が、

だん／＼直りだして居るのに、氣が付いて居た。

ビエールの生活に脈絡が出来たので、生活費が餘程廉く上るやうになつたのだ、生活の彼の前々の爲方に於ける最も金錢のかゝる贅澤、即ち、何時何時でもそれを全く變へて了まへるといふ可能をば、ビエールは、今は持つて居無かつたし、又さういふ變化を來たさうといふ欲求をば、少しも持つて居無かつた。彼は、自分の死ぬるまで生活の風が、こゝに全く極まつて了まつたことを感じた。それから又、彼は、さういふ生活の風を變へることは、自分の力では能き無いことを感じたのだ、だから、その生活の風には、金錢がさう掛ら無かつた。

嬉しさうな、笑ましげな顔容で、ビエールは、買物の包を解いて居た。

「何うだい」と、彼は、商人のやうに、一つの物品の包を開けて、云つた。

ナタアシャは、ビエールに眞向つて坐つて、膝の上へ一番年長の娘を抱き上げたまゝで、良人から良人を見せて居る物へと、速く自分の輝く眼をば向けて居た。

「其物はマダム・ビエロフの分なの？。立派ですわねえ」。ナタアシャは、材料の良否を見る爲めに、其物に手を觸らせた——

「嗎一留、さうでせう？」

ビエールは、價格を云つた。

「まア不廉」と、ナタアシヤは、云つた。『でも、小兒たちは嘸ぞ喜ぶでせう、母上様もね。ですが、これを私に買つて来てくださるのには空費でしたわ』と、ナタアシヤは、恰度その時分流行りだした型の金に眞珠を箱めた櫛を賞でながら、微笑を抑へ兼ねて、云ひ足した。

「アデエルが買つて行けと云つて聴か無いもんだからね」と、ビエールは、云つた。

「何時挿しませうね？」

ナタアシヤは、櫛を髪に挿した。『小さいマアシヤを伴れて出る時に、宜いでせう、衆皆が再來るかも知れませんか。さ、行きませう』

で、土産物を取り集めて、夫婦は、先づ小兒部室へ行き、それから、老伯爵夫人の所へと行つた。

老伯爵夫人は、何時ものやうに、マダム・ビエロフとベエシエンスをやつて居たが、其所へ、ビエールとナタアシヤが、小包を小脇に抱へて、その客室へ入つて来た。

老伯爵夫人は、今では、最早六十歳を越して居た。髪は全部白かつた。そして、顔全體を縁飾で取り圍くやうな帽子を冠ぶつて居た。顔は皺くちやで、上唇は落ち込んで、眼は曇乎して居た。

て居た。

彼様なに速く相續いて起つた息子と良人の死の後で、老伯爵夫人は、自分が、不圖した事でこの世で忘れられた、人生で、何の目的も無く、何の利害も持つて居無い人間なのだ、感じた。老伯爵夫人は、食ひ、飲み、睡り、目を覺まして臥て居た、が、生活しては居無かつた。人生は、老伯爵夫人に、何の印象も與へ無かつた。

老伯爵夫人は、人生からは、安靜の外何をも要さ無かつた、そして、その安靜をば、老伯爵夫人は、死の裡にのみ見出し得るのであつた。が、死が老伯爵夫人に来るまでは、老伯爵夫人は、生きること——即ち、自分の生存の諸力を用ゐること——を續けなければなら無かつた。極く小さい小兒等や、極く年取つた人々の様子のうちに見られるやうな物が、老伯爵夫人の様子のうちには、その最高度に於て、認め得られるのであつた。何等の外形上の目的も、老伯爵夫人の存在の裡には、見られ得無かつた、見られ得るものといつては、種々な能力と性癖とを行使する必要のみであつた。老伯爵夫人は、食ひ、眠り、考へ、話をし、泣き、働き、腹が空り、などし無ければなら無かつたのだが、それは、唯だ、自分が、胃や、腸や、筋や、神経や、脾臓を持つて居たからといふに過ぎ無かつた。生活力の十分に強い人々が、或る目的に向つ

て努力する場合には、その目的が、それ以外の目的、即ち、各自の諸力を行使するといふ目的をば吾々の眼界から掩ひ隠してしまふもののだが、老伯爵夫人の食ひ、飲み、その他のさういふ總ての事を爲したのは、生活力の十分強い人々の場合とは全く異つて、何等の外的な動機に依つて促されたものでは無かつたのだ。

老伯爵夫人は、自分が、自分の肺や舌を使はなければなら無かつたので、話をしたに過ぎ無かつた。老伯爵夫人は、涙から来る身體的の安堵を要したが故に、小兒のやうに泣いた、で、總てがさういふ風であつたのだ。生活力の強い盛りの人々に取つては動機であつた所のものが、老伯爵夫人の場合には、明に假托に過ぎ無かつたのだ。

さういふ風で、午前には、殊に、前の晩に餘り濃厚した物を何か食つた場合などには、老伯爵夫人は、憤怒を發する機會を索めた、そして、何でも最初に出て來た假托——例へば、マダム・ビエロフの耳の遠い事——に、突つかゝるのであつた。

部室の一方の端から、老伯爵夫人は、低い聲で、マダム・ビエロフに何事かを云ひ始めるのであつた。

『今日は暖いやうですね、貴女』と、老伯爵夫人は、低聲で、云ふのだ。で、マダム・ビエロフが、『え、さうですよ、彼の人たちが來ましたよ』と、答へるといふと、老伯爵夫人は、腹立たしさうに、斯う呟やくのであつた——

『おや、何て豊で間拔なんだらう、此の女は』

今一つの假托は、嗅煙草であつた、老伯爵夫人は、それが乾き過ぎて居るとか、濕り過ぎて居るとか、で無くば、粉に爲やうが悪むるか、思ふのであつた。

むしろくしや腹のさういふ爆發の後では、膽汁的な色が顔へ出て來るのであつた。で、女中等は、何時マダム・ビエロフが再豊であるのか、何時嗅煙草が再濕めつて居るか、それから、何時老伯爵夫人の顔が再黄色くなるかを、何時でも過た無い徴候で、知つて居た。

自分の脾臓を使はなければなら無かつたと丁度同なじやうに、老伯爵夫人は、時々それより他の能力を使はなければなら無かつた、で、考へるといふ爲めの假托は、ベエシエンスの勝負であつた。

泣き度いと思ふ時には、その涙の目的は、亡き伯爵のことであつた。

昂奮を要する時には、主題は、ニコライのこと、それから、ニコライの健康に對する自分の心配であつた。

何か知ら意地の悪い事を云はうとする時には、老伯爵夫人の假托は、伯爵夫人マリイヤであつた。

老伯爵夫人が、自分の言語の機官を運動させやうと思ふ時には——それは、大抵、暗くした部屋で午食後の一睡の後の、七時頃のことであるのであつたが——その時には、假托が、物語を繰り返す事のうちに、見出されるのであつた、そして、その物語といふのは、何時も同様なもので、それが又何時も同様な聴者たちに向つて話されるのであつた。

老伯爵夫人のさういふ状態は、誰もそれを口へは出さ無かつたけれども、家内ぢうに理解されて居た、で、能きるだけの有らゆる力が、誰に依つても、老伯爵夫人の諸要求を満足させる爲めに、盡されたのだ。唯だ極く稀に、ニコライイや、ビエールや、ナタアシヤや、伯爵夫人マリイヤの間に、老伯爵夫人の状態に對する自分たちの了解を洩すやうな悲しさうな半微笑が交換されるのであつた。

が、さういふ眼容は、その外に、何か他の或る物を云ふのであつた。さういふ眼容は、老伯爵夫人は最早人生に於ける爲事をば爲し終はつたといふこと、今老伯爵夫人の身體に表はれて居る物は、老伯爵夫人の全部では無いのだといふこと、やがて、さういふ物が悉皆同様な物に交換されるのであつた。

なつて了まうのだといふこと、それから、人々は、何事も老伯爵夫人に向つては、喜んで容赦すること、そして、彼等は、嘗は、自分等にとつて非常に愛すべき者であり、嘗は、自分等と全く同様なやうに生命に満ちて居たこの慙れな者に向つては、何處までも寛容するのだといふことをば、表はすものであつた。「生きて居る遺物だ」と、人々のさういふ眼付は、云つて居るのであつた。

唯だ全く心無き、そして、氣の利かぬ人々や、小兒等のみが、さういふ事を解し得無かつた、そして、老伯爵夫人には構ひ付け無かつたのだ。

(十三)

ビエール夫婦が客室へ来た時には、老伯爵夫人は、ベエシエンスの勝負をやる精神上的の運動をやら無ければなら無い何時もの心状で居るところであつた。だから、老伯爵夫人は、唯だ習慣でもつて言辭を出すには出したのだが、それは、何時も、ビエールや、自分の息子が、旅行から歸つて来ると、繰り返す『丁度宜いところだつた、丁度宜いところだつた、お前、随分待ち兼ねましたよ。でも、有り難いことに、到頭歸つて来てお呉れだね』といふ言辭に過ぎ無か

つた。で、土産物が渡されるといふと、今一つの極まり文句を云ふのであつた、「貴いのはお土産ではありません、お前……有り難う、私のやうな老人のことを何時も忘れ無いで居てください……」

その時ビエールが入つて来たのは、老伯爵夫人に取つては有り難く無かつたのは、明瞭であつた、といふのは、ビエールが、入つて来たが爲めに、老伯爵夫人は骨牌を配ることを中止し無ければなら無かつたからであつたのだ。老伯爵夫人は、ベエシエンスの勝負を止めた、そして、其所で始めて土産物へと注意を向けた。

老伯爵夫人への土産物は、精巧な細工の骨牌函と、女の牧羊者の繪のある蓋付きのセエツルの茶碗と、ビエールが彼得堡の小肖像の専門畫家に畫かせた老伯爵の肖像の附いた喫煙草函とであつた。老伯爵夫人は、餘程前からそれを欲しがつて居た、が、丁度その時は、泣き度い心持が寸毫も無かつたのだ。で、何とも無い風で肖像を見たのみで、骨牌函の方をば、すつと喜んだ。

『有り難う、お前、お前さんのやうな人があるので、私も責めても少し生きて見やうといふ氣にもなるのですよ』と、老伯爵夫人は、何時もの通り、云ふのであつた。「でも、何より嬉し

いのは、お前さんが歸つておいでなすつたことなのです。それが眞個に何よりなのです、お前さんは眞個に彼の娘を叱つておやりなさい。彼の娘は、お前さんが居無いと、何物か憑ものでも了て居るやうなのです。彼の娘は、何にも見え無し、何にも考へられ無くなるのですよ」と、老伯爵夫人は、何時もの通りに云つた。「一寸とご覧、アンナ・ティモフェヅナ」と、老伯爵夫人は云ひ足して、「私の息が買つて呉れた骨牌函は、眞個に良いでせう」

ビエエロフ夫人は、その土産物を褒めた、そして、自分の貰つた反物を甚く喜んだ。

ビエールも、ナタアシャも、ニコライも、伯爵夫人マリイヤも、それから、デニソフも、話しを爲度い事柄が多量あつた、が、それは、老伯爵夫人の前では話す譯に行か無かつた。それは、老伯爵夫人には隠して置か無ければならぬ事が寸毫でもあつたからといふのでは無く、それは、唯だ、人々が老伯爵夫人の前で思の儘に談話を爲るのであつたら、老伯爵夫人から無暗に出る間に一々答へて、最早これまでに何遍と無く老伯爵夫人に向つて繰り返した幾つもの事柄、例へば、誰は最早死んだとか、誰は結婚したとか、いふやうな、老伯爵夫人の何時も忘れて了まう事件をば、又其所で老伯爵夫人に繰り返して云つて聞かさ無ければなら無かつたからなのであつた。が、それでも、人々は、客室で、何時もの通り、茶に坐つた、で、ビエール

は、老伯爵夫人自身にさへ何の興味も無かつたやうな老伯爵夫人の無用の間に答へ、そして、公爵ヴァシイリが餘程年取つて見えだしたとか、伯爵夫人マリイア・アレクセエヅナが宜しく云つて呉れと云つたとか、いふやうなことを、老伯爵夫人に話した。

誰に取つても何の興味も無いものであつたのに、それでも、避け難いものであつたところのさういふ談話が茶の持ち續けられた。家族の中の大人たちは悉皆、ソオニヤが主宰して居る沸茶器のある圓い茶の卓子の近邊に集まつて居た。

小兒たちは、各自の家庭教師や嫁母たちと一緒に、最早茶を済まして居た。そして、彼等の聲々が次の室で聞えて居た。

茶では、誰もが各自の何時もの場所々に坐つて居た。ニコライは、少し離れた小さい卓子に坐つて居て、其所へ彼の茶は取り次れた。全く白くなつた顔の兎犬の牝犬のミイルカ、即ち、最初のミイルカの娘が、ニコライの傍の椅子の上に坐つて居た。縮れた髪や、口鬚、頬髯に、白髪の幾筋か混つたデニエツフは、將官の上衣の扣鈕を外して、伯爵夫人マリイアの傍に坐つて居た。ビエールは、自分の妻と老伯爵夫人との間に坐つて居た。彼は、老婦人にも面白くつて、老婦人に解るだらうと、思つて居た事柄をば、話して居た。彼は、嘗は老伯爵夫人

の同時代人等の一團を成して居、そして、嘗は人の實在の生きた一團を成して居たのだが、今では最早大抵は諸方へ散々になつて了まつて、老伯爵夫人と同名じやうに、自分たちが人生に於て播いた物のまばらな穂を刈りながら、各自の餘生を送つて居るといふやうな人々や、外部的の社會事件をば、話して居た。

が、彼等、即ち、さういふ同時代人々が、老伯爵夫人に取つては、考量するだけの價値のある唯一の實在の世界を成して居るやうに思はれたのだ。

ビエールの熱心な様子で以つて、ナタアシヤは、彼の都への旅行は面白いものであり、そして、彼は、それを衆皆に話し度くつて堪まらぬのであるが、然し、老伯爵夫人の前では、思ひ儘に話すことを敢てし得無いで居ることを、見て取つた。

デニエツフは、家族の一人では無いので、ビエールの用心して居る事が解から無かつたし、又その上に、當時の事態に不平であつたので、彼得堡で進行しつゝあつた總ての事件に對して非常に利害の感を持つて居た。彼は、セミオオノフスキイ聯隊に關する此頃の醜聞や、アラクチエーフのことや、聖書協會のことに就て、ビエールの談話を聞かうと、頻りに骨折つて居た。ビエールは、時々、誘ひ出されて、さういふ問題の物語を始めさうになるのであつたが、ニコ

ライイとナタアシャが、公爵イヴァンや伯爵夫人マアリア・アントノヴナの健康の物語へと、何時もビエールを引き戻すのであつた。

「おい、ゴスネルとか、マダム・タタアリノフとかいふやうな其様な愚劣な物語ばかりぢやア下ら無いぢやア無いか」と、デニソフが云つて、「尙且その状態が續いて居るのかい？」

「續いて居る？」と、ビエールは云つた。「何うして其様な事どころかい。聖書協會が今では政府全體なんだ」

「それは、何の事なんです、お前さん」と、老伯爵夫人が尋いた。老伯爵夫人は、明白に、茶を飲んで了まつたので、食事を爲した後での不機嫌になる辭柄をば探して居るのであつた。「政府のことを何う云つておいででしたの？ 私には何だか寸毫も解りませんね」

「いや、ね、母上様」と、何時も總ての事をば母親自身の言語に翻譯することの巧かつたニコライが、語を挾れた。「公爵アレクサンドル・ニコラエヴィイチ・ゴリツインが會を造らへたんです、で、彼の人が非常な勢力を持つて居るといふんです」

「アラクチエーフとゴリツインが」と、ビエールが、氣が付かずに、云つて、「今では實際上の政府その者なんだ。が、實に甚い政府なんだよ。彼等は、何様な物の裡面にも、謀叛がある

やうに見るんだ、彼等は有らゆる物を怖がつて居るんだ」

「何ですつて、公爵アレクサンドル・ニコラエヴィイチのことを悪く云ふんですか。彼の人には、眞個に得難い人なんです。私は、往時、マアリア・アントノヴナの家で度々彼の人に逢つたものですよ」と、老伯爵夫人は、さも切なさうな調子で、云つた。それから、沈黙の爲めに尙一層切なくなつた風で、言語を續けて、「此節では、人が誰でも彼でも悪くいふやうになりましたのね。聖書協會、それが何う悪いのですか」

で、老伯爵夫人は、席を起つた（誰も起つた）、そして、嚴かしさうな顔で、次の喫煙室へと、ツウツと行つて了まつた。

その後の悲しげな沈静の最中に於て、次の部屋から、小兒等の聲々や、哄笑の騒ぎが聞こえて來た。確に、小兒たちの間に何か面白い遊戯が始まつて居るのらしかつた。

「出來た、出來た」と、小さいナタアシャの嬉しさうな金切り聲が、中で一番高く聞こえた。

ビエールは、伯爵夫人マアリアやニコライと眼を見合せた（ナタアシャは、ビエールが始終見て居たのだ）、そして、嬉しさうに微笑んだ。

「愉快な音楽だね」と、彼は云つた。

「アンナ・マカアロヅナが靴足袋を編んで了まつたんです」と、伯爵夫人マリイヤが云つた。「うん、見に行かう」と、ビエールは云つて、跳び起つた。「ねえ」と、彼は云つて、戸口で止まつて、「私が殊に彼様いふ音楽が好きなのは譯は解るでせう——私に最初に、總て無事だといふことを知らせて呉れるのは彼物なんです。今日歸つて来るうちに、家へ近くなるに従つて、私の狼狽はだん／＼甚くなつたんです。玄關の室へ入つて来ると、大笑をして居るアンヅルウシヤの聲が聞こえたんです、で、私は、總て無事だと知つたんです……」

「覺がある、その感は、僕も覺がある」と、ニコライが賛同した。「僕は行つちやアいけないんだ——靴足袋は僕を驚かす爲めに用意して置かうといふんだよ」

ビエールは、小兒たちの所へ入つて行つた、と、金切り聲や、哄笑の聲が、一層高くなつた。「さア、アンナ・マカアロヅナ」と、ビエールの聲が叫んで、「此所の、部室の真中で、一、二の號令で、私が、三といふと、此所に立つんだ。お前は、私の腕へおいで。さア、一、二……」全く閑然として了まつた。

「三」で、小兒たちの聲々の熱心な喚呼が、部室の裡で起つた。「二つ、二つ」と、小兒たちが叫んだ。

小兒たちがさう叫んだのは、アンナ・マカアロヅナが、自分のみが知つて居る秘術で、一組の針で一度に一足編んで了まう靴足袋を指したのであつた。アンナ・マカアロヅナは、一足が出来あがるといふと、小兒たちの眼前で、一方の裡から今一つの方を引張り出す嚴肅な儀式を何時もやるのであつた。

(十四)

その後、間も無く、小兒たちは、お休みなさいを云ひに入つて来た。彼等は、衆皆に接吻した、家庭教師等や、嫁娘等が、お休みなさいを云つた、そして、去つて了まつた。デッサレのみは自分の教子と一緒に後に残つて居た。その家庭教師は、自分の若い教子に、階下へ行かうと、叫びた。

「いゝえ、モシユウ・デッサレ、僕は、叔母様にお願ひして、此所に居させて頂くんです」と、ニコオリンカ・ボルコオンスキイが、又叫語で答へた。

「叔母様、僕を此所に居させてください？」と、ニコオリンカは、叔母の傍へ行つて、云つた。彼の顔は、懇願と、昂奮と、熱心とで満ちて居た。

伯爵夫人マリイアは、彼を見た、そして、ビエールへと振り向いた。

「貴下が此所においでですと、此の兒は何うしても貴下の傍を離れません……」と、伯爵夫人マリイアは云つた。

「私が今直きに伴って行きます、モシユ・デッサレ。お休みなさい」と、ビエールは、云つて、瑞西人の家庭教師に手をさし出した、で、ビエールは、微笑んでニコオリンカに振り向いた。「未だ君には逢は無かつたね。マリイ、實に好く似て来るぢやアありませんか」と、彼は、伯爵夫人マリイアに振り向いて、云ひ足した。

「父上様に似てるんですか？」と、男の兒は、顔を眞赤にして、有頂天な、輝いた眼で、ビエールを見上げて、云つた。

ビエールは、ニコオリンカに向いて、頷いた、そして、小兒たちの爲めに途斷れて居た談話を續けた。伯爵夫人マリイアは、手に、何か粗布の刺繍物を持つて居た、ナタアシヤは、良人に眼を見据ゑて、坐つて居た。ニコライとデニソフは、起つて、烟管を持つて來て貰らつて、烟草を喫かし、そして、沸茶器の所に退屈さうな頑強さで、凝乎と坐つて居るソオニヤから、茶の杯を受け取り、それから、ビエールに種々の事を尋いて居た。

縮れた髪の毛、脆弱さうな男の兒は、眼を輝かして、誰にも顧みられずに、隅に坐つて居た。ビエールの舉動をば一つも見通すまいと、縮れた髪の毛の頭と、折り襟の上へ出て居る細りした頸とを、右方に左方に、振り向けながら、ニコオリンカは、時々身を顛はせ、確に、何か知らずなな烈しい感情に胸を波立たされたらしく、何か獨で呟いて居た。

談話は、高官連中の間のその當時の醜聞へと向いた、さういふ問題は、人民の大多數が、大抵何時でも、國內の政治の中で、一番面白がるものであるのだ。

官途に於て自分が失望したが爲めに、政府に對しては不満であつたデニソフは、今彼得堡で行はれて居る、彼の考へる所では愚劣な事であるところの總ての事を、嬉しがつて聞いた。そして酷しい皮肉な語句で、ビエールの言語に、評を加へた。

「往時は、誰でも何人か知らになるには、獨逸人で無ければなら無かつた、が、此頃では、タタアリノフ家の女どもやマダム・クルツドネルと踊ら無きやアならん、エカルトシヤウゼン、其他さういふものを……讀ま無きやアならんのだ。うゝん、往時のナボレオンを今一度暴れさせた方が餘程宜いなア。奴なら、衆皆の頭の裡から、さういふ愚劣な事柄を叩き出して呉れるわい。そのシユワルツといふ野郎にセミオノフ聯隊を委すなど、は、實に不都合極まるぢやア

無いか？」と、彼は叫んだ。

ニコライは、何事でも非難するデニソフのやうな氣質では無かつたけれども、彼も亦、政府を非難するのが、威儀のある、適切な事だと思つたのだ、そして、彼は、Aなる者が何がしの省の大臣となり、Bなる者が何がしの縣の知事になつたとか、皇帝が斯う云つたとか、大臣が彼様云つたとかといふやうな事はかりが、一番重要な事件であると、信じて居た。で、彼は、自分は、その問題に興味を持つて、それに就てビエールに尋か無ければなら無い義務があるのだと、思つた。

さういふ風で、ニコライやデニソフが出した種々な問が、談話をば、政府の最も高い官吏連中に関する噂話の常例の方向をば辿らせて居た。

が、平常から良人の有ゆる考想、有ゆる表情を知つて居たナタアシャは、ビエールが、その間始終、談話をば他の道へ向け、そして、自分の考想、即ち、彼が、彼得堡へ行つて、自分の新しい友の公爵フオドルと打合せて来た考想に就て、自分の胸を打ち開け度いと思つて居るのを見た。ナタアシャは又、ビエールには、其の方へと談話を向はせて了まうことが能き無いのを見た、で、ナタアシャ自身が、次のやうな問を出して、その手傳を爲た――

「公爵フオドルとの話は何うお極りですか？」

「それは何ういふ事かね？」と、ニコライが尋いた。

「同なし事を幾度も繰り返すきりさ」と、ビエールは、云つて、四邊を見廻した。「最早誰でも堪へ切れ無い程までに事態は悪くなつて居るのだと、誰も思つて居るし、有らん限り誰でも堪へ切れ無い程まで、總ての正直な人の義務なのだ、誰も思つて居るんだ」

「いや、でも、正直な人には何ういふ事が能きるのかね？」と、ニコライは、云つて、微弱に顔を擧めた。「何うすれば宜いんだい？」

「いや、斯うなんだ……」

「書齋へ行かう」と、ニコライが云つた。

孩兒の所から喚びに来るだらうと餘程前から豫期して居たナタアシャは、自分を呼んで居る子守の聲を聞いた、で、小兒部屋へ行つた。伯爵夫人マリイアもナタアシャと一緒に居た。男連は、書齋へ行つた。そして、ニコオリンカ・ボルコンスキイも、叔父には見付られずに、書齋へ竊然と入り込んだ、で、窓の傍の暗い所の書物卓子の所に坐つた。

「所で、君は何う爲やうといふのかね？」と、デニソフが云つた。

「何時までも、斯様な變挺な計畫ばかりさ」と、ニコライアイは、云つた。

「所でね」と、ビエールは、云ひ始めて、坐らすに、部室の裡を歩き、時々立ち止まつて、舌の廻らぬやうな言語付で、速い手真似を爲ながら、話した。「斯ういふのが、彼得堡に於ける事態なんだ、即ち、皇帝が何も彼も投げ遣つて了まはれたんだ。皇帝は、此の神秘主義に全く包まれて了まはれたんだ」(ビエールは、神秘主義をば、今は、誰の場合でも、容さないのであつた)。「皇帝の求められるのは、唯だ平和のみなんだ、そして、皇帝は、有らゆる物をば押し潰ぶし、破壊して居る信仰も無い學問も無い彼様いふ人間、マグニツキイとか、アラクチエーフとか、その他の有象無象ども……に依つて、平和を得られて居るのみなんだ。君が若し君自身で財産の管理を行ら無くつて、平和と安静を求めるときりだつたとすれば、君の支配人が残酷であればあるだけ、一層容易に君の目的が遂げられる譯だと、君も認めるだらう」と、ビエールは、ニコライアイに振り向いて云つた。

「うん、だが、さういふ事は畢竟何ういふ譯になるんだね？」

「いや、何も彼も破滅に赴きつゝあるんだ。法廷では賄賂が行なはれ、軍隊では、強壓と練兵の外、何にも無いんだ、追放——人民は拷問されつゝあるんだ、そして、社會の進歩は止め

られて了まつて居る。若い、立派な物は、何でも彼でも——奴等が叩き潰して居るんだ。この状態では到底行ける氣遣ひは無いことは、誰にも解つて居るんだ。緊張が餘りに強過ぎて居る、糸は切れざるを得無い」と、ビエールは(政府といふものが存在して居る限り、政府の働を洞見した人が、何時でも云ふ通りに)云つた。「僕は、彼得堡で彼等に或る事を話してやつたんだ」

「誰に話したのかね？」と、デニソフが尋いた。

「いや、誰だか解る筈ぢやア無いか」と、ビエールは、眉の下から意味ありげな眼容をして、云つて、「公爵フォオドル、其他の連中さ。教育事業や、慈善事業は、勿論極く結構なんだ。彼の人々の目的其他は非常に宜いんだ、けれども、現時の状態では、行ら無ければならぬ事は、それより少し異つた或る事なんだ」
その途端に、ニコライアイは、甥の居ることに氣が付いた。彼は厭な顔を爲た、彼は甥の傍へ行つた。

「何故お前は此所に居るんだ？」

「いや、此所に居させとき給へ」と、ビエールは、云つて、ニコライアイの腕を撃つて、話を

續けた。「それだけでは未だ駄目なんだ、さう僕は彼等に云つて遣つたんだ、何かそれより他の事が今は必要なんだとね。今にも糸が切れるのを待つて居ずに、誰も避け得られ無い革命を待つて居ずに、能きるだけ多くの人々が能きるだけ密接に手を連ねて、全體の大瓦解に抵抗し無ければいけないんだ。總ての壯年と精力が、他へ引つ張られて行き、空費されつゝあるのだ。或る者は女の爲めに誘惑され、或る者は名譽の爲めに、又或る者は外觀の立派な物とか錢とかの爲めに誘惑され——彼等は衆皆間違つた方へと降参して居るんだ。君や、僕のやうな獨立した正直な人間はといふと——其様な人間は最早一人も残つて居無いんだ。僕の云ふのは、斯うなんだ、會の範圍を廣めろ、會の主旨を忠義ばかりには限らずに、獨立や、行動も、主旨にしろ、と云ふんだ」

ニコライアイは、甥の所を離れて、腹立たしさうに椅子を引き出して、それに坐つた。彼は、ビエールの話を聞いて居るうちに、不満さうに咳拂を爲た、そして、だん／＼甚く顔を顰めた。「けれども、何ういふ目的を以つての行動なんだい？」と、彼は、叫んだ。「そして、君は政府に對して何ういふ態度を執るんだい？」

「いや、擁護者の態度さ。會は、政府が許るしさへすれば、秘密結社にさへ爲ることは無いだらうと思ふね。政府に反對するどころか、吾々は眞正の保守主義者なんだ。それは、十分な意義に於ての紳士なるもの、會なんだ。吾々は、單に、僕の小兒等や君の小兒等を慘殺することからブガアチーフを妨げ、僕を軍制殖民地へ流すことからアクラチーフを妨げる爲めのみ、公共の幸福と安寧をば得るといふ唯だそれだけの目的で、手を繋げて居るのに過ぎ無いんだ」

「うん、だが、それは、秘密結社なんだ、だから、政府に反抗する有害な結社で、その結果は社會に有害な事を生ずるやうになるばかりなんだ」

「何故左様なんだい？ 歐羅巴を救つた徳行會（人々は未だ露西亞が歐羅巴を救つたのだと信ずることは敢てし得無なかつたのだ）は、社會に害悪を流したかね？ 徳行會は、徳行を奨める結社なんだ、それは、愛と相互扶助なんだ、それは、基督が十字架の上で説いた所のものなんだ……」

談話の最中に入つて來たナタアシヤは、嬉しさうに自分の良人を見た。ナタアシヤは、良人が云つて居る事柄を嬉しがつて居たのでは無かつた。良人の云つて居る事は悉皆實に非常に單純であるし、又、ナタアシヤ自身が餘程前から知つて居た事であるやうに、ナタアシヤには思

はれたので、その談話は、ナタアシャに取つては、別に興味のあるものでは無かつた。ナタアシャが、さういふ氣がしたのは、ナタアシャは、ビエールの云つて居る事が出て来る源の總て——即ち、ビエールの全心靈——をば知つて居たからであつた。ナタアシャは、良人の熱心な、熱中した姿を見て嬉しがつて居たのだ。

ビエールをば、それよりも尙一層有頂天な嬉しさで見守つて居たのは、衆皆からは忘れられて居た折襟の細つそりした頸の男の兒であつた。ビエールの口から出る一語一語がアンツルウシャの心を燃え立たした、そして、彼の指が苛々と動き出して、彼は、我知らず、叔父の卓子の上にある封蠟の棒や鐵筆を取り上げて、それを片々に折つて了まつた。

『それは、寸毫も、君が想像するやうなものでは無くつて、僕の云ふのは、德行會のやうな結社を造らへやうと云ふんだ』

『いや、君、その——德行會とかは、食腸詰者には至極結構だらうがね、我輩には、それは何の事だか解らん、我輩にはそれを發音することさへ能きん』と、デニイソフは、高い確乎した聲で、口を挟めた。『何も彼も、朽ち、腐つて居る、我輩もそれだけは同感だ、唯だ君の德行會なるものは、我輩には一向解らん、だが、若し、人が不平ならば、今ブント（騷擾若く

は反亂）するといふのなら、我輩は君に賛成する』

ビエールは微笑み、ナタアシャは哄笑つた、が、ニコライアイは、尙一層額を擧めて、何様な革命も決して起る氣遣の無いことや、ビエールが話したやうな危険はビエールの想像の裡での外少しも存在して居無いといふことを、ビエールと論じ始めた。

ビエールは、自分の説を主張した、そして、彼の智力上の能力が、ニコライアイよりも鋭く、そして豊富であつたので、ニコライアイは直きに何う答へて宜いか分らなくなつた。彼は、自分の心の裡では、論斷に依つては無くして、論斷より以上の何物かで以つて、自分の意見が疑ふべからざる眞理であることを確信して居たので、さういふ風に答に窮したので、一層腹を立てさせられたのであつた。

『所で、それは、斯うなんだ』と、彼は云つて、起つて、苛々と隅へ烟管を置き、それから、それを投げ捨てた、『僕はそれを證明することは能き無い。君は、何も彼も悉皆腐つて居るんで、革命が有るだらうと云ふんだ、僕は左様は思はない、それから、君等は、君主に對する服従の誓言は條件的な物であるといふんだ、所が、それに就てはね、宜しいか、君は僕の非常な信友だ、それは君の知つてゐる通りだ、けれども、君が秘密結社を造り、政府に反對して行動し

だすとするば——それは、何ういふ事だらうが、僕は政府に服従するのが僕の義務であることを知つて居るんだ。で、若し、アクラチエーフが、僕に、一中隊の騎兵を率ゐて君に向つて行つて、君を斬り倒すことを命ずるならば、僕は一秒の躊躇もし無いで出かけるよ。で、其時になつて、君は君が思ひ度いことを勝手に思ふが宜い」

座の白けた沈黙がさういふ言語に續いて來つた。

ナタアシャが、真先に、自分の良人を辯護し、兄を攻撃した。ナタアシャの辯護は、弱くつて、拙かつた。が、それは、ナタアシャの目的を達した。談話が再始められた、そして、それは、最早、ニコライの最後の言語のやうな心持の悪い敵意を持つた調子の談話では無かつた。

衆皆が起つて晩飯を食ひに入つて行かうとすると、ニコオリンカ・ボルコオンスキイは、蒼い顔と輝いた涼しい眼で、ビエールの傍へへ行つた。

「ビエール叔父さん……貴下……いゝえ……若し父上様が生きておいでしたら……貴下の方なんでせうか？」と、彼は尋いた。

ビエールは、談話の間、この男の子の心の裡に獨立して行はれて居たに違ひ無いと思はれる思

想や感情の獨創的な、複雑な、激しい混闘の全體をば、不意に見た。で、自分が云つて居た事を悉皆憶ひ出して、彼はその男の子が自分の云つて居たことを聞いたのを厭に感じた。けれども、彼はその子に答へ無い譯には行か無かつた。

「必定、さうだらうと思ふ」と、彼は不承々に云つた、そして、書齋を出た。

男の子は下を見た、すると、そこで始めて、自分が書物卓子の上でやつて居た亂暴に氣が付いたらしかつた。彼はカッと赤くなつた、そして、ニコライの傍へ行つた。

「叔父さん、御免なさい、私が爲たんです——でも故意ではありません」と、彼は云つて、封蠟や鐵筆の斷片を指した。

ニコライは怫然となつて跳びあがつた。

「宜しい、宜しい」と、彼は云つて、卓子の下へ鐵筆や封蠟の斷片を投げ落した。で、懇然のことで憤怒を抑へ付けたらしい風で、彼は男の子に背部を向けた。

「お前は此方に居ては不好なかつたんだ」と、彼は云つた。

(十五)

晩飯の時は、最早政治や結社のことは何も話され無かつた。が、談話はニコライに取つて一番心持の好い題目——千八百十二年の回想——へと轉じた。デニソフはその談話を起させた、そして、ピエールは殊に親しげに面白さうに話をした。で、その座の人々は非常な親しい心持になつて別れた。

ニコライは書齋で衣服を着替へて、其所で自分を待つて居た執事に指圖を與へてから、寢衣で自分の寢室へ入つて行つた。と、彼の妻が未だ書物卓子の所に居た、妻は何か書いて居た。

「何を書いて居るんだね、マリイ？」と、ニコライが尋いた。

伯爵夫人マリイは顔を赤めた。伯爵夫人は、自分が書いて居た事柄が良人には理解されず賛成もされ無いだらうと慮れた。

伯爵夫人は、自分が書いて居たものを良人から隠して了まひ度いと思つた、が、それと同時に、自分がさう云ふものを書いて居るのが良人に見付かつて、その事を良人に話さ無ければなら無くなつたのを喜んだ。

「私の日記ですよ、ニコライ」と、伯爵夫人は云つて、自分の確乎した、大膽な筆跡で充ちた青い手帖を良人に渡した。

「なに、日記だつて……」と、ニコライは少し嘲弄した風で云つて、手帖を取つた。彼は佛蘭西語で斯う書いてあるのを見た——

『十二月四日——アンヅリウシヤが』(彼等の年長の男の子)『今朝起きた時に、何うしても着替へようとし無い、で、マドモアゼル・ルイズが私を喚びに来た。彼は悪戯で、意地張つて居た。私は嚇し付けようとして見た、が、益々機嫌が悪くなるばかりであつた。そこで、私は彼を温順にさせようと思つた、で、彼を棄て、置いて、子守に手傳つて他の小兒等を起させ、アンヅリウシヤには、私は彼を愛さ無いのだと云つた。彼は、それで驚かされたかのやうに、長いこと静にして居た。それから、彼は夜の襯衣のまゝで私の所へ跳び出して来て、私が長いこと宥めることが能き無かつた程までに獻敵いて居た。彼に取つて一番苦しかつたことは、自分の行爲が私を嘆かして居たと云ふことであつたのは明白であつた。それから、私が晩に彼の報告を彼に遣るといふと、彼は、私に接吻しながら、再懇然に泣いた。愛情で行けば、何うにでも爲ることの能る兒だ』

「彼の報告といふのは何だね？」と、ニコライが尋ねた。

「晩に年長の小兒等に各自の行状に就いて、一寸とした點數を與へることにしたんです」

ニコライは、自分を見守つて居る輝いた眼を一寸と見た、そして、日記の頁を繰り開けて、讀んで行つた。小兒等の生活の中で、小兒等の品性を示すとか、彼等を育てる方法に就いて、概括的結論に達し得べきやうなもので、母親に取つて興味のあるやうに思はれるものは、何も彼もその日記の中に書き留められて居た。それは、大抵非常な些細な細かな事柄で成り立つて居た、が、さういふものは、母親にもさうは見え無かつたし、又、今始めて小兒等の生活のこの記録を讀む父親にも、さうは見え無かつた。

十二月の五日の所には、斯う記してあつた――

「ミティヤが食卓で悪戯であつた。父上様がミティヤにはブディングを遣つては不好ないと仰しやつた。ミティヤはブディングが食べられ無かつた、が、彼は他の者が食べて居るのを情無ささうに、如何にも食べたさうに見て居た。小兒等に甘い物を遣らぬやうにして彼等を罰するとは、唯だ食ひ度がる心を發達させるばかりなのだ」と私は信ずる。ニコライに話さなければ

なら無い」

ニコライは手帖を下に描いて、妻を見た。輝やかな眼が、彼が賛成だか何うだかを見ようと、疑つた風で彼を見て居た。ニコライが賛成して居ることや、彼が妻に對して熱心に感服して居ることは、少しも疑ひが無かつた。

さうまで學者風に行ふ必要は無いかも知れ無い、さうする必要は少しも無いことかも知れ無い、と、ニコライは思つた、が、小兒等の精神上の安寧を計ることにのみ向けられた、この倦まざる不斷の精神上の努力が、ニコライに取つては非常に嬉しかつた。若しニコライが自分の感情をば解析することが能るのであつたら、彼は、彼が自分の妻を何所までも優しく愛することや、さういふ妻を持つて居ることを彼が誇つて居ることの基礎その物は、何時でも、妻の精神的なことや、妻の方では何時もその裡に住んで居るのに、彼の方では殆ど入ることさへも能き無いその高い道義の世界に對する畏怖のこの感情であることを、見出したに違ひ無かつたのだ。彼は、妻がさう賢くあり、さう善くあることを誇り、精神上の世界では自分が妻の傍では何でも無い下ら無い者であることを認め、そして、妻が、その心靈を以つて、良人たる自分のも

のであるのみならず、尙又、自分の自己そのもの、一部であることを、尙一層喜んだ。

「全く、全く賛成だ」と、彼は意味の深い風で云つた。「所で」と、彼は、短い間を置いて、云ひ足して、「所で、俺は今日は行き損なつたよ。お前は書齋に居無かつたね。ビエールと俺が議論をして居た、俺はツイ腹を立て、了まつた。何うも爲方が無い。彼の男は何うしても小兒だ。ナタアシャが彼の男を彼様勝手に爲ることが能きるので無かつたら、彼の男は何うなるのであつたらう。まあ、お前、彼の男が何の用で彼得堡へ行つたのだと、思ふかね？……奴等が行らうとしたのは……」

「え、知つて居ます」と、伯爵夫人マリイアが云つた。「ナタアシャが私に話しました」

「うん、成程、では、お前知つて居るね」と、ニコライは言語を續けて、議論のことを憶ひ出したばかりで最早熱して来た。「彼の男は、政府に反対の行動を執るのが有らゆるチャンとした人の義務だと俺に説き付けようとするのだ。けれども、人が一度び誓つた忠義や義務は……俺はお前が其所に居無かつたのが残念だ。で、彼奴等は衆皆、デニイソフは勿論、ナタアシャまでも、俺にかゝつて来た……ナタアシャの風は餘程可笑しかつた。吾々が知つてる通り、彼女は自分の小さい指一本で所天を何うにでもして了まうことが能きなのだ。けれども、議論に

なるといふと——彼女は自分の考想だと呼ぶことの能きものを一つも持つて居無い——彼女は唯だ所天の言語を繰り返すばかりなんだ」と、自分に最も近い、最も親愛なるものを批難するやうに人を迷はすその抵抗し難き衝動に打ち負けて、ニコライは云ひ足した。ニコライは、自分がナタアシャに就いて云つて居たことは、一語も違はずに自分と自分の妻との關係の場合に當てはめることの能きものであるのに、気が付か無かつたのだ。

「え、私はそれに気が付いて居ます」と、伯爵夫人マリイアが云つた。

「俺が、義務と誓つた忠義とが、何よりも第一なのだ」と彼の男に云ふと云ふと、彼の男は、何が何だか一向解ら無いことを云つたよ。お前が彼所に居無かつたのは残念だ。お前は何う云つただらうね？」

「私の考想では、貴下のお考想は全く御道理です。私はナタアシャにさう話しました。ビエールは、誰も彼も苦しんで居るし、虐待されて居るし、腐敗して居て、吾々の隣人を助けるのが吾々の義務だと、云つて居るんです。勿論、それは、彼の人の云ふ通りです」と、伯爵夫人マリイアが云つた。「けれども、彼の人は、吾々には神御自身が吾々に向つて極めて下すつた他のもつと近い義務があること、それから、吾々は、吾々自身の爲には危険を冒しても宜いが、

吾々の小兒等の爲にはさう爲ては不好いといふことを、忘れて居るんです」

「左様だ、左様だ、俺が彼の男に云つたのも丁度それなんだ」と、自分が全くそれを云つたやうな氣が眞個にして居たニコライが叫んだ。「で、彼奴等はニコオリンカの居る前で、相互の隣人を愛すること、か、基督教とか、總てさういふことに就いて、云ひ度いまいふことを残らず云つて了まつたのだ、ニコオリンカはその前から竊然其所へ入つて來て居て、俺の物を悉皆滅茶々に毀して居るのだつた」

「まあ、ねえ、ニコライアイ、私、ニコオリンカには困ることが眞個に度々あるんですよ」と、伯爵夫人マリイアは云つた。「彼兒は非常な珍らしい兒です。で、私は自分の小兒等のことに氣を取られて、彼兒のことを打棄り放しにして居るやうで、濟ま無いやうな氣が爲るんです。吾達は各自衆皆自分の小兒を持つて居るし、各自自分の親兄弟があるんですが、彼兒はといふと、其様なものは誰も無いんです。彼兒は、何時も自分獨で自分の考想を考へ込んで居るんですよ」

「いや、彼兒に對することでお前に少しでも缺點があるとは俺は思はんよ。最も優しい母親が自分の息子に向つて爲ることの能きことは、殘らずお前が彼兒に向つて是迄も爲たし、今も爲て居るんだ。で、勿論、俺はお前がさう爲て居るのを喜んで居る。彼兒は非常な立派な兒

だ。實に立派だ、今夜は、彼兒はビエールの談話を聞いて居て、夢のやうになつて了まつたんだ。で、何うだらう、吾々が起つて晩食に行かうと爲るとね。俺が一寸と見ると、彼兒は俺の卓子の上の物を何も彼も片々に毀して了まつて居た。が、直ぐそのことを俺に云つたよ。俺は彼兒が虚言を云つたのを一遍も聞いたことが無いんだ。彼兒は非常に立派な兒だ」と、ニコライアイが繰り返した、彼は心の裡ではニコオリンカを好か無かつただけけれども、その兒が非常に立派な兒であることをば、承認し無ければならぬやうな心持になつて居るのを、何時も感じて居るのであつた。

「でも、私は母親と同等には行けませんわ」と、伯爵夫人マリイアが云つた。「私は何うしてもさういふ氣がするんですよ、で、何うも濟ま無い氣がして爲方が無いんです。彼兒は眞個に珍らしい小兒ですよ、けども、私は彼兒のことが非常に心配になるんです。他人と交際させることが彼兒の爲には宜いだらうと思ふんです」

「うん、いや、それは最早間も無くやるよ、この夏には、彼得堡へ伴れて行つて遣る」と、ニコライアイは云つた。「さう、ビエールは何時も夢想家であつたし、今でも何時もさうなんだ」と、ニコライアイは、確に彼の感情を惱まして居たらしかつた書齋での議論へと返つて、言語を

續けた。「いや、其様な——アクラチエーフの失策とか、何とかいふやうな——ことが俺に何の交渉があるんだ、吾々の結婚した時分には、非常な借財があつて、牢屋に入れられさうであつたし、それから又、其様なことは寸毫も知りもせず、解りもし無かつた母親があつたといふ有様なのに、アクラチエーフのことなんぞが、俺に何の交渉があるんだ。で、それから、お前や、小兒等や、俺の仕事もあるんだ。俺が朝から晩まで使用人を監督したり、事務所へ出たりするのは自分自身の樂しみの爲では無いんだ。いや、決してさうでは無い、俺は母上様を慰め、お前に金を返し、そして、俺が家を繼いだ時のやうな、乞食のやうな状態には、小兒等をならせ無いやうにする爲に、働か無ければなら無いことを知つて居る」

伯爵夫人マリイは、人間は麵麩ばかりで生きるもので無いことや、ニコライはこの仕事なるものに餘り重きを置き過ぎて居るといふことを、ニコライに云ひ度かつた。が、伯爵夫人は、それを云つては不好いし、又、さういつた所で、無益であることを知つて居た。

伯爵夫人は、唯だ良人の手を繋つて、それに接吻した。彼は、妻の方に於てのこの舉作をば、自分の言語に對する承認と賛成との表徴として受取つた。で、寸時黙つて考へ込んで居た後で、獨語のやうに次のやうに云ひ始めた。

「ねえ、マリイ」と、彼は云つて、「イリイヤ・ミツロフアニチが」(これは彼の執事であつた)「タンポフの領地から今日此所へ来たんだ、で、彼所の森は八萬留になると云ふんだ」で、熱心な顔で、ニコライは、最早直きにオツラアドノエを買ひ返すことが能きさうだといふことを話し始めた。「今年すれば、俺は小兒等を……非常な立派な位置に置いて遣る」伯爵夫人マリイは良人の言語を聞いて居た、そして、良人が自分に向つて云つた事柄を殘らず理解した。伯爵夫人は、良人がさういふ風に獨語のやうなことを云つて居る時には、彼が自分が何ういふことを云つて居たのか、時々伯爵夫人に尋いて、伯爵夫人が何か他の事を考へて居たのに彼が気が付くといふと、機嫌を悪くすることを、伯爵夫人は知つて居た。けれども、伯爵夫人は、注意して聽いて居るには非常に骨を折らなければなら無かつた。何故だといふと、伯爵夫人は、良人が自分に向つて云つて居る事柄に寸毫の興味も覺え無かつたからであつた。伯爵夫人は良人を見た、と、伯爵夫人は確に他の事を考へて居たといふのでは無かつたが、伯爵夫人の感情は良人の談話より他の場所へ行つて居た。伯爵夫人は、伯爵夫人自身が理解して居た總ての事柄を、何うしても理解することの能き無かつたこの男に向つて、服從的な、優しい愛を感じた、そして、伯爵夫人は、全くその理由で、熱烈な優しい愛情の少し籠つた風で、

尙一層良人を愛したやうであつた。

伯爵夫人の心を全く占領して、良人の計畫の一部仔什を聞き漏さぬことから伯爵夫人を妨げたさういふ感情とは全く離れて、良人が云つて居た事柄と共通な所は寸毫も無かつたやうな種々な着想が、伯爵夫人の脳裡をば、始終浮び通つて居た。伯爵夫人は、自分の甥のことを考へた（良人が、ビエールの談話に對してその甥が昂奮したことに就いて、云つた事柄が伯爵夫人に非常な印象を與へたのだ）、と、甥の優しい、感じ易い性格の種々な方面が、伯爵夫人の心の裡へ起つて來た、それから、自分の甥のことを考へて居ながらも、伯爵夫人は、又、自分自身の小兒等のことを考へた。伯爵夫人は、自分の甥と自分自身の小兒等とを較べはし無かつた、が、甥に對する自分の感情と自分自身の小兒等に對する自分の感情とを較べた。そして、ニコオリンカに對する自分の感情の裡には何か知ら缺けたものがあるのを感じて、悲しく思つた。この相違は、甥の年齢に基づくものではあるまいかといふ着想が、時々伯爵夫人の心の裡に起つて居た。が、伯爵夫人は、甥に對して濟ま無い氣がした。で、伯爵夫人は心の裡で、その憤ひをし、不可能な事、この世で不可能な事、即ち、自分の良人を愛し、自分の小兒等を愛し、ニコオリンカを愛し、それから、基督が人間を愛したやうに、總て自分の同人類を愛する事を、

爲ようと、誓つた。

伯爵夫人マリイアの心靈は何時も「無限」、「永遠」、「完全」に向つて努力して居るのであつた、で、伯爵夫人は何時も平和で居ることは能き無かつた。肉に依つて押し付けられて居る靈魂のその隠れた崇高な苦痛の爲に、もの嚴かしいやうな表情が伯爵夫人の顔へ出て來た。

ニコライイは伯爵夫人の顔を凝視めた。

「あゝ。彼女が彼様な風な顔付になる時に俺が慮れるやうに、實際彼女が死んで了まつたら、吾々は何うなることだらう？」と、彼は思つた。で、聖像の前に立つて、彼は晩の祈禱を繰り返し始めた。

(十六)

良人と二人きりになるや否や、ナタアシャも亦、良人と妻のみが話すことが能きるやうに談話をし始めた。即ち、前提や、演繹や、結論の助を借らずに、論理の總ての法則に反對した全く特別な方法で、非常な明晰と迅速で、相互の着想をば理解し合ひ、通じ合ふことをやり始めた。ナタアシャは、今では、さういふ風で良人に話すことに慣れて了まつて居て、ビエールの

方が考を論理的な順序に整へる場合には、それは二人の間の調子が少し狂つたといふ誤らざる徴候だと、ナタアシヤの方では認める位であつた。ビエールが論じ始めて、道理に従つて、静に話した時とか、ナタアシヤがビエールの實例の爲に、ビエールと同じやうな事をし無ければならぬやうになる時は、ナタアシヤはそれが必定喧嘩になる基だと、知つて居た。

夫婦が差し向ひになり、そして、ナタアシヤが、廣く見張つた、嬉しさうな眼で、竊然とビエールの傍へ忍び寄り、不意に、手速くビエールの頭を捉まへて、自分の胸へと押し付けて、『さあ、貴下は悉皆私のものだ、私のものだ。最早何うしても遁がしませんよ』と、云つた刹那からして、論理の何の法則にも背いて居る談話が始まつた。それは、主に、二人が一遍に幾つもの異つた問題に就いて談話をしたからであつたのだ。

さういふ風に、一遍に種々な事柄を議論することが、さういふ事柄が明晰に了解されることを妨げるどころでは無く、却て、二人が相互に十分に理解し合つて居ることの最も確な表徴であつた。

夢の裡では、その夢の導いて行く所の感情の外は、何も彼も不確であり、無意味であり、矛盾して居るものであるが、それと同じに、理論の有らゆる法則から離れたビエール夫婦の間

のやうな考のこの交通に於ては、明晰で、連続的である所のものは、その時云はれて居る所のものでは無くして、さういふ言語を促す所の感情であるのだ。

ナタアシヤは、自分の兄の家の日々の暮し方を、ビエールに話した。自分が、ビエールが居なければ、苦しくつて宛然半死になつて居るといふことを彼に話した。それから、自分はマリイが益々好きになつたことや、マリイが自分より何ういふ點に於ても眞然善い人であるといふことを、ビエールに話した。

斯う云つた時には、ナタアシヤは、マリイの優越を承認することに於て、全く誠實であつたのだが、然し、それと同時に、ナタアシヤは、ビエールが、マリイは勿論他の何の女よりも自分を愛して呉れるのだと豫期した。而も、今のやうな、彼が彼得堡で非常に多くの女を見た後では、殊に、自分に向つて、更に、自分をさう深く愛して居るのだといふことを、彼に云はせ度かつた。

ナタアシヤの言語に應じて、ビエールは、彼得堡の貴婦人たちとの夜會だの、宴會だの、如何に厭であつたかを、ナタアシヤに話した。

『私は、婦人たちに話を爲ることが、全く下手になつて了まつた』と、彼は云つた。『實に退

屈で堪まら無かつた。殊に、私は非常に忙がしかつたものだから」

ナタアシャは、凝乎とビエールを見詰めた、そして、言語を續けた――

『マリイのことですがね、彼の女は眞個に傑い女ですよ』と、ナタアシャは云つた。『彼の女は小兒たちの心を見透す力が有るんです。小兒たちの心の底をば、直ぐ見透して了まうやうなんですよ。その一例を云ひますとね、昨日、ミイテンカが悪戯でした……』

『で、彼の兒は父親其儘ちやア無いか?』と、ビエールが、語を挾れた。

ナタアシャは、何故、ビエールが、斯ういふ風にミイテンカがニコライに似て居るといふことを云つたのか、その理由を知つて居た。ビエールは、自分の義兄と争論したといふことが厭であつた。で、ナタアシャが、それを何う思ふのか、聞き度くつて堪ら無かつた。

『何様な事でも、それが世間一般に受け容れられるやうにならなければ、決してそれに同意し無いといふのが、ニコライの弱點なんです。だが、貴下の貴んでおいでなさるのは、向上の路を自分で開くといふ事が、それなんでせう』と、ナタアシャは、ビエールが嘗て云つたことのある語句を繰り返しながら、云つた。

『い、や、實際は、斯うなんだ』と、ビエールは、云つて、『ニコライに取つては、思想

や、觀念は、娯樂なんだ、殆ど慰みに過ぎ無いんだ。彼の男は、此所で書庫を造らうとして居る。けれども、自分が前に買つた書を読み了ら無いうちは、新な書を買は無いといふことを規則にして居るんだ――シイスマンデイ、それから、ルウソオ、それから、モンテスキュー』と、ビエールは、微笑みながら、云ひ足した。『お前の知つてる通り、私は……』と、ビエールは、ニコライに對する批評を和げやうと爲始めて居た。が、ナタアシャは、それを遮ぎつて、それですら爲る必要の無いことを、ビエールに理解させた。

『では、貴下は、彼の人に取つては、觀念は本氣では無いと云ふんですね……』

『左様なんだ。所が、私に取つては、それより他の物は、何にも本氣では無いんだ。彼得堡に居るうちは始終、夢に誰もを見て居たやうな氣がしたんだ。私は、觀念に心を占領されて居る時には、その他の物は何も彼も本氣では無いんだ』

『あ、小兒たちに貴下が逢つたのを見無かつたのは、眞個に残念ね』と、ナタアシャは、云つた。『孰の兒が一番喜びました?。勿論、リザでせう』

『左様なんだ』と、ビエールは云つた。そして、彼は、自分の興味を引いて居た事柄をば、話し進んだ。『ニコライは、吾々人間は考へては不好いと云ふんだ。が、私は、考へずには何

うしても居られ無いから、爲方が無い。彼得堡で、私が、私が居無ければ何も彼も滅茶々に破れて了まうのだと感じたといふ事實（私はお前にはそれが話せるのだが）のことは、何も云は無いにしても、誰も彼も自分ばかりの思ふ通にし度がつたんだ。が、私は、衆皆の考想を纏めることに、成功したんだ。所で、私の観念は、非常に明瞭で、單純なんだ。私は、吾々は、誰々に反對して行動し無ければならんとは、云は無いんだ。吾々は、間違をするかも知れ無いらんだからね。けれども、私は、斯う云ふんだ、善い主義の爲めに盡くさうと思ふ者は、手を繋げるべし、そして、吾々の旗印をして、精力と正直であらしめよ、と斯う云ふんだ。公爵セルグエーは、實に好い男だ、そして、伶俐なんだ」

ナタアシヤは、ビエールの観念は壯大な観念であるといふことを、寸毫も疑は無かつた。が、或る一つの事に心を苦しめられた。それは、ビエールが自分の良人であるといふ事であつた。「此様な價值のある人、社會に對して此れ程重要な人が、それと同時に自分の良人であるといふことが、眞實なのだらうか？。何うして、さういふ事になり得たのだらうか？」

ナタアシヤは、この疑念をば、ビエールに向つて、云ひ度かつた。「この人が、誰よりも非常に伶俐であるのか何うかを、確に決定することが出来る人々は、誰なんだらうか？」と、ナタ

アシヤは考へ込んだ、そして、ビエールが非常に尊敬して居た人々をば、想像の裡で、一とわたり考へて見た。ビエールの物語から判断するといふと、ブラアトン・カタアエフほど、ビエールが尊敬して居た人は、他には誰も無かつた。

「私が何ういふ事を考へてるのか、貴下分つて？」と、ナタアシヤは云つた。「ブラアトン・カタアエフのことなのよ。彼の人が生きてたら、何と云ふでせうね？。今、貴下に賛成するでせうか？」

ビエールは、この問をば、寸毫も、意外には思は無かつた。彼は、妻の考想の結び付き方を理解した。

「ブラアトン・カタアエフかね？」と、彼は云つた。そして、カタアエフのこの問題に對する判断は何ういふのであつたらうか、それを心の裡に描かうと誠實に骨折つて、考へ込んだ。

「彼の男には解ら無かつたらう、が、それでも、多分、彼の男は、賛成したらう」

「私貴下が眞個に／＼好きよ」と、ナタアシヤが不意に云つた。「眞個に、眞個に」

「い、や、彼の男は賛成し無かつたらう」と、ビエールは、云つて、考へに沈んだ。「彼の男が賛成したらうと思ふのは、吾々の家庭生活なんだ。彼の男は、何事にも、チャンとしたこと

や、幸福や、平和を見るのが、好きであつたんだ、で、吾々は、吾々總てを、彼の男に、誇つて、見せてやる事ができるんだ。お前は、別れて居た時の話をしたね。が、私がお前の傍を離れた後でもつて、何れ程特殊な感じがしたのか、それをお前に話しても、お前は到底信ずることができ無からうと、思ふ位なんだ……」

「まだ、その外……」と、ナタアシャは、云ひ始めやうとした。

「いゝや、さうでは無い。私は、決して、お前を愛することは、止め無い。誰でも、これ以上を愛することはでき無からう、それは、特別な物なんだ……」彼は、云ひ終ら無かつた、それは、二人の眼が出會つて、その残餘の事を云つて了まつたからであつた。

「何て愚劣々々しいでせう」と、ナタアシャが、不意に云つて、「新婚旅行の事なんぞ、それから、一番幸福なのは、最初のうちだなんて。全くその反対よ、今の方が餘程宜いんですわ。唯だ、貴下が私の傍を離れてさへくださら無ければね。私たちが屢く喧嘩したことを、貴下記憶えていらしつて？。で、私が何時も悪かつたんですわね。何時も私の方から怒つたんですわね。けども、何で喧嘩したのか——私は記憶えてさへ居無いですよ」

「何時も、同なじ事さ」と、ビエールは、微笑みながら、云つた。「嫉……」

「云つちやア不好ませんよ、私厭で厭で堪まら無いんですからさ」と、ナタアシャは、叫んだ。そして、冷たい、執念深い光が、眼の裡で煌めいた。「彼の女に逢つたんですか？」と、ナタアシャは、寸時間を置いて、云ひ足した。

「いゝや、それに、見掛けたにしたらところで、彼の女とは氣が付か無かつたらうと思ふんだ」

二人は、黙まつて居た。

「あゝ、貴下知つて、書齋で話をして居らつしやる時に、私が貴下を見て居たことを」と、ナタアシャは、明白に、二人の間に出て來た雲を追ひ拂つて了まはうとするらしい風で、云つた。「で、貴下知つて、貴下と彼の男の兒とは水の二滴が互に似てるやうに似てるんですわ」ナタアシャは、自分の幼兒の息子をば、男の兒と呼んで居たのだ。「おや、最早彼の兒の所へ行か無きやアなら無い時分なのよ……でも、行つちまうのが惜しいのね……」

二人とも、何秒かの間黙つて居た。やがて、不意に、向き合つて、談話をした。

ビエールは、満足と熱中を以て話し始め、ナタアシャは、和やかな、嬉しさうな笑顔で話し始めた。相互に遮り合つて、兩方とも止まつて、相手が話し進むのを待つた。

「いや、何ういふのかね？。話して呉れ、話して呉れ」

「いゝえ、貴下話して下さい、何でも無いんです、ホンの下ら無い事なのよ」と、ナタアシヤは云つた。

ビエールは、自分が云はうとして居た事を云つた。それは、彼得堡に於ける自分の成功に就いての自分に取つて満足な回想の続きであつた。その刹那には、彼は、自分が、露西亞の社會全體の進歩、全世界の進歩に新傾向を與へるべき筈の人間であるやうな氣がした。

「私は唯だ、非常に大きい結果を持つやうな總ての觀念は、何時も單純なものであることを、云はうとしたんだ。私の觀念は實際、若し悪い人々が結合して、一つの力を造るならば、正直な人々も同なじやうにし無ければならぬといふことだけなんだ。實に單純なんだ、ね」

「えゝ、さうですわねえ」

「だが、お前の話は何ういふんだつたね？」

「いゝえ、何でも無いんですよ、下ら無い事なんですよ」

「いゝや、でも、云つたら宜いぢや無いか」

「いゝえ、何でも無いの、ホンの愚劣々々しい事なんですよ」と、ナタアシヤは、云つて、

尙一層晴々とした笑顔になつた。「私、唯だベエテイヤのことを貴方に話さうとして居たんです。子守が今日私の手から彼の兒を抱き取らうとして、私の傍へ寄つて來ました、すると、彼の兒は笑つて、顔を擧めて、私にかじり付いたんです——隠れてる積りだつたんでせうよ。彼の兒は眞個に可愛いこと……あ、彼の兒が泣いてる。では、左様なら」で、ナタアシヤは、部室から駆けだして行つた。

それと同時に、階下の、ニコオリンカ・ポルコオンスキイの寢部室では、夜燈が何時ものやうに點いて居た（その兒は、暗闇が嫌ひであつて、何うしてもその癖が直ら無かつたのだ）。デッサレは四つの枕で頭を高くして、睡て居た、そして、彼の羅馬風の鼻が鼾聲の調子の揃つた音を出して居た。

ニコオリンカは、丁度、冷汗を掻いて目を覺したところで、寢床の裡で坐つて、廣く見開いた眼で、自分の前を眞直ぐに見詰めて居た。

彼は、恐ろしい夢で、目が覺めた。夢の裡では、叔父さんのビエールと彼とが、彼のブルタアクの中の挿繪の裡に出て來るやうな兜を被て、非常な大軍の先頭に立つて進んで居た。この

軍隊は、デッサレが「聖母の絲」と呼んで居た、秋になると空に浮ぶ彼の蜘蛛の絲のやうに、空を満たす斜に曳く白い絲で出来て居た。

その彼方に、又、さういふ絲のやうではあつたが、唯だ稍少しもつと透明な何物かであつた榮光があつた。二人——彼とビエール——は、軽くそして幸福に、彼等の目的地へと、だんだん近く飛んで行きつゝあつた。不意に、彼等を動かして居た絲が弱くなつて、纏れてしまつたやうな氣がした、で、何うにも爲様が無くなつた。すると、叔父さんのニコライが、嚴かしさうな、凄い様子で、彼等の前に立つた。

「これは、お前が爲たのかね？」と、彼は云つて、毀れた鐵筆や、封蠟の棒を指した。「俺はお前を可愛がつて居た、けれども、アクラチエフが俺に命じた、で、俺は、一人でも動き出したら直ぐ殺してしまふぞ」

ニコオリンカは、ビエールへと見返つたが、ビエールは其所に居無かつた。ビエールの代りに、其所にはニコオリンカの父親——公爵アンドレー——が居た。ニコオリンカの父親には姿も形も無かつた、が、その父親が其所に居た、で、それを見るといふと、ニコオリンカは自分が愛情の爲めに弱くなつたことを感じた、彼は、自分が力無く、麻痺して、緩んでしまつた

やうに感じた。父親は、彼を愛撫した、そして、彼を憐んだ、が、彼の叔父のニコライが、彼等の方へと向つて来て、だん／＼近づいて来るのであつた。非常な恐怖がニコオリンカを襲つた、で、彼は目が覺めた。

「父上様だ」と、彼は思った。(家には、公爵アンドレーの非常に善く似た肖像が二つあつたけれども、ニコオリンカは未だ一度も、人間の形をした父親のことを思つたことは無かつたのだ)。「父上様が私の所へ入らして、私を愛撫してくだすつたんだ。父上様は、私の爲た事を善いといつてくださつたんだ。父上様は、ビエール叔父さんの爲た事を善いと思つてくださつたんだ。何様な事を私に仰しやるにしても、父上様の仰しやる事ならば、私は何様な事でも爲るんだ。ムキウス・スカエヴォラは自分の手を焼いた。が、同なじやうな事が私の一生の中に起ら無いと、何うして云へやう？ 私には、衆皆が私に勉強させやうとしてるのを知つてる。で、私は勉強する積りだ。が、何時か卒業してしまふだらう、さうすれば、其所で私は働きたすんだ。私は唯だ一つの事を神様に祈る、ブルタアクの中の人間に有つたのと同なじやうな事が、私にも有るやうにと、神様に祈らう、私は、同なじやうに行るんだ。私はもつと行つて見せる。誰でも、私を知らせ、私を愛させ、私を賞めさすやうにしてやるんだ」で、不意に、

ニコオリンカは自分の胸が戯戯で隆まるのを感じた、で、彼は泣きだした。

「何所か疾るいのですか」と、云ふデッサレの聲を、彼は聞いた。

「いゝえ」と、ニコオリンカが答へた、で、彼は枕の上に仰向になつた。「眞個に善い親切な人だ、私は彼の人を愛する」。彼はデッサレのことをさう思つた。「が、ビエール叔父さん。ああ、實に偉い人だな。それから、私の父上様は？。父上様。父上様。左様だ、私は、父上様さへ満足なさるやうな事を何か必定行つて見せる……」

第二章

(一)

歴史の主題は、國民と人間の生活である。人間の生活は勿論、唯だ一國民の生活をさへ、捉へ、言語を以つて刺し留める——即ち、それを直接に叙することは、不可能の如く見える。總ての古代の歴史家は、外觀上捉へ難く見える所のもの——即ち、國民の生活——をば、叙し、及び、捉へることに向つて、同なじ方法を用いた。彼等は、國民を支配する個人の歴史を叙した、そして、さういふ個人の活動が、それ等の歴史家に取つては、全國民の活動の表現であつたのだ。

何ういふ風に、さういふ個人等が、國民をして自分等の意志に従つて働かしたかとか、何に依つて、さういふ個人自身の意志が制馭されたかとかいふ疑問に對しては、古代の人々は、それは、神の意に依つてあると答へた。で、その神の意なるものは、第一の場合には、國民をして一人の選ばれたる人の意志に従はしめ、第二の場合に於ては、その選ばれたる王の意志

をば、神の定めた目的へと導いて行くのだといふのであつた。

古代の人に取つては、さういふ問題は、神が人事に直接干渉するのだといふ信仰に依つて、解決されたのであつた。

近代の歴史は、理論の上では、さういふ二つの態度をば両方とも斥けて居る。

神にまで人間が従はされ、國民が或る定められた終極へと導かれるといふ古代の人の確信をば斥けた以上は、近代の歴史の研究する所のものは、力の表現では無くして、その形成を爲す所の諸原因であるべき筈であると、誰でも思ふであらう。

而るに近代の歴史はさうは爲無かつた。

理論に於ては、古代の人の意見を斥けながら、近代の歴史は、實行の上では、古代の人の通りにやつて居る。

神の權威を賦與され、神の意に依つて直接導かるゝ人々の代りに、近代の歴史は、異常な、超人間的な性質を賦與された英雄とか、君主から新聞記者に至るまでの、最も種々な特質の唯だの人々とかいふやうな、民衆をば左右する人々を、立て、居る。

古き目的、即ち、古代の歴史家には、ゴール人とか、希臘人とか、羅馬人とかいふやうな人

民の諸運動の目的であつたやうに思はれた神の意志の代りに、近代の歴史は、それ自身の諸目的——即ち、佛蘭西人とか、獨逸人とか、英吉利人とかの安寧、若しくは、その抽象の最高潮、即ち、大抵何時も、この地球の中の小さい北西の隅に住まつて居る諸人民の謂であるところの總ての人間の文明とかいふもの——をば、持ち出して居る。

近代の歴史は、古代の人の信仰を斥けたのみで、その代りとして、別に何も新しい確信を提出し無い、さういふ位置の論理上の結果は、歴史家をして、最早斥けられた帝王神權説とか、古代人の運命説とかいふやうなものを棄て、了まひながら、異つた路に依つて、又もや同様な點、即ち、第一、國民が個人に依つて導かるゝこと、第二、人間全體、及び、それを組み立てて居るところの諸國民が、或る極まつた終極の方へと動きつゝあるといふことの承認へと、立ち戻らざるを得ざらしめた。

もつと近代的な歴史家、即ちギボンからバツクルに至るまでの人々の總ての著作に於て、彼等の、外觀上の相違、彼等の意見の外觀上の斬新に拘らず、上に云つたやうな二つの古い避け難き態度が、彼等の議論の根柢に横はつて居る。

第一に、さういふ歴史家等は、彼等の説では、人間を導くのだといふ個々の人々の行爲を叙

して居る（或る者は、君主とか、軍將とか、大臣とかばかりを、さういふものだと見做し、他のものは、又、君主、雄辯家、科學者、改革者、哲學者、詩人を、その中へ入れて居る）

第二には、人間全體が導かれて行きつゝある終極が、さういふ歴史家には知れて居る。或る者には、この終極が、羅馬國とか、西班牙國とか、佛蘭西國とかの偉くなることであり、他のものに取つては、それは、自由とか平等とかいふやうな、歐羅巴と呼ぶる、世界の小さい隅に於ける或る種類の文明であるのだ。

千七百八十九年には、巴里に沸騰があつた、それは、大きくなり、廣がり、そして、西から東への諸國民の運動に於て、その表現を見出した。幾度かその運動は、東へと爲さるゝ、そして、東から西への逆運動と衝突する。

千八百十二年に、その運動は、その最も前方の極限、莫斯科に達する、で、其所で、著しい均齊を以て、逆運動が直ぐそれに續いて、東から西へと向つて、それと共に、最初の運動と同なじやうに、中央歐羅巴の諸人民を引張つて行く。逆運動が、最初の運動の發起點、巴里に達する——其所で、鎮まる。

二十年のこの時期の間、野の非常の數が耕され無い、家が焼かるゝ、商業がその方向を變

へる、人の何百萬もが、貧乏になつたり、金持になつたり、住所を變へる、それから、愛の則を唱へて居る基督教徒の何百萬もが相互に殺し合ふ。

總て斯ういふ事は、何ういふ事であるのか？ 何から、總て斯ういふ事が、起つて來るのであるのか？ 何ういふ事が、さういふ人民をして、家を焼かせ、彼等の同人類を殺させるやうにしたのであるか？ 何ういふ事が、さういふ事件の原因であるのか？ 何ういふ力が、人間をして、さういふ風に動かざるを得ざらしめたのか？

さういふのが、人間全體が、動搖のその過去の時代の記念物や、傳説に打つかる時に、全く誠實に自ら問ふところの自然に出る正當なる諸疑問である。

さういふ諸疑問に答へる爲めに、人間の常識は、國民及び人民全體の自識を目的とするところの史學へと向くのだ。

若し、歴史が古代の人の意見をば持續して居たのであつたら、それは、神が、彼の人民を賞し若しくは罰する爲めに、ナポレオンに力を與へ、そして、神自身の神聖なる目的を達するやうに、ナポレオンの意志を導いたのだと、云つたであらう。

で、その答が、完全で、明晰なものであつたであらう。人は、ナポレオンの神的意義を信ず

るかも知れ無いし、信じ無いかも知れ無い。それを信する人に取つては、その時代の總ての歴史が、善く解るものであつて、その中には、矛盾的なものは何にも無かつたのであらう。

が、近代の歴史は、さういふ風に答へることは能き無い。科學は、神が人事に直接干渉するといふ古代の人の見解を受け入れ無い、であるから、それは、外の答を與へ無ければなら無い。

近代の歴史は、さういふ諸疑問に答へて、斯う云ふのだ、「お前は、この運動が何ういふ意味であり、何からそれが起り、何ういふ力がこれ等の事件を起したのか、知り度いと思ふのか？では、聽け」

「ルイ十四世は、非常に傲慢な、我儘な男であつた。彼は、これ／＼の妾を持ち、これ／＼の大臣を持ち、そして、彼は拙く佛蘭西を支配した。

ルイの後継者等も亦、弱い人間であつた、そして、彼等も亦、拙く佛蘭西を支配した。それから、彼等は、斯う／＼いふ寵臣を持ち、斯う／＼いふ妾を持つて居た。

その上に、其所には、この時代に書を書いて居た或る人々が居た。

十八世紀の終末頃に、巴里に、人間は皆平等であり、自由であるのだと、云ひ出した大凡そ

二十四人程の人が居た。これが佛蘭西ぢうの人々をして、相互に斬り合ひし、傷け合ふやうにならせた。さういふ人々は、王や、その他の多數の人々を殺した。

その時分、佛蘭西に、天才の人——ナポレオン——が居た。彼は、何所でも、誰でもを征服した、即ち、彼は、甚だ偉い天才であつたが故に、多數の人々を殺したのだ。

で、何うした理由でか、彼は、阿弗利加人を殺しに行つた、で、佛蘭西へ歸つて來ると、彼は誰もを自分に服従させた程、それ程良く阿弗利加人を殺し、そして、それ程敏捷で、伶俐であつた。

で、彼等は、衆皆彼に服従した。

皇帝にされてから、彼は、伊太利だの、埃地利だの、普魯西で、人々を殺しに行つた。

で、其所でも亦、彼は、多數殺した。

露西亞には、その時、皇帝アレクサンドルが居たが、その人は、歐羅巴の秩序を恢復しやうと決心して居た、で、彼は、ナポレオンと戦争を爲た。が、千八百〇七年に、彼は、不意に、ナポレオンと仲好くなつた。が、千八百十一年には、再喧嘩して、そして、再二人は多數の人を殺し始めた。で、ナポレオンは、露西亞へと六十萬の人を伴れて行つた、そして、莫斯科

を征服した。で、それから、不意に、莫斯科から逃げ出した。で、其所で、皇帝アレクサンドルは、スタインや其他の助言に従つて、歐羅巴の平和の破壊者に反抗する防禦に對して、歐羅巴を合同させた。

ナポレオンの同盟者が、乍ち、皆なナポレオンの敵になつた、そして、聯合軍が、ナポレオンが新に募つた軍隊へと進撃した。同盟國がナポレオンを征服した、巴里に入つた、ナポレオンをして帝位を退かざるを得ざらしめた。そして、エルバの島へ彼を流したが、五年前、及びそれから一年後には、彼は、誰からも、法律の範圍外の強盗と見做されたに拘らず、その時は、皇帝としての威嚴は奪はれず、實際、有らゆる尊敬が示されて居たのだ。

その時までは、佛蘭西人や、同盟國の笑ひ物であつたところのルイ十八世が、國を治め始めた。

ナポレオンは、古親兵の前で涙を流して、帝位を退いて、遠流されて了まつた。

其所で、敏捷な政治家や、外交家等（その間に、一際目立つて、他の誰よりも前に、或る特別な椅子に坐ることに成功し、で、そのお蔭で、佛蘭西の境土を廣げたタレエランが居たのだ）が一緒に維也納で談話を爲た、で、さういふ談話のお蔭で、諸國民が、幸福になつたり、不幸になつたりした。

不意に、外交家や、君主等が、唯だ喧嘩し無いばかりの状態になつた、彼等は、再、相互に殺し合ふ爲めに軍隊に命令するばかりのところまで行つて居た、が、その時に、ナポレオンが僅に一大隊を率ゐて、佛蘭西へ入つた、そして、それ迄は彼を悪んで居た佛蘭西人が、直ぐ彼に服従して了まつた。

が、同盟の君主等は、これを怒つた、そして、再、佛蘭西人と戦ひに行つた。

で、天才、ナポレオンが、征服された、そして、不意に、彼が強盗であることを認めて、人は、彼をば、聖ヘレナの島へと連れて行つた。

で、その巖の上で、流人は、信友たちから離れ、彼の懐しい佛蘭西から離れて、そろ／＼と死んで行つた、そして、總て彼の大功業をば、後世へと遺した。

で、それから、歐羅巴では、反動が、直ぐ續いて來つた。そして、總ての君主等が再各自の臣民をば壓制しだした。

これが、嘲弄——即ち、歴史的記述を諷刺したもの——であると思像するのは、全く間違であらう。それどころでは無く、それは、傳記とか、別々の國家の歴史とかの編纂者から、全史

及びその時代の文明の歴史の新しい種類に至るまでの凡そ歴史といふ歴史に依つて與へられる、何の答にもならぬ矛盾した、無茶苦茶な答をば和げたものであるのだ。

これ等の答に、奇異で滑稽なところがあるのは、近代の歴史が、誰もそれに尋きもし無い問に答へるところの響者と同一であるといふ事實に歸するのだ。

歴史の目的が、人間及び國民の運動の叙述であるとするれば、答へられ無ければなら無い疑問で、それを答へ無ければ、總て外のものが、何時までも解ら無いといふ最初の疑問は、次のやうなものである――

『何ういふ力が國民を動かすのか？』

この間に應ずる爲めに、近代の歴史は、ナポレオンが非常な大天才であつたこと、か、ルイ十四世が非常に傲慢であつたこと、か、或る著述家等が或る書を書いたとかいふ事を非常に念入りに話す。

總てこれは全くその通りである、で、人間全體がそれを承認しようとして居る、が、それは人間全體が尋くところの間では無い。

若し吾々が、ナポレオンや、ルイや、著述家等を使つて、人民を導き、自分自身の上に基礎

を持つて居る何時も同様な神祕の力の存在を認めるとすれば、上に云つたやうなさういふ總ての事は、至極面白い事であるだらう、が、吾々は、さういふ力の存在を承認しないのだ、だから、吾々は、ナポレオンや、ルイや、大著述家等のことを話す前に、さういふ人々と國民の運動との間に存在するところの關係を示さなければなら無い。

若し他の力が神祕の力の代りに置かるゝとすれば、さうすれば何ういふものでその力が成り立つて居るかといふ事が、説明せられ無ければなら無い、何となれば、歴史の全興味は横はつて居るのは、全くその力の裡に於てあるからであるのだ。

歴史は、この力の存在は、最早極まり切つたことであつて、この力は誰にも知れて居るといふことを假定して居るやうである。が、知れたものとして、この新らしき力を承認しようとする有らゆる願望に拘らず、極く多くの歴史的著作を讀み通す人は、誰でも、歴史家等自身に依つて、實に種々に理解されて居るこの新らしき力が、誰にも全く知られて居るか何うかといふことを、疑はざるを得無いのだ。

(二)

何が、國民を動かすところの力であるのか？

傳記的歴史を書く人々及び個々の國民の事を書く歴史家等は、この力をば、英雄や、君王等のうちに在るところの力として、理解する。彼等の記述に依る時は、種々の事件は、ナポレオンとか、アレクサンドルとか、若しくは、概言すれば、歴史的傳記の主題を爲すところのさういふ人々の意志に、全く歸するものだといふのだ。

諸事件を起らせるところの力に關する問題に對して、この種類の歴史家等に依つて與へらるる答は、申し分の無いものである、が、それは一つの事件に對しては、唯だ一人の歴史家があるのみであるといふ間ばかりのことである。が、異つた見解や、異つた國の歴史家等が、一つの同なじ事件を叙し初めるや否や、さういふ歴史家等に依つて與へらるる答は、直ぐその價値を悉く失つて了まう。何となれば、この國民を動かす力といふのが、彼等に依つては、種々に異つた風でのみならず、尙又、全く反對な風に理解されて居るからであるのだ。

或る歴史家は、事件がナポレオンの力に依つて起つたのだと確言する、他の歴史家は、アレクサンドルの力に依つて起されたのだと主張する、第三の歴史家は、その事件をば、或る第三の人の勢力に歸するのだ。

尙その上に、この種類の歴史家等は、同なじ一人の人の勢力の基礎になつて居るところの力を説明する場合に於てさへ、相互に反對した説を述べて居る。

ボナパルト黨であるところのティエールは、ナポレオンの権力は、彼の徳や、彼の天才の上に據つて居るのだと云ふ、共和黨であるところのランフレエーは、ナポレオンの権力は、人民に對する彼の譎詐、欺瞞の上に據つて居ると主張する。

で、この種類の歴史家等は、相互の位置を破し合ひながら、それと同時に、事件を起させるところの力の觀念をば破壊する、そして、歴史の根本的問題に對する答を一つも與へ無い。

一度に總ての國民を取扱は無ければならぬ萬國史の著者等は、事件を起させるところの力に關する個々の國の歴史家の見解の間違つて居ることを、認めて居るやうである。彼等は、この力をば、英雄や、君王等に附いて居るものとは認めて居無い、けれども、それをば、種々な方向に働くとおほくの多くの力の結果だと見做して居る。

戦争とか、人民の征服とかを記述する場合には、萬國史の著者は、一人の人の権力のうちに於てでは無く、その事件と關聯して居る多くの人々の各々に對する相互の作働のうちに於て、その事件の原因を索める。

この見解に従つて、數多の力の産物として、考へられた歴史的人物の権力といふのは、誰でも想像するであらう如く、獨立的事件を起させるところのそれ自身だけで十分な力とは、認められる譯に行か無い。

それであるのに、萬國史の著者等は、先づ普通の場合に於ては、権力の觀念をば、再、事件を起させ、そして、その事件に對して、原因の關係に於て立つて居るところのそれ自身だけで十分な力として、用ひて居る。

彼等の主張に従へば、歴史的人物は、或る時は、その人の時代の産物であり、その人の権力は様々な力の産物であるのみであり、又、或る時は、その人の権力は、事件を起させるところの力であるのだ。

例へば、ゲルヴィヌスとか、シュロツセルとか、その他の人々は、一つの場所では、ナポレオンが、佛蘭西革命、千七百八十九年の諸理想、その他の産物であるのだと説明し、それから、他の場所では、彼等の氣に入ら無い千七百八十九年の戦役、及び、その他の事件は、單に、ナポレオンの悪い方へ向けられた意志の仕事であり、それから、千七百八十九年の諸理想そのものがナポレオンの專斷的な施政の爲めに、その發展を止められたのだと、明瞭に云つて居る。

その説に従へば、佛蘭西革命の諸理想、及び、時代の一般的傾向が、ナポレオンの権力を造つたのだ。が、それと同時に、ナポレオンの権力が、佛蘭西革命の諸理想や、時代の一般的傾向を壓服したといふことになるのだ。

この奇異な矛盾は、偶然なものでは無い。それは、到る所で吾々に打つかる、で、實際、萬國史の著作全體が、さういふ矛盾の連続で成り立つて居る。この矛盾は、さういふ歴史家等が、解柝の路をば二三歩進んで置きながら、中途でバツタリ止まつて了まつたといふ事實から起つて居る。

成分的な、若しくは、結果的な力を成して居るところの合成的な諸力を見出さうとするには、合成的な諸部分の總計が、結果的な諸部分と等しいといふことが必要である。

この條件は、決して歴史的著作家には守られて居無い。であるから、結果的な力を説明しようとするには、彼等は、それ等の不十分な、補助的な諸力に加へて、又結果的作働にも影響を及ぼすところの或る説明せられ無い力をば、も一つ何うしても容認し無ければなら無くなるのだ。

千七百八十三年の戦役とか、ブルボン家の復興とかを叙する歴史家は、さういふ諸事件は、ア

レクサンドルの意志の爲めに起されたのだと、無難作に云つて居る。

が、哲學的歴史家のゲルヴィヌスは、さういふ諸事件の専門的歴史家の見解に反對して千八百十三年の戦役や、ブルボン家の復興は、アレクサンドルのみならず、尙又、スタイン、メッテルニッヒ、マダム・ド・スタエル、タエレラン、フィヒテ、シャトオブリアン、その他の人々の仕事に依つて起つたものであるといふことを、證明しようとして居る。

その歴史家は、明白に、アレクサンドルの権力をば、タエレラン、シャトオブリアン、その他といふやうな合成的諸力にまで解析して居る、が、それ等の合成的諸力の總計即ち、シャトオブリアンや、タエレランや、その他の人々が相互に及ぼし合ふ影響の結果は、結果的な効果、即ち佛蘭西人の何百萬もが、ブルボン家に服従したといふ現象には、明白に等しく無い。

これ／＼の言語が、シャトオブリアンや、マダム・ド・スタエルや、その他の人々に依つて相互に云はれた、といふことは、彼等の相互間の關係に影響を及ぼすに過が無いものであつて、何百萬もの人々の服従した事の原因とは爲ることが能き無い。であるから、何うして何百萬もの人々の服従が、シャトオブリアン等の相互間の關係から、次いで起つて來たかといふこと、即ち、何うして與へられたる量Aに等しき合成的な諸力からしてAの千倍に等しき結果が次いで

起つて來たかといふことを、説明しようとするには、歴史家は、彼が一度び棄てたところの権力のその力をば、結果的の力のうちに於て受け入れて、その力の存在を容認し無ければ、何うしてもなら無くなる、即ち、彼はさういふ諸成分の結果の上に作働するところの説明せられざる力を容認し無ければなら無くなるのだ。

で、哲學的歴史家等の爲るのは、全くそれであるのだ。であるから、彼等は、歴史的傳記の著者等と撞着するのみならず、尙又、彼等自身相互に撞着して居るのだ。

雨の降る原因をば、寸毫も明白には知ら無いところの田舎の人々は、自分等が雨が欲しいとか、好い天氣が欲しいとかいふ場合々々に従つて、風が雨を吹き去つたとか、風が雨を喚ぶ爲めに吹き上げて居るとか、云ふ。

それと同なじやうに、哲學的歴史家等は、時に依つては、自分等がさうあり度いと思ふ場合とか、自分等の理論に都合の好い場合とかには、権力が諸事件の結果であるのだといひ、それから、時に依つては、自分等が何か外のことを證明し度いと思ふ場合には、権力が諸事件を起させるのだと云ふのだ。

歴史家等の第三の種類、即ち、所謂文明史の著者等は、萬國史の著者等が定めた方向を辿

つて、時々、著述家等や、貴婦人等をば、諸事件を起らせる所の諸力として承認するのであるが、然し、その力をば、全く異つた風に理解して居る。彼等は、その力をば、所謂文明のうちに於て、智力的活動のうちに於て、認めて居る。

文明史の著者等は、彼等の先行者——即ち、萬國史の著者等——とは全く一致して居る、何となれば、若し、歴史上の諸事件が、或る人々が相互に或る事を云つたといふことで説明せられ得るものであるとすれば、さういふ諸事件が、或る人々が或る書を書いたといふ事で、説明し得られ無い譯は決して無いからである。

有らゆる生きた現象に伴ふところの表徴の總ての無数の中からして、さういふ歴史家等は智力的活動の徴候を選び、そして、この徴候が原因であるのだと主張する。

が、諸事件の原因が、智力的活動の中にあるといふことを證明しようとする彼等の有らゆる努力に拘らず、智力的活動と國民の運動との間に、何か共通なものがあるのだと云ふことに人が同意し得るのは、餘程長い間に涉つてのことであるのみだ。で、智力的活動が人間の諸行為を導いて行つた、といふことを容認するのは全く不可能なことである、何となれば、人間の平等の原理から結果を來した佛蘭西革命の慘酷なる殺人や、愛の福音から起つた最も悪い諸戦争

や、諸虐殺といふやうなさういふ現象は、この假定説をば確定するものではないからである。

が、さういふ諸歴史に充ちて居るところの巧妙に織られた諸議論の總體が、間違つて居無いものだと認め、『理想』と呼ぶる、或る不定の力に依つて國民が支配されるものだといふことを容認するに於てからが——歴史の根本的問題は、依然答へられずに残つて居るのだ。何となれば、哲學的歴史家に依つて持出されて來た王等の権力や、顧問等や、その他の人々の勢力へ持つて行つて、今は、も一つの新たな力——即ち、『理想』——が加はつたのであつて、民衆とその新たな力との關係が又證明を要することになつたからである。

ナポレオンが権力を持つて居た、で、それが爲めに一つの出來事が起つたのだといふことは、誰でも理解し得ることである。他の諸力：一緒になつたナポレオンが、一事件の原因であつたといふことも、少し骨折れば誰でも呑み込み得ることである。が、何ういふ風で、民約篇といふ一つの書が、相互に切り刻み合ふやうに佛蘭西人をさせたのであるかといふことに至つては、この新たな力と、その事件との原因的關係の説明をば得無い限りは、理解し得られ無いことである。

同時代に生活して居る總ての人民の間には、或る關係が存在して居ることは疑ひが無いで、

丁度誰でもが人間の諸運動と、商業、工業、園藝、その他の何でもとの間に或る關係を見出し得ると同じやうに、人間の智力的活動と、彼等の歴史的運動との間に或る種類の關係を見出すことは、能き得べきことである。

が、何故、智力的活動が、一つの智力的運動全體の原因とか、表現として、文明史の著者等に認められるか、と、いふことは、到底理解し難きことである。歴史家等は、次のやうな考量に依つて、さういふ結論へと導かれ得るのみである――

(一) 歴史は、學者が書くものである、で、自分等の職業を行つて居ることが、人間全體の運動の基礎であると信ずることが、彼等に取つて當然であり、且、心持が好いといふ事。(尤もそれと同じやうに信ずることは、商人にも、農業者にも、軍人にも當然であり、且、心持が好いのであるが、商人や、軍人は歴史を書か無ければかりで、さういふ信仰は、それ等の人々の方では、表現され無いといふに過ぎ無いのだ)。

(二) 精神的活動、學問、文明、開化、思想など、いふものは、皆曖昧な、不定な觀念であつて、その被蓋の下に、彼等は稍不定な意義を持つて居るので、それが爲めに、何様な理論の下へも容易に持つて行くことの能きるやうな語句をば自在に用ひ得る事。

この種類の歴史も、誰かに向つては、若しくは、何事かに向つては、役に立つかも知れ無いのだから、それが内的に威嚴のあるものであるか何うかといふことは、何も云は無いにしたところで、總ての一般歴史が、だん／＼近づかうとして居るところの文明史に就いて注意すべき點は、彼等は、諸事件の原因として、種々な宗教的、哲學的及び政治的の諸原理の眞面目な、詳しい解析を與へるのではあるが、彼等が、例へば、千八百十二年の戦役の如き現實的な歴史的事件をば叙さなければならぬやうになる度毎、知らず／＼のうちに、さういふ事件をば、權力の行使の効果として叙し、その戦役が、ナポレオンの意志が爲た事であるのだと、率直に云ふと云ふ事實であるのだ。

これをいふので、文明史の著者等は、知らず／＼のうちに、自分等自身撞着し、若しくは、彼等が勝手に造り出したところの新たな力は、歴史的諸事件の表現で無いこと、歴史を説明する唯一の手段は、彼等の外見上明白に斥けたところのその權力に據るより外は無いいふことを證明して居る。

(三)

蒸氣機関が動く。

何うして、それが動くのか？、といふ問が問はれる。

農夫は、それを動かすのは悪魔なのだ、答へる。

今一人は、車輪が廻るから、蒸氣機関が動くのだ、と云ふ。

第三の者は、その運動の原因は、風の爲めにその蒸氣機関から、吹き飛ばされる煙のうちに
見出されるのだ、と主張する。

農夫の主張は、論破し難い。彼を論破するには、誰か、彼に向つて、世の中には悪魔など
といふものは決して無いといふことを、證明するか、又は、誰か今一人が、機関車を動かすの
は悪魔では無くつて、獨逸人なのだ、説明するかし無ければならぬ。

さうすれば、自分等の反對した見解からして、彼等は、両方とも間違つて居ることを、見る
のだ。

が、原因が、車輪の動きにあるのだ、と云ふ人は、自分で自分を論破するのだ。何となれば
一たび解析の路へ入つた以上は、その路に附いて益前方へと進まなければならず、車輪の動く
原因を説明し無ければならぬからなのだ。で、彼は、蒸氣機関の最後の原因が、汽罐の内に

壓搾されて居る蒸氣のうちにあることを發見するまでは、原因に對する自分の穿鑿をば止め無
いで居無ければならぬのだ。

蒸氣機関の運動をば、それから吹き返される煙の爲めに起るのだ、と説明する人は何うかと
いふと、その人は、單に、車輪説明が不十分だと認めたので、自分の眼に付いた第一の伴行的
徴候を捉まへて、それをば原因だとして持ち出したに過ぎ無いのだ。

機関車の運動を説明し得るところの唯だ一つの觀念は、眼に見える運動に等しい力があるの
だといふ觀念であるのだ。

國民の運動が、依つて以つて、説明し得られる唯一の觀念は、國民の一運動全體に等しい力
があるといふ觀念である。

が、それでも、この觀念の下には、非常に種々な種類の、そして、皆、眼に見えて居る運
動とは等しく無い諸力が、歴史家等の爲めに、概括されて居る。或る者は、その觀念の裡に、
農夫が蒸氣機関の裡に悪魔を見るやうに、直接英雄に附屬する力を認めて居る。他の等は、
又、車輪の運動といふやうな、五六の他の力から結果するところの一個の力を認め、第三の者
は、煙といふやうな、智力的勢力を認めて居る。

歴史が、個人——それが、シイザアでも、アレクサンドルでも、ルウテルでも、ヴォルテールでも——の事に就いて書かれて、それが、一つの除外も無く、總ての者、即ち、一事件に與かつて居る總ての人民の歴史で無い間は、何時まで経つても、一つの目的へと人間の活動に向け、て行くやうに人を促進するところの力があるといふ觀念無しに、人間全體の運動をば叙するこの能き得る氣遣は無い。

で、この種類の觀念で、歴史家に善く知られて居る唯一の觀念は、「權力」である。

この「權力」といふ觀念は、現今唱へられて居る歴史なるもの、材料が依つて以つて扱はれる柄手であるのだ。で、バックルのやうに、歴史的材料を扱ふ他の手段を何も發見せずしてこの柄手を破すところの歴史家等は、歴史的材料をば扱ふ最後の機會をば自ら棄てるといふに過ぎ無いのだ。

歴史上の現象を説明するには「權力」の行使の觀念が必要であるといふことは、「權力」の觀念をば公に斥けて置きながら、一步毎に已を得ずその歴史に立ち戻るといふやうな、萬國史及び文明史の著者等自身に依つて、最も明瞭に證明されて居るのだ。

史學は、人間全體の諸問題に對する關係に於ては、これ迄は、流通して居る錢のやうなもの

——紙幣と貨幣とのやうなもの——であつた。歴史的傳記や各個の國民の歴史は、紙幣のやうなものなのだ。彼等は、その眞價に就て何の疑問も起ら無い限りは、誰にも何の害をもし無いどころか、有用なものとしてさへ、渡され、受け取られて居ることが能きなのだ。

誰でも、何うして英雄の意志が事件をば起らせるのか、といふ疑問を忘れてしまひさへすれば宜いのだ。さうすれば、ティエールの諸歴史が、面白くつて、有益になり、そして、尙その上に、或る詩美を缺いて居無いのだ。

が、紙幣を造ることは容易なので、餘り多くが流通させられたが爲めとか、若くは、黄金を以てそれに代へ度いと思ふ爲めとかで、紙幣の眞價に就ての疑念が起ると丁度同なじやうに、この種類の歴史の眞價に就ての疑念が、さういふ歴史が餘り多く現はれ過ぎる爲めとか、若くは、誰か、率直な心から、「何ういふ權力でナポレオンが其事を爲たのか？」と、尋く——即ち、流通紙幣をば、眞正の觀念といふ純金に變へやうと思ふ——爲めとかで、起るのだ。

一般史とか、文明史とかの著者等は、紙幣の不便を認めながら、紙幣の代りに、黄金程の密度の無い金屬のチン——いふ貨幣をば造らうと決した人々と同なじなのだ。で、さういふ貨幣は、實際金屬の音はするだらう、が、唯だそれだけであるのだ。

紙幣は、無智の者を欺まし得るだらうが、貴金屬で無い貨幣は誰をも欺まし得無い。
 丁度、黄金が、交換に向つてのみならず、尙又、用に向つて、有價値である時にのみ、黄金であるのと同じやうに、全くその通りに、萬國史の著者等も、彼等が「權力とは何ぞや？」といふ根本問題に答へ得る時に至つて、始めて、自分等の眞價のあることを自ら證明し得るのだ。

さういふ歴史家等は、この疑問に對して相互に反對した答を與へるのだが、文明史の著者等の方はといふと、彼等は、全く異つた事をば答へて、その疑問をば全く逃げて了まう。
 で、黄金を眞似た擬貨が、黄金の代りにそれを受け取ることに同意する人々とか、黄金の眞の性質を知ら無い人々とかの社會に於てのみ用られるやうに、全くそれと同じに、人間全體の根本的諸疑問に答へ無い歴史家等も、諸大學での通貨としてとか、讀者の——所謂眞面目な讀書を好むとかいふやうな——さういふ群衆に對してのみ、彼等自身の或る目的の爲めに役立つのだ。

(四)

歴史が、人民の意志が一個の選ばれたる器へと神の爲めに服従せしめられるし、その選ばれたる器の意志は又神へと服従せしめられるのだといふ古代の人々の見解をば棄て、了まつて以來、歴史は、矛盾に出會ふこと無しには、一步をも進むことが能き無くなつた。歴史は、人事に神が直接干與するといふ往時の信仰へと歸つて行くか、「權力」と呼ばるゝ、歴史的諸事件をば起らせるところの、その力の確定した説明を見出すか、孰か一つの途を擇ば無ければなら無いのだ。

往時の行り方に歸る方は、問題になら無い、古い信仰は散々に破はされて了まつた、だから、「權力」の意味に就て、何か一個説明が見出され無ければなら無い。

ナポレオンは、軍を募つて、戦に出て行くことを命令した。この觀念は、吾々に取つては、極く知れ切つたものであり、吾々は、この觀念に全く慣れ切つて居るので、ナポレオンが或る言語を出すといふと、何故六十萬の人間が戦ひに行つたかといふ疑問は、吾々に取つては、無意味に見える位であるのだ。彼は、權力を持つて居た、で、彼が與へた諸命令が實行されたのだ。

この答は、若し、吾々が、權力が神から彼に與へられたことを信ずれば、全く申し分の無い

ものである。が、吾々がその答を受け入れるや否や、一人の人が他の者等を支配するといふこの権力が、何ういふものであるかを、定義することが、切要である。

この権力は、強い者が弱い者に對して持つ體的優越、即ち、體的の力——力神の力のやうな——を用ひること、若しくは、それを用ひるといふ脅迫に基いた優越から來るその直接の力ではあり得無い。又は、その権力は、五六の歴史家等が、彼等の心の單純なることに於て、主なる歴史的人物は英雄——即ち、天才と呼ばれる、靈と心の特別な力を賦與されて居る人々——であるのだと主張して、想像するが如く、精神的の優越に基いて居るものではあり得無い。

この権力は、精神的の力の優越に基いて居るものではあり得無い。何となれば、その人の精神上の諸資質に就いては、非常に異つた、種々の説があるところのナポレオンのやうな歴史的英雄に就いては何にも云はぬことにしても、歴史は、何百萬もの人々を支配したルイ十六世とか、メッテルニヒとかいふやうな人々も別に精神的の力の著しい諸特質を持つて居たのでは無くして、反つて、その反對で、彼等は、大抵、彼等が支配した何百萬もの人々のうちの誰よりも精神上弱いものであつたといふことを、吾々に證明して居る。

権力の根源が、それを持つて居る人の體的特質にも、精神的特質にも、基いて居無いものと

すれば、この権力の根源は、その人の外——即ち、その権力を持つて居る人が、民衆に對して立つて居るそれ等の關係の裡——に於て、見出され無ければなら無い。

権力といふものが、法學、即ち、権力といふ歴史上の表徴の錢をば純金に交換しようとするところの歴史のその正金銀行に依つて、解釋されて居るところは、全くこの通りである。

権力とは、民衆の結合意志が、民衆の選んだる治者へと、彼等の云ひ表はされたる若しくは黙したる承諾に依つて、移されたものを、云ふのである。

國家と権力が何うして組み立てらるべきものであるかといふ議論から成り立つて居る法學の領域内では、若し、さういふ組立が能き得べきものとすれば、上に云つた権力の定義は極めて明瞭な事である、が、歴史に適用することになると、この権力の定義は説明を要する。

法學は、古代の人が火を見做したやうに、絶對に獨立して存在して居る物だと、國家と権力とをば見做して居る。が、歴史に取つては、丁度今日の物理學に取つて火が、原素で無くして、現象であると同なじやうに、國家と権力は單に現象に過ぎ無いのだ。

歴史と法學との見解のこの根本的の相違からして、下のやうなことが起つて來る、即ち、法學は、科學的著述家の説に於ては、権力が何う組織されるべきものとなつて居るか、時の諸條件

を離れて不動に存在して居る権力なるものが何ういふものであるかといふことを、詳細に論じ得る、が、時に従つて、明瞭な變形を爲すところの権力の意義に關しての歴史的諸疑問に對しては、法學は何の答をも與へ得無いのだ。

権力が、治者へと移された民衆の結合意志であるとするれば、プガアチョフが民衆の意志の代表者であるのか？。彼がさうで無いとすれば、それならば、何うしてナポレオン一世がさういふ代表者なのか？。何故、ナポレオン三世は、彼がブクロオニユで捉へられた時には罪人であつたが、その後では、彼に依つて捉へられた人々の方が罪人であつたといふやうな事があるのか？。

宮中の革命——それでは、二三人の人々のみが與かるやうな場合——でも、民衆の意志が新しい人へと移されるのか？。

國際的關係の場合にも、民衆の意志は、彼等を征服した人へと移されるのであるか？。

千八百〇八年に於て、ライン同盟の意志がナポレオンへと移されたのか？。

千九百〇九年の、佛蘭西と同盟した吾々の軍が、埃太利と戦つて居た時に、露西亞の民衆の意志がナポレオンへと移されたのか？。

斯ういふ諸疑問は、三つの方法で答へられ得る——

(一) 民衆の意志は、彼等が選んだところのその一人の治者、若しくは、數人の治者へと、何時も無條件で委任されるといふ事、及び、それ故に新らしき権力の有らゆる興起、一たび委任された権力に反對する有らゆる争闘は、眞の権力に對する侵害であるといふ事を、主張することに依つて。

又は、(二) 民衆の意志は、或る極まつた諸條件の下に治者等へ委託されるといふ事を主張することに依つて、それから、権力に對する有らゆる制限も、権力に對する争闘も、それから、権力の廢止でさへも、権力が治者に委任された諸條件をば、治者等が守ら無い爲めに起るものだといふ事を示すことに依つて。

又は、(三) 民衆の意志は、條件的に治者等へ委任されるのであるが、その諸條件は、不確定であつて、五六の諸強權の興起及びその葛藤、衰退は、民衆の意志が人の一團から他の一團へと移されるところの不確な諸條件をば、治者等が完全に守るか、守ら無いかの爲めにのみ起るものであると主張することに依つて。

斯ういふ三つの方法で、歴史家等は、治者等に對する民衆の關係を説明して居る。

或る歴史家等——吾々が上に云つたやうな最も明白に傳記の著者であり、追憶録の著者であるところの人々——は、彼等の心の單純なる事に於て、權力の意味に就いての問題を理解し兼ねて、民衆の結合意志は無條件に歴史の統率者へと委任されるのだと信じて居るやうに見える。それ故に、さういふ強權の孰かを叙する場合には、さういふ歴史家等は、その強權は、唯一の絶對の神聖のものであつて、その神聖の強權に反對するところの他の力は、孰も強權では無くして、強權の侵害、不法の侵害であるのだと、見做して居る。

彼等の理論が、歴史の原始的な、平和な時代とは善く適合する。けれども、幾つもの異つた強權が同時に起つて、相互に争ふといふやうな、國民の生活に於ける複雑な動亂の時代へそれを適用することになると、王黨の歴史家の方では、國民議會や、執政政治や、ポナバルトは、唯だ眞の強權の侵害であつたのだと、主張するといふと、共和黨や、ポナバルトの方では、一は、共和國が、他は、帝國が、眞の強權であつて、その餘のものは悉く強權の侵害であつたのだと、主張するといふやうな不便が起つて來るのだ。

是等の歴史家等の與へて居る諸説明は、相互に撞着し合つて居て、非常に弱い小兒等の外、誰をも満足させ得無い。

歴史に對するこの見解の當にならぬことを認めて、他の種類の歴史家等は、強權は、治者等への民衆の結合意志の條件的委任に基くものであつて、歴史の統率者等は、人民の意志が默認に依つて彼等に命任したところの順序書をば實行することの條件に於てのみ權力を有するのだと、主張する。が、この順序書が何から成り立つて居るかといふことは、それ等の歴史家は吾々に話さ無い、又は、彼等が話すにしても、彼等は始終相互に撞着し合つて居る。

一國民の運動の終極は、何ういふものから成り立つて居るかといふ各自の見解に従つて、各々の歴史家がこの順序書をば、例へば佛蘭西とか、若しくは、或る他の國の自由民の偉大とか、富とか、自由とか、開化とかいふものだと、解して居る。が、さういふ順序書の性質に關しての歴史家等の間の撞着をば措き、一つの全般的な順序書が、總ての國民に向つて存在するものだと思像して見たところで、歴史上の諸事實は、殆ど何時でもこの原理とは矛盾するのだ。

權力が治者等に委任される諸條件が、人民の富とか、自由とか、開化とかの裡に見出さるゝものであるとすれば、ルイ十四世とか、イヴァン四世とかいふやうな王が平和に彼等の治世を終つたのに、ルイ十六世とか、チャーレス一世とかいふやうな王の方は、人民の爲めに殺されて了まつたといふやうな事が、何うしてあるのか？

この疑問に對しては、さういふ歴史家等は、順序書に反したルイ十四世の諸行為の効果が、ルイ十六世の上に反動したのだと、答へる。

が、何故、ルイ十四世や、十五世に反動し無かつたのか？。何故、丁度ルイ十六世に反動したのか？。それから、さういふ反動にまでは何様な局限があるのか？。

これ等の諸疑問に對しては、何の答も無いし、又、それはあり得るものでも無いのだ。又、この見解は、國民の結合意志が、何世紀の間その治者等やその後継者等に委任されて居て、それから不意に、五十年位の時期の内に、國民議會へ、執政政府へ、ナポレオンへ、アレクサンドルへ、ルイ十八世へと移附され、それから再、ナポレオンへ、チャールス十世へ、ルイ・フィリップへ、共和政府へ、それから、ナポレオン三世へと移附された理由をば、説明し無いのだ。

一人の人から他の人への國民の意志の急激なる移附をば、殊に、それが國際關係とか、戦争とか、同盟とかの爲めに、複雑にされて居る場合などに於て、説明することになるといふと、それ等の歴史家等は、さういふ諸現象の一部は、國民の意志の常平的移附では無くして、外交家とか、君主とか、黨派の主領とかの、敏捷な者とか、失敗する者とか、その手腕とか、その

弱點とか次第で種々に變るところの偶然の事件であることを、何うしても、容認せざるを得無くなるのだ。

であるから、歴史上の諸現象の大部分——内亂や、革命や、戦争——は、これ等の歴史家等からは、國民の自由意志の委任に依つて起さるゝものでは無くして、一人若くは幾人かの人々の悪い方へ向けられた意志、即ち、再、強權の侵害に依つて起されるものだと、見做されて居る。

で、それで、この種類の歴史家からも亦、歴史的諸事件は、彼等の原理に取つては、除外例だと、解されて居るのだ。

これ等の歴史家等は、數種の植物が、二個の子葉、即ち、種葉に分れて、種子から成長するのを見て、生えるところのものは何も彼も二個の子葉に分れて成長するのであつて、椰子の樹や、菌茸や、それから、それが十分に成長して、八方へ枝を廣げ、そして、その二個の種葉には、少しも似無くなつて了まつた時には、大綱でさへも、成長の眞の法則の彼等の原理に對しては、除外例であるのだと主張する植物學者と同等である。

第三の種類の歴史家等は、民衆の意志が、條件的に歴史的統率者等に委任されるといふ事を容

認する、が、彼等は、さういふ諸條件は、吾々には知れて居無いのだと云ふ。彼等は、歴史的統率者等は、唯だ、彼等が、彼等に委任された民衆の意志をば實行して居る故のみで、權力を持つのだと主張するのだ。

が、その場合に於て、國民を動かすところの力が、その歴史的統率者の裡に無くして、反つて、人民の裡に在るとすれば、さういふ歴史的統率者の意義は何所にあるのか？。

歴史的統率者等は、それ等の歴史家等が吾々に語るところでは、民衆の意志の自己表現であり、歴史的統率者等の活動は、民衆の活動の典型の働きを爲すものだといふのだ。

が、その場合に於ては、歴史的統率者等の活動は、總て何れも此れも、民衆の意志の表現として役立つのか、それとも、唯だその或る一面のみがさういふ風に役立つものであるのか？、といふ疑問が起つて来る。

若し、歴史的統率者等の生活的活動の一切が、或る人々が實際信するやうに、民衆の意志の表現として役立つものとすれば、さうすれば、宮中の醜聞の一切を伴つたナポレオンとか、カザリンとかいふやうな人々の傳記が、さういふ人々の人民の生活の表現として、役立つのだといふことになる、然し、それは明白に不合理千萬なことである。

若し、他の哲學的だと想像されて居る歴史家等の信するやうに、歴史的統率者の活動の唯だ一面のみが、國民の生活の表現として役立つものだとなれば、さうすれば、歴史的統率者の活動の何ういふ方面が國民の生活を表現するのかを定義する爲めに、人は先づ國民の生活なるものが何から成り立つて居るかを、知らなければなら無い。

この困難に打つかるといふと、この種類の歴史家等は、事件の能きるだけ大きな數をその下に含ませることの能きるやうな最も曖昧な、觸知し難い、そして、一般的な抽象物をば發明する。そして、この抽象物の裡に人間全體の運動の目的が見出し得られるのだと公言する。殆ど總ての歴史家等に受け入れられて居る最も普通の抽象物は、自由、平等、學問、進歩、文明、開化である。

大凡そさういふやうな抽象物をば、人類の諸運動の終極として提出して置いて、歴史家等は、各自の後に最も多くの數の記念物を遺して行つた人々——王、大臣、將帥、著述家、改革者、法王、及び、新聞記者——をば、それ等の人々が、さういふ歴史家等の説から見て、その抽象物をば増進したり、妨止したりすることに於て持つた効果の見地からして、研究するのだ。

が、人類の終極が實際自由とか、平等とか、學問とか、文明とかいふやうなものであるとい

ふ事は、何所でも説明されては居ないのであるし、又、治者等や、人類の統率者等に對して民衆が關係を有して居るといふのは、民衆の結合意志が、何時でも、吾々の注意を引き付けるところの人物等のみ附與されて居るといふ獨斷的假定に基いて居るのであるから——事實は何處までも、場所から場所へと動き、家を焼き、土地を耕すことを棄て、それから、相互に屠殺し合ふところの何百萬もの人々の活動は、家を焼きもせず、決して土地を耕しもせず、自分等の同人類を殺しもし無い何十人かの人々の活動の叙述の裡に表現を見出すことは、決して無いといふことになつて行くのだ。

歴史は、一步毎にこれを證明する、前世紀の終末頃に起つた西方の諸國民の沸騰や、それ等の國民の東方への突進は、ルイ十四世や、ルイ十五世や、ルイ十六世や、若しくは、彼等の寵姫や、大臣の活動とか、ナポレオンや、ルウソオや、デイドロオや、ボオマルセエーや、その他の人々の生活に依つて説明し得られるのか？

東方への、カザアンや、西伯利亞への露西亞人民の運動は、イヴァン四世の病的な生活の詳説や、クルプスキイとの彼の消息の裡に表現されて居るものなのか？

十字軍の時代に於ける人民の運動は、ゴッドフリーとか、ルイとかいふやうな人々や、さう

いふ人々の婦人等の生活や、活動に依つて説明し得られるのか？

西方から東方への諸國民のその運動——隠者彼得に隨いて行く放浪者の群衆のやうなもの——が、目的も無く、統率者も無く、起つたのだといふことは、今日までも、吾々の何うしても呑み込み得無いことなのだ。それから、又、歴史的統率者等に依つて、さういふ諸遠征の合理なる、そして、神聖な目的——即ち、エルサレムの救出——が、明白に極められた時に、その運動が止んで了まつたといふことに至つては、尙一層了解し難いことであるのだ。

法王や、王や、騎士等が「聖地」をば釋放するやうにと人民を勵ました。が、人民は、その前に彼等を促して、運動を起させたところのその何だか分らない原因が、最早存在して居無かつたので、動か無かつた。

ゴッドフリーのやうな人々や、戀愛詩人等の歴史は、國民の生活の表徴と見做すことは、明白に能き無い。で、ゴッドフリーのやうな人々や、戀愛詩人等の歴史の方は何所までも、さういふ騎士等や、さういふ詩人等の歴史であるのみであつて、諸國民の生活や、彼等の衝動の歴史の方は、少しも分らないものとなつて残つて居るのだ。

所で、著述家等や、改革者等の生活の歴史は、更に尙一層、國民の生活の説明にならぬもの

であるのだ。

開化史は、人民の生活の促進的動機として、著述家、若しくは、革命者の生活とか、思想とかの諸境遇をば、吾々に向つて提出する。吾々は、ルウテルが短氣であつて、或る言語を云つたといふことを教へられる、吾々は、ルウソオが猜疑深い人であつて、或る書を書いたといふことを教へられる。けれども、吾々は、何が、宗教改革の後で、國民をして相互に切り刻むやうにさせたのかとか、何故、人々が佛國革命の間に、相互に斷頭臺を以て殺し合つたのかといふのは教へられ無いのだ。

若し、吾々が、最も多くの近代的歴史家が爲るやうに、歴史の斯ういふ幾つもの種類をば一緒に合同させるとすれば、さうすれば、吾々は、王や、著述家等の歴史をば得るのであるが、然し、國民の生活の歴史は得られ無い。

(五)

國民の生活は、二三の人々の生活の裡には含まれて居無い、何となれば、それ等の二三の人々と國民との間の結合的關係が、未だ見出されて居無いからである。この結合的關係は、歴史的

統率者への國民の結合的意志が委任されて居るといふことに基いて居るのだといふ理論は、唯だ假定の説に過ぎ無いで、歴史の實證に依つては支持されて居無いのだ。

歴史的人物へ民衆の結合意志が委任されて居るといふ理論は、或は法學の領域に於ては、多くの事を説明し得るかも知れぬので、それは、さういふ目的に對しては切要なものでもあらう。が、歴史にそれを應用することになるといふと、革命や、戦争や、國內の騷擾が起るや否や、歴史が眞個に始まるや否や——この理論は、何にも説明し得無い。

この原理は、論破し難く見える、が、それは、國民の意志を委任するといふ行為は、それは決して存在したことがあるものではないのであるから、何うしても、その存在を實證し得られるもので無いからに過ぎ無いのだ。

何ういふ事件が起るにしても、何ういふ人がさういふ事件に於て主導しても、理論は、結合的意志がその人に附與されて居るのであるから、さういふ人がその事件を起させることに於て主導したのだと、何時も云ひ得るのだ。

この理論に依つて、歴史的諸疑問に向つて與へらるゝ答は、羊群の運動を見て居て、野の種々な部分に於ける牧草の種々な性質とか、牧羊者の行動には少しも注意せずに、羊群が此の方

向を執るとか、彼の方向を執るとかの原因をば、單に、その羊群の最先頭に居合はせた羊の裡に索めるところの人の答と同一なものであるのだ。

「羊群は、その先頭に居る羊がそれを導くので、この方向に動くのだ、で、總て他の羊の結合意志が羊群の主導者に委任されて居るのだ」

斯ういふのが、強權への意志の無條件の委任といふ事を想像するところの第一の種類の歴史家等が與へる答なのだ。

「羊群を導いて居るところの羊どもが、他のものと代るとすれば、それは、總ての羊の結合意志が、最初の主導者は、總ての羊群に依つて選ばれた方向を守ら無いといふ事實の爲めに、一の主導者から他の者へと移附されたといふ事實から起るのだ」

斯ういふのが、民衆の結合意志が、何だか分ら無いものと見做されて居る諸條件に於て、その治者等に附與されるのだと假定して居るそれ等の歴史家等の答であるのだ。(觀察のこの方法を以てしては、觀察者が自分が選んだ方向から判断して、民衆の方向が變つた場合には、先頭に居る者では無く、横に居る者とか、時としては、一番最後に居る者どもをば主導者と認めるといふことが、極く屢起るのだ)。

「最先頭に居る羊どもが、始終變り、羊群の執る方向が又始終變つて居るとすれば、それは、吾々にまで分つて居る或る方向に達する爲めに、羊どもが、彼等の意志をば、吾々の注意を引き付けて居る羊どもへと委任したといふ事實から起つて來るのであつて、その羊群の諸運動をば研究しようといふには、吾々は、羊群の總ての側に於て動いて居る眼に付く總ての羊をば觀察するべきものだ」

さういふ風に、君主等から新聞記者等に至るまでの一切の歴史的人物をば、それ等の人々の時代の表現として受け入れるところの第三の種類の歴史家は、云ふのだ。

民衆の意志が、歴史的人物へと移附されるといふ理論は、單に、意譯——即ち、單に、問題をば他の言語で云ひ換へたもの——に過ぎ無いのだ。

何が歴史的事件の原因であるのか? 權力だ。

權力とは、何であるか? 權力は、一人の人に附與されたる民衆の結合意志である。

何ういふ條件に於て、民衆の意志が一人の人に附與されるのであるか? その人が、民衆の意志を表現するといふ條件に於てある。

即ち、権力は、権力であるといふのだ。即ち、権力は、その意味が吾々には何うしても領會し得られ無い語であるのだ。

人間の智識の領域が、抽象的推論にのみ限られて居るものであつたら、さうすれば、科學に依つて與へられたる権力の説明をば批評にかけた後では、人類は、権力といふものが唯だの語に過ぎ無いものであつて、實際に於ては、何等の存在をも有して居無いものであるといふ結論に達するに違ひ無い。

けれども、諸現象を知るといふ事に向つては、人間は抽象的推論の他に今一つの道具——即ち、經驗といふもの——を持つて居て、それに依つて、推論の結果の眞否を確かめるのだ。所で、經驗は、権力が單に語であるのみに止まらずに、實際存在して居る現象であるといふことを、吾々に語げるのだ。

人間の結合行動の唯だ一つの記述でも、権力の觀念をば見通し得無いものであるといふ事實のことは、何にも云は無いにしても、権力の實在は、歴史に依つてのみならず、同時代の事件の觀察に依つて、吾々に示されるのだ。

一事件が起るといふと、何時でも、その人の意志に依つて、その事件が成し遂げられたと認められるところの一人の人、若しくは、幾人かの人が現はれて来る。

ナポレオン三世が一命令を出す、さうすると、佛蘭西人が墨哥西へ行く。

普魯西王とビスマルクが或る命令を出す、さうすると、軍隊がボヘミヤへ行く。

ナポレオン一世が一命令を出す、さうすると、兵士等が露西亞へと進軍する。

アレクサンドル一世が一命令を出す、さうすると、佛蘭西人がブルボン家に服従する。

經驗は、何ういふ事件が起つても、その事件は、それがさうあるべき事を命令した一人の人の意志、若しくは、幾人かの人の意志と何時も結び付けられて居ることを、吾々に示すのだ。

歴史家等は、人事に神が干與することを認める古い習慣からして、その事件の原因をば、権力を賦與されて居る人の意志の行使のうちに、索めやうとするのだ、けれども、さういふ結論は、人間の理性に依つても、經驗に依つても、確保され無い。

一方に於ては、人間の理性が、一人の人の意志の表現——即ち、彼の言語——は、實際、革命とか、戦争といふやうな一事件の裡に表現された全般的活動の一部分に過ぎ無いのであるから、領會し難い、超自然的の力——即ち、奇蹟——の存在を假定し無い限りは、さういふ言

語が何百萬もの人間の運動の直接の原因であるといふことは、容認し得られ無いといふことを、示めすのだ。

他方に於ては、今假りに、言語が一事件の原因であり得るといふことを容認するとして見たにしても、歴史は、歴史的人物等の意志の表現は、先大抵の場合に於て、何の効果にも達し無いものだといふこと——即ち、彼等の命令は實行せられ無いたことが屢であるのみならず、實際、時々、彼等が命令したものは全く反対な事が爲されるものだといふこと——をば、吾に示めすのだ。

人事に神が干渉するといふことを容認せざる限りは、吾々は、権力をば事件の原因として受け容れることは能き無い。

経験の見地から云へば、権力は、一人の人の意志の表現と、他の者に依つてのその意志の實行との間に存在するところの依屬物に過ぎ無いのだ。

その依屬の諸條件を説明しやうといふには、吾々は、先づ第一番に、意志の表現といふ觀念をば、神に歸せしめず、人間に歸せしめて、立ち直らせ無ければなら無い。

若し、古代の歴史が吾々に語げるやうに、神が命令を出し、自分の意志を表現するものとす

れば、神は事件とは何の關係も持つものでは無いからして、その意志の表現は、時からは獨立したものであつて、何物に依つても喚び出され無いものであるのだ。

が、吾々が、時の内で働きそして相互に結び付き合つて居る人間の意志の表現であるところの命令のことを、云ふ場合には、吾々は、若し吾々が事件と命令との結合的關係をば理解しやうといふのであつたら、次のやうな條件を設定し無ければなら無い——

(一) その下に有ゆる物が起る條件、歴史的運動、並びに、命令を出す人の働きの、時の内にての連續、それから、

(二) 命令する人が、その命令を實行する人々に對して立つ避け難き關係の條件。

(六)

時といふものから獨立して居るところの神の意志の表現のみが、五六年の間、若しくは、數世紀間に亘つてで無ければ起り得無い諸事件の全連續に關係し得るのであり、そして、自分の意志のみで働いて、何ういふ原因からも影響を受け無い神のみが、人間全體の運動の方向をば決定し得るのだ。けれども、人間は、時といふもの、うちで働き、そして、自分自身も、その

事件に與るものであるのだ。

これまでは看過されて居た第一の條件、時といふ條件をば、持ち出して來るといふと、吾々は、一個の命令は、それが何様なものであつても、その最後の命令をば能き得るものにしたところのその前の諸命令と全く離れては實行され得るもので無いことを、認める。

一個の命令が、全く獨立して、專斷的に、出されることは、決して無いし、又、それが、諸事件の全連續をば蓋ふことも、決して無い。

何様な命令でも、皆悉く、或る他の命令の後を受けたものである、そして、それは、決して、諸事件の全連續には關係するものでは無くして、さういふ諸事件中の或る一刹那へのみ關係するものであるのだ。

例へば、吾々が、ナポレオンは軍に命令して戦に行かせたと、云ふ時には、吾々は、一言で以て、相互に依屬し合つて居る連續的命令の連續をば、總計するのである。

ナポレオンは、露西亞に對する戦役を命令することは能き無かつたし、又、決してそれを命令もし無かつたのだ。

彼は、或る日、維也納や、伯林や、彼得堡へ或る書類を書いて遣るやうにと命令した、次の

日は、陸軍へ、海軍へ、兵站部へといふ風に、或る命令や、指圖をば幾つも書いて遣ることを命じた——即ち、さういふ風に出した別々の命令の數百萬が、佛蘭西の兵士等をば露西亞へと導いた諸事件の連續に符合するところの命令の全連續を成して居るのだ。

ナポレオンは、彼の治世ちう始終、英吉利征伐に對する命令を出して居た。彼の企畫の軌に對しても、彼は、それ程の時と、それ程の努力とを空費しはし無かつた、けれども、彼の治世ちう、唯だの一度と雖も彼の計畫を實行しようといふ企は爲され無かつたのだ。けれども、彼は、彼の幾度も公言した確信に従へば、それと同盟するのが彼の利益であるといふのであつた露西亞に對する遠征を爲した、所で、斯ういふ事は、彼の命令が、第一の場合には、諸事件の進行に符合し無かつたのだが、第二の場合には、諸事件の進行に符合したといふ事實から起つて居るのだ。

一個の命令が、確に實行される爲めには、人が實行され得る命令を出すことが必要であるのだ。何ういふものが實行せられ得るものであるのか、何ういふものが實行せられ得無いものであるのか、それを知ることが、數百萬の人々が與つたところの露西亞に對するナポレオンの戦役の場合に於てのみならず、尙又、最も單純な事件の場合に於てさへも、不可能なものである。

何となれば、障碍の數百萬が、何時でも、その命令が實行されるのを妨げるやうに起ることがあるからであるのだ。

實行されるゝところの命令は、孰も、實行され無ゝところの幾個もの命令の集團の中の一つで、何時もあるものなのだ。

總ての不可能の命令は、諸事件の進行とは矛盾したものである、で、實行され無ゝのだ。可能であるところの命令のみが、諸事件の連続と一致せる命令の相續いた連続と結び付けられるのみであるのだ。

事件の前に出る命令が事件の原因であるのだといふ吾々の間違つた觀念は、その事件が起つて、命令の何千ものうちで諸事件の進行と偶一致するやうになつた僅の命令が實行されるといふと、吾々は、實行されることの能き無ゝものであつたが爲めに實行せられ無かつたところの幾個もの命令があつた事をば忘れて了まうといふ事實から起るのだ。

またその他、吾々の間違の根源は、歴史上の記述に於ては、例へば、佛蘭西の兵士等をば露西亞へ導いた總ての事件のやうな無數な、種々な、最も瑣細な諸事件の全連續が、さういふ諸事件の連續に依つて起された結果に従つて、一個の事件に總括され、それから同なじやうな總括に依つて、諸命令の全連續も亦意志の一個の表現にまで總計されるといふ事實から起るのだ。

吾々は、ナポレオンが露西亞を攻めようと思つた、で、彼はさう爲たのだと云ふ。實際に於ては、吾々は、ナポレオンの總ての行爲の裡で、その計畫の表現のやうなものは、何一つと雖も、決して見出しはし無ゝ。吾々が見出すのは、最も種々な、不定の傾向の諸命令、若しくは、さういふ彼の意志の諸表現の連續であるのだ。

實行せられ無かつたナポレオンの無數の命令の多くの連續のなかで、千八百十二年の戦役に對する諸命令の一連續のみが實行せられたのだ。が、それは、實行せられた諸命令と、實行せられ無ゝ諸命令との間に何か根本的な差異があつたからといふのでは無くして、單に前者の方が、佛蘭西の兵士をば露西亞へと導いたところの諸事件の進行と符合した爲めのみであつたのだ。即ち、それは、丁度、吾々が形付紙で形を付けることが能きるのは、色がその形付紙の何所へ付けられるとか、何ういふ風に付けられるとかいふのでは無くして、形を含んだ紙全體に色を塗抹る爲めであるのと同じなのだ。

で、命令と事件との關係をば善く調べるといふと、吾々は、命令といふものは何うしても事件の原因ではあり得無ゝで、この兩者の間には或る極まつた繋依が存在するものであること

を、見出すのだ。

この繋依が、何ういふものから成り立つて居るものであるかを理解しようとするには、吾々が見失つて居た他の情境、即ち、神から出るので無くして、人間から出るところの何の命令にも伴ふところの一條件を返すことが切要である。その情境といふのは、命令を與へるところの人は、彼自身も亦事件に與るといふことであるのだ。

命令する人が、彼に命令される人に對して持つその關係が、實際權力と呼ばれる、ところのものその物である。

その關係は、次のやうに解析され得る――

共同の行動に向つては、人間は、何時でも、或る結合を爲すのであるが、その結合に於ては、共通の行動に於て目ざした目的の相違に拘らず、その行動に與るところの人々の間の關係は、何時も同じであるものなのだ。

さういふ結合で合同するといふと、人間は、何時も下のやうな關係に立つものだ、即ち、さういふ人間の大多數が、彼等が合同した結合行動に於て、幾らか多く直接である働きを爲し、その他の少數が、より少く直接である働きを爲るものなのだ。

人間が、共同行動を爲し遂げんが爲めに、組織されるところの總てのさういふ結合の中でもつて、最も著しい極まつた實例の一つは、軍隊である。

軍隊は、何れでも、低い軍事的位置の者ども――何時も、全體の最大部分であるところの兵卒――と、今ホンの少し高い軍事的位置の者ども――兵卒よりは数が少いとところの伍長や、準士官――と、尙一層、數の少ない少し高い將校と、それから、だん／＼上へ行つて、總ての統率をば一身に聚めて居るところの人に至るまでの人々とで、成り立つて居るのだ。

軍隊組織は、圓錐形の物と全く同なものであつて、その根の最も直徑のある所が、兵卒で成り立ち、次の少し高い、少し小さい平面が、下級の將校で成り立つといふ風で、圓錐形の頂點まで行つて居て、その頂點が總司令官といふことになつて居る。

最大數であるところの兵卒が、圓錐形の最低の平面、即ち、根を成して居る。兵卒は、彼自身で他人を刺し殺したり、斬つたり、家を焼いたり、掠奪したりするのであつて、さういふ行為を爲すべき命令をば、何時も、彼より直ぐ上の平面に居る人々から受け取るのだ。兵卒は、彼自身では決して命令を與へ無い。

準士官(それは數に於ては兵卒より少いのであるが)は、直接の行為を爲すことは、兵卒より

少し稀である、が、彼は命令を出す。

その直ぐ上の將校は、自身では、尙一層稀にしきや直接の行爲を爲無い、そして、尙一層度命令する。

將官は、軍を命令する外何にも爲無い、で、武器を用ひることは殆ど全く無い。

總司令官は、決して行動そのものに直接に與ることは無い。で、唯だ、單に、群衆の諸運動に就いての全般的の取り極めを爲るのだ。

同なじやうな關係が、共同行動に對する人間の有らゆる結合に於て——農業に於ても、商業に於ても、その他、活動の有らゆる部門に於ても——存在して居る。

であるから、圓錐形の總ての込み入つた平面、軍隊の階級、有らゆる官省の種類若しくは階級、公務の有らゆる種類をば、上から下まで態々細に解剖せずとも、次のやうな法則が存在するやうになるのだ——即ち、人間は共同行動を成し遂げる爲めに集まる場合には、下のやうな關係になるのだ、即ち、彼等が行動に與ることが直接であればある程命令をすることは少くつて、その數は多い、が、彼等が共同行動に直接に與ることが少くなればなる程命令をすることは多くつて、その數は少い。で、さういふ風で、下の層から頂上に居る一人の人へと昇つ

て行くのであつて、頂上に居るその人は、行動には直接に與ることは最も少く、そして、他の何人よりも多く、彼の精力をば、命令を出すことに、全く委ねて了まうのだ。

これが、命令する人々が、命令される人々に對して有する關係であるのだ。で、これが、權力と呼ばれるところのもの、觀念の要素を成して居るのだ。

その下に總ての事件が起るところの、時の諸條件を持ち返つて來るといふと、吾々は、命令は、それが諸事件のそれと符合した進行に關係する場合にのみ實行されるといふ事を見出すのだ。

命令するところの人々と、その命令をば實行する人々との間の關係の根本的條件を持ち返つて來るといふと、命令するところの人々は、彼等の本質上、行動その物には極めて少しきや與ら無いで、彼等の精力は特に命令することばかり向けられるのだといふ事を見出す。

(七)

或る事件が起るといふと、人々は、その事件に關して各自の説や願望を云ひ表はす、そして、その事件が多くの人々の結合行動から出るものであるといふと、云ひ表はされたさういふ説や

願望の中の或るものが、寸毫でも實行されるといふ所までも行か無いことのあるのは確である。所が、云ひ表はされたる説の中の一つが實行されるといふと、その説がその事件に先立つた命令として、その事件に結び付けられるのだ。

幾人かの人が丸木を引ずつて居る。誰もが、それを何う引ずれば宜いかとか、何所へ引ずつて行くべきかとかいふ事に就いての各自の説を云ひ表はす、人々が丸木を引ずつて了まう。すると、それは、人々の中の一人が助言した通りに引ずられたのである事が知れる。

さうだとすれば、その人は命令を與へたのだ。

これが、命令するといふ事であると同時に、原始的な状態の権力である。

自分の腕を以て最も多く働いたところの人は、自分が爲て居た事柄をば、考へ得ることの少いものであり、何ういふ事かその共同行動から起つて來るかといふことを思ひ廻らし得ることが最も少く、で、命令することが最も少いのだ。

命令したところの人は、その人の言語の上の活動がより多いのであるから、自分の腕を以ては餘り強く働き得無いといふことは、見易い道理である。

一個の目的に向つて、各自の精力を結合させるところの人間のもつと大きい集團に於ては、

共同の仕事に於て直接に與ることが少ければ少い程、その人々の精力がより多く命令することに向けられるといふやうな人々の類別は、尙一層際乎したものととなるのだ。

人が單獨で働く時には、彼は何時も自分の心の裡に考量の或る連續を持つて居るものであつて、その考量は、彼の想像するところに従へば、彼の過去の行爲を指導し、彼の現在の行動をば彼に向つて正しいものと思はせ、それから、彼の未來の活動に向つての計畫を造るやうに彼を導くものであるのだ。

幾人もの人々の集團も亦それと同なじやうに働くのであるが、その場合には、彼等の結合活動に關する考量や、理由や、計畫を發明することは、行動に直接には與ら無い人々に委してしまつて居るのだ。

吾々に分つて居る諸原因、若しくは、吾々に分つて居無い諸原因に依つて、佛蘭西人が相互に切り刻み合ひ始めた。と、その事件に相當させる爲めに、その事件が佛蘭西の爲めに、自由の爲めに、平等の爲めに切要であつたと公言するところの或る人々の云ひ表はされたる意志に依つてその事件が起つたのだといふ辯明を添へられる。

人々は、相互に屠殺し合ふことを止めた、と、その事件には、権力の集中、歐羅巴に對する

抵抗、その他が必要であつたのだといふ辯明を添へられる。

人々が、彼等の同人類を殺しながら、西方から東方へと進む、と、その事件は、佛蘭西の國威とか、英國の奸惡とか、その他のものに關する語句を添へられる。

歴史は、その事件に對するそれ等の辯明は、總ての常識に缺けて居るものであつて、例へば、人間の權利の宣言の結果として、一人の人を殺した事とか、英國を屈服させる爲めに露西亞に於て何百萬もの人々を殺した事とかいふが如く、さういふ辯明は、相互に撞着し合つて居ることを、吾々に教へるのだ。が、さういふ辯明は、彼等自身の時代に於ては、争ひ難き價値を持つものである。

それ等の辯明は、さういふ諸事件をば起させた人々から、精神上の責任をば取り去つてしまふのだ。その時代に於ては、さういふ辯明は、列車の通る爲めに、軌道を掃除する爲めに、その前面に付いて居る掃除器のやうなものである。彼等は、人間の精神上的責任の路を掃除するのだ。さういふ辯明を外にしては、如何なる歴史的な事件を調査する場合に於ても、直ぐに人が出會ふところの最も見易き疑問、即ち、「何うして何百萬もの人間が罪を犯し、虐殺を爲し、戦争を爲し、といふやうな事を爲る爲めに結合するやうになつたのであるか」といふ疑問に對しては

何等の解決も見出し得られ無いのだ。

歐羅巴に於ける政治的社會生活の現在の如き複雑なる形の下では、或る王や、大臣や、國會や、若しくは、新聞紙に依つて定められず、命せられず、命令され無かつたらうと思ふやうな事件は、如何なる事件でも想像せられ得無いで無いか？

其處には、政治上の同盟とか、愛國心とか、國力の平衡とか、文明とかの裡に、その存在の辯明を見出し得無いやうな結合的行動の其様な種類のものが、一つでもあるか？

さういふ風で、起るところの有らゆる事件は、或る云ひ表はされたる願望と何うしても一致することを避け難いのだ、そして、それが正しいといふ辯明を受け取つて、一人、若しくは、一人以上の人々の意志の結果と見做さるゝのだ。

船が動くとする、その船は、何ういふ方向へその進路を向けるにしても、その前方にはその船が切るところの波の流があるだらう。船の中に居る人々に取つては、それ等の波の運動が見られ得る唯一の運動であるであらう。

唯だ、刹那を逐つて、その流の運動を嚴密に見て居り、そして、それを船の運動と比べることに依つてのみ、吾々は、刹那毎に、波のその流れ去ることが、船が前の方へ行く運動の爲め

に起るのであつて、吾々自身も亦動きつゝあるといふ事實の爲めに船が動いて居無いだと思ふやうな間違へと導かれたのであるといふことを、確信し得るのだ。

吾々は、刹那を逐つて、歴史的人物の運動を見て居ることに依つて（即ち、總ての行動が起るところの避け難き條件——時の中での運動の繼續の條件——をば、持ち返すことに依つて）、そして、民衆と歴史的人物との必然的結合關係を見失は無いやうにすることに依つて、船の場合同じごとを見るのだ。

何様な事が起つても、それは、先見され、規定されて居たやうに、何時も見えるものだ。何方の方向へ船が向いても、波はその前に於て沸き返へる、そして、それは船の運動を導きもし無ければ、速めもし無いに拘らず、遠方から見れば、獨立して動いて居て、船の進みをば導いて居るやうに見えるのだ。

命令として事件に關係して居るところの、歴史上の人物の意志のそれ等の表現のみを調べて、歴史家等は、諸事件が命令に依屬して居るものだと假定して了まつた。

が、諸事件その物と、歴史的人物が民衆に對して立つところのその結合的關係とを調べて、

吾々は、歴史的人物及びその命令が、事件に依屬して居るものであることを見出したのだ。

この演繹が間違で無いといふ争ひ難き證據は、何れ程多くの命令が出さるゝにしても、事件は、それを起させるべき他の原因が一つも無ければ起るもので無いといふ事實の裡に見出され得るのだ。が、一個の事件が——それが何ういふものであつても——起るや否や、種々な人々の意志の總ての表現の中に、其所には何時も、彼等の意味からして、及び、それが云ひ表はされたる時期からして、命令として事件に結び付けられるところの或る物があるのだ。

この結論に達したところでもつて、吾々は、歴史の次のやうな二個の根本的疑問に對して、直接に、そして、確定的に答へることが能き——

(一) 権力とは何であるか？

(二) 何ういふ力が國民の運動を起させるのであるか？

(三) 権力とは、或る人が他の人々に對して有する關係であつて、その關係に於て、その人は、或る行爲に直接に與ることが少ければ少い程、益多く、その結合的行動に就いて、説や、理論や、辯明を云ひ表はすのだ。

(四) 國民の運動は、歴史家等が想像し來つて居るやうに、権力の行使に依つては起らせら

れ無い、又は、智力的活動に依つても、又は、その二つの結合に依つて、さへも起らせられ無い、然し、それは、事件に與る總ての人々——即ち、行動の内でも最も直接な働を爲るところの人々は、その行動に對しての責任をば最も少く負ひ、その行動の内でも直接の働を最も少く爲る人々は、その反對に責任を最も多く負ふといふやうな風に何時も結合して居るところの總ての人々——の活動に依つて起らせられるものである。

その精神的状態に於ては、事件の原因なるものは、権力として領會される、その形體的状態に於ては、それは、その権力に從はされたところの人々として領會される。が、精神上的の活動といふものは、形體的状態から離れては領會し難きものであるから、事件の原因は、前者の裡に於ても、後者の裡に於ても見出され無いで、その二者の結合の裡に於て見出されるのだ。

若しくは、換言すれば、原因の觀念は、吾々が調べつゝある諸現象へは適用し得られ無いものなのだ。

吾々の終極的解剖に於て、吾々は、『永遠』といふもの、圏内、即ち、その最遠の極限——それにもまだ、人間の智力が、若しそれが單にその主題をば弄んで居るので無ければ、思想の

有らゆる方面に於て持ち來たされるものであるところの最高の極限——へと持ち來たされるのだ。

電氣が熱を起らせる、熱が電氣を起らせる。分子が相引く、分子が相互に反撥する。熱し、電氣と、分子の相互關係のことを云ふ場合に、吾々は、何故それがさうであるのか、云ふことは能き無い。で、吾々は、さうより外に考へやうは無いのであるが故に、それがさうで無ければなら無いが故に、それが法則であるが故に、それがさうであると云ふのだ。

同なじ事が、又、歴史的現象にも當て箱まる。

何故、戦争とか、革命とか、起るやうになるのであるか？ 吾々は知ら無い。吾々は唯だ人々が、何方かの結果が起るやうにさせる爲めに、或る結合にまで自分等を造つて、そして、その中で衆皆が働くといふことを知つて居るのみである、で、吾々は、それがさうより外考へやうが無いのであるが故に、それが法則であるが故に、それがさうであると云ふのだ。

(八)

若し、歴史が、外的諸現象を取扱は無ければならぬものであつたら、この單純な、見易い